
緒方勇吾の恋愛事情

龍之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緒方勇吾の恋愛事情

【Nコード】

N9280A

【作者名】

龍之介

【あらすじ】

俺は緒方勇吾。多少喧嘩っ早いが、特徴といえばそれだけの、ただの高校生だ。彼女なし、部活もなしと少々面白味には欠けるが、平穏な毎日を過ごしていた。んだけど——どうも最近風向きがおかしい。ちよつとした偶然から知り合った二人の同級生、紅葉と紫亜。双子の姉妹でもあるこいつらと関わってから、何か知らんがえらい事に——ええい、俺の平穏はどこ行った！？*****何故か拳が飛び交う、ちよつと野蛮なラブコメディ。

受難開幕

厚い雲に空が覆われ、月明かりも大地に届かない夜。

世界はひたすらに暗く、空気すらどんよりと停滞している。今夜は、そんな夜だった。

「——あー、くそ」

温度の低い、鬱々とした溜め息を吐きつつ、少年——緒方勇吾は携帯の液晶画面に映る文字を眺める。次いで、昨日とある少女に手渡された、淡いピンク色の手紙に視線を投げて、再び先程より長く深い溜め息を吐いた。

少年の名は緒方勇吾。

近所の高校に通う、十七歳。

特に取り柄といえるほどのものもない、ただの少年である。ただ、過去の話であれば、中学時代には空手の全国大会で優勝したことがある。それが唯一、自慢といえれば自慢になるだろう。

容姿に関しては、彼の友人曰く「二枚目の端っこに引っ掛かるくらい」である。

微妙な評価だ。悪くはない、ということなので、あるいは喜ぶべきなのかもしれないが。

それはともかく、だ。勇吾は今、ちょっとした悩みを抱えている。いや、ちよつとした、というほどに簡単なものではない。

その悩みの種は昨日、勇吾に植え付けられたもので——今のところ、解決の兆しすら見えていない。

とある二人の少女——ほんの一月前には殆んど関わる事の無かったはずの、姫神紅葉と姫神紫亜。彼は何の因果かこの二人に同時に告

白されてしまったのだ。

そのどこが悩みなんだという男性陣の叫びが聞こえてきそうだが、彼にしてみればこれは立派に苦悩の種である。

……この二人に魅力がなければ振ってしまえばそれまでの話だ。が、彼女たちはこの上なく魅力的であり、彼——勇吾は十分以上に魅了されていた。

つまり……勇吾はその少女たちが、二人とも気になって、選ぶことが出来ないでいるのだ。

さらにややこしい事に、彼女たちは双子の姉妹なのだ。仮にどちらかを選べば間違いなく後に禍根を残してしまう。

——ともあれ。勇吾は二人の少女に思いを馳せながら、深くため息を吐くしかなかった。

受難開幕2

姫神姉妹の姉、紅葉というのは、勇吾が知る限りこんな少女だ。快活で行動的。勉強よりはスポーツが得意なタイプで、友人も多く、彼女を嫌う人間は殆んどいないだろうと言われている。

そして。彼女に目を向けてもっとも印象深いのは、恐らくその容姿だろう。

文句なく整った顔全体の造作に、人目を引く勝気そうな瞳。

よほど偏屈な好みの持ち主でない限り、ほぼ間違いなく美少女と断じていいだろう。

そのため、入学してから今までに二桁以上の男子生徒（+男性教諭一名）に求愛されたらしい。……噂によると、その全てが玉砕に終わったそうなのだが。

さて、妹の紫亜は姉とは正反対で、落ち着いた雰囲気少女だ。ただ、容姿に関しては姉に劣らず整っており、控え目なイメージと合わせて危なげな魅力を放っている。

紫亜も告白された数は二桁以上だそうで——何故か女子生徒もいたそうだが——撃墜数は100%だったらしい。

因みに勇吾と紫亜はかなり昔に会ったことが有るのだが、彼は彼女と再会するまでは完全に忘れていた。

まあ、それはともかく、姫神姉妹の紹介は十分だろう。

「…それにしても、何でこんなややっこしい状況になっちゃったんだろうな？」

勇吾ははなんとなしに言葉に出して、疑問を反芻する。頭の中で時

間を遡り、原因を思い出す。

「ああ、思い出した。確かあのアホンダラが原因だったな……」

思い浮かんだのは、いつも馬鹿面下げてる友人の顔。

そう、この物語の始まりは……彼の小学生からの友人である、『迷惑製造機』こと西口弘平から届いた、一通のメールだった。

姫神姉妹との遭遇（前書き）

今回はバトル部分が多いです。ラブやコメディを期待していた方には申し訳無いです。次あたりからラブもコメディも入る予定です。

姫神姉妹との遭遇

とある日曜日の午後、部活もやっておらず、さりとて彼女が居るわけでもない勇吾は、暇を持て余していた。

起きてるんだか寝てるんだかはつきりしない意識のまま、ベッドに寝転がっていると、不意にケータイが鳴動した。

「……あ？　なんだ、弘平か」

ケータイの画面には友人である西口弘平からのメールが表示されていた。

【よお、暇ならどつか遊びに行かねえ？】

特に断る理由も無いため、【わかった、いつもの公園で合流しよう】と短く返信し、財布と煙草、バイクのキーを持って外に出た。

バイクを走らせること二十分。勇吾はいつも待ち合わせに使っている公園に着いていた。

ゲームセンターの裏側に位置している、遊具も何も無い——あるのはベンチくらいのものだ——公園と言うより空き地のような所である。

「遅えな……何分待たせやがるんだあの馬鹿」

勇吾はベンチに座って弘平を待っていたのだが、いつまで経っても来ない。

「ったく、自分で呼んどいて人を待たせやがるとはな。いい度胸してやがるぜ、あの馬鹿が」

指をボキボキと鳴らしながら、陰鬱に呟く。待つ時間というのは、あまり好きではない。

無意識に、手がポケットに伸びた。煙草を取り出し、啜える。そして、流れるような動作で火を着けようとして——後方から聞こえてきた声に、ふとその手を止めた。

「あー、もうっ。しつこいなあ！ 嫌だっって言ってるの！」
やたらと良く通るその声に、勇吾はなんとなく興味を覚えて振り返った。

振り返った視界に入ってきたのは、微かにだが見覚えのある二人組。それと、まるで覚えのない男たちだった。

（あれは……なんとかかという双子の姉妹か。あーっと、なんつったけ。んー、ああ、出てきた出てきた。姫神とかいったっけな、確か。姉が紅葉で、妹は紫亜……だったか。美人姉妹で通ってるのか。この話は聞いたことあるな、そういや。男の方は知らんが）

ようやく記憶の底から出てきた情報に一人納得して、頷く。
と、そういえば他にも誰かいたよな、と思い出して、勇吾はポンコツの思考能力をフル稼働させた。
結果、

「ふむ。……ありや、ナンパだな。しかも何か難航してるっぽい。
難儀な事だな。俺には関係ないが」
完全に他人事のテンションで判断して、改めて煙草に火を着ける。
ついでに声にも出して、勇吾は気楽に呟いた。

——とそこで、男達が姫神姉妹の片割れ——たぶん姉の方だろう——の肩を掴んだ。どうやら話が上手くいかない事に腹を立てたらしい。間抜けな話だ。

「おーい、最後は力技かよ。そりゃちょっと筋が通らないんじゃないかねの……？」

流石に傍観者でいるのに無理が出てきて、勇吾は眩きつつこめかみを搔いた。

何だか面倒な事になってきたな、と苦くぼやく。

「つつても、あの様子じゃ放置してわけにもいかねえか。今にも引っ叩きそうだな、あのにーちゃん」

啜え煙草でゆつくりと立ち上がり、やれやれと頭を振る。それから、まあ仕方ないか、とぞんざいに割り切って、勇吾はふらりと歩き出した。

* * * * *

「——邪魔すんぞ」

勇吾は啜え煙草のまま、男たちと姫神姉妹の間に割り込んだ。突然の闖入者に驚く両者の間に体を入れて、やや強引に引き離す。

「ああ？ んだデメエ！」

当然というか、邪魔者の存在に苛立つたらしい男の一人が、巻き舌気味に凄んで来る。他の二人も口々に怒鳴って来るが、勇吾は無視した。

（この程度なら、問題なく片付く——やるか）

視線で相手を確認してから、素早く撃退を決定する。と同時に、完全に男たちに向かい合う体勢をつくり、同時に姫神姉妹を背中に庇う。

そのまま、背後に向けて声をかける。

「……あー、あんたら。姫神、で合ってるんだよね？ まあどっちでも良いんだが……。ちょいと騒がしくなる。下がっててくれ」

「え？ あ、うん……」

別にどちらでも良かったが、さっきの声の感じからすると恐らく気が強いであろう紅葉の方に話しかけているつもりではあった。

まあ、結局返事をしてきたのがどっちだかはよく判らなかったが。とはいえ、どのみち結果的に彼女たちが後退してくれるなら問題はない。

とりあえず彼女たちが下がったであろう事を足音に耳を傾けて確認してから、勇吾は男たちに向き直った。

（さて、どうするかな……。問題なく片付くとは言っても、手間を省くに越したことはないし。そうだな……。奇襲で先手を取って畳み掛けるか）

勇吾は心中で呟き、彼らの始末の方法を思考した。見立てでは格下であろう相手なので、戦闘の算段は割合簡単に組み上がる。勇吾は結論を出すと同時に、啞えていた煙草を男の一人に向かって弾いた。顔面に火の着いた煙草を当てられて、マッシュが（三人組みなので、男たちを便宜上マッシュ、オルテガ、ガイアと名付ける）怯む。その隙を狙って、勇吾は駆け出した。

軽く跳躍し、膝をマッシュ目掛けて叩き込む。綺麗に決まった膝蹴りが、マッシュの顔面にめり込んだ。

「プビッ」

と奇怪な——というか愉快な——悲鳴をあげて、マッシュはあっさりと吹っ飛んだ。土煙を上げて地面を削りつつ、あさっての方向に転がっていく。

勇吾は着地と同時に、未だ事態を呑み込めてない様子で目を白黒させているオルテガに向けて大きく踏み込んだ。相手の膝の裏に向けて、踵で踏みつけるようにして蹴り込む。

ガンツと致命的な音をたてて、オルテガの膝がアスファルトに叩き

付けられる。片膝をついた体勢で、オルテガは苦悶の声を上げた。

「あ、ぐがつ!？」

勇吾は膝を抱えて悶絶するオルテガを横目に捉えてから、視線を最後の一人であるガイアに向け、一步近付いた。これで、二人までを無力化した。

あとは――

「……さて、あとはあんた一人だけ？」

「う、うあ……」

倒された仲間たちを見やって、ほぼ絶望的な顔色になるガイア。情けない声を垂れ流して、一步後退する。

それに合わせて、勇吾は一步踏み込む。

ガイアは一步後退。

踏み込む。

後退。

「……阿呆くさいな、これ」

そのあたりで、勇吾は飽きた。冷めた視線を周囲に巡らせて、公園の備え付けのゴミ箱に目を付ける。それにつかつかと歩み寄って、勇吾は片手で、無造作にゴミ箱を持ち上げた。そのまま振り被り、適当に投げつける――

「へ?! つてぎゃああああ!？」

顔面にゴミ箱（金属製。えらく硬い）をモロにぶつけられ、ガイアはあっけなく沈黙した。

「……ま、最後はかなり手抜きだが。とりあえずこんなもんかな」
そう言って、勇吾は振り返った。

そうして――

展開の早さに着いて行けずに、何やら呆然としている姫神姉妹を視界に捉えて、苦笑を浮かべた。

馬鹿、登場！

「怪我はないか？——ええと、姫神？」

勇吾は二本目の煙草に火を着けつつ、未だに呆然としている紅葉達
——のはずだ——に声を掛けた。

「あ、うん。私達は全然大丈夫。ね、紫亜？」

紅葉が同意を求めるように、傍らの少女に確認する。どうやら、彼女たちは姫神姉妹で正解のようだった。

「うん。私は大丈夫」

紫亜と呼ばれた少女は小さく頷き、答えた。

勇吾は紫煙をくゆらせながら、簡単に相槌を打った。

「さよか。なら問題ねえな」

「それにしても……緒方ってあんなに強かったんだ」

勇吾に粛清された——皆完全に打ちのめされている——マッシュ達に視線を投げて、紅葉がぼそりと言う。

「……ん？ あれ、俺の名前知ってんのか、あんた。いやまあ、同じ学校だし、おかしくはないのか？」

「ていうか、緒方も私たちの事知ってたじゃない。別に、どうというほどの事でもないんじゃないの？」

「……ま、それもそうか」

とりあえず、引っ張るほどの疑問でもないので納得しておく。

と、紅葉はそんな事より、と前置きして、

「あんた、何か凄いいじゃない。噂は聞いていたけど、こんなに強かったんだ」

「あん？ あー、そこそこにはな。つつても、そう大したもんでもないだろ、このくらい。そこのチンピラに負けるほど弱くはねえ

つもりだが、そんだけだぜ？」

「あんだだけ大暴れしといてよく言うわよ。ていうか緒方、片手でゴミ箱投げるってどんな体の構造してんのよ？ あれ、金属製でしょ？」

「どんなって言われてもな。少し鍛えられてるだけの、至って普通な体だと思うんだが」

「んなわけないでしょうに。絶対おかしいって」

突っ込みを入れてくる紅葉に、勇吾はふうむと呻いてみせた。どうやら、彼女はあまり人見知りなどとは縁のない人種のようにだった。中々にあっさりと会話が続く。

と、そこで、勇吾は不意に視線を感じた。

なんとなく見当をつけて、紅葉の隣——紫亜の方を窺うと、彼女が何かを思い出そうとしているような、難しい顔でこちらを見ているのが見えた。

その視線が、なんとなく自分の瞳に向けられているような気がして、勇吾はふと声を掛けた。

「あー、どうした？ まあ、なんとなく予想は付くんだけだよ」

勇吾は自分の瞳を指差して、そう言った。

勇吾の瞳は日本人らしい黒ではなく、翠^{みどり}だった。どうも先祖——というほどでもないが、とにかく血縁の者の誰かが外国人らしく、その遺伝が原因ではないかと勇吾は思っている。確認をしたことはない。というか、面倒な家庭の事情があるので、とてもではないが出来たものではない。

昔はこの色違いの目のせいで散々いじめの的になったのだが、それはまあ、今はどうでも良いことだった。

いきなり話しかけられた事に驚いたのか、彼女は一瞬ピクリと反応したものの、

「……何でもない」

と言つてと目を反らし、それきり黙りこんだ。彼女の方は、しっかりと初対面らしい反応である。

（ふむ、嫌われたかね？ つつても何か悪い事したか、俺？）

まあ、先ほど目の前で大立ち回りを演じたばかりなので、敬遠されているのかもしれない。

ぼんやりとそんな事を考える。まあ、それが当たつていようと外れていようと、別にどうでも良い事ではあった。

と。そこで、勇吾の背後から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「おい勇吾ー！ すまん遅れた。しかしここは広い心で許すべし！ ……つて何い！？」

そこに居るのは、まさか麗しの姫神姉妹！？ しかも何故か勇吾と親しげに会話してる！ 馬鹿な、これは邪神復活の前触れか！？」

声の主、一応付き合いただけは長い友人である西口弘平は、現れるなりそんな事を叫んだ。

「このままでは我が校きつての美人姉妹が勇吾の毒牙に……！ どうする俺！？ 今が選択の時なのか！？」

「30分近く遅刻した拳句に開口一番言うことがそれかそーかなら俺にも考えがあるぞ齒あ食い縛れコラアアア……！」

意味不明な言葉を垂れ流す弘平に、勇吾は全力で駆け出して全力で踏み出し、全力で拳を固めて全力で飛び掛る。それから、勢いに任せて全力で弘平の顔面をぶん殴った。きりもみしながら吹っ飛ぶ馬鹿。響く悲鳴。なんとなく漏れる勇吾の呟き。

「悪は去った」

なんだかもう、色々と末期だった。

* * * * *

「ほうほう。なるほど。そういう事があったのか」

勇吾の鉄拳制裁によって悶絶していた弘平は、わりとすぐに――普通なら顔面が爆砕しかねない一撃だったのだが――復活した。意味恐るべき回復力である。

今は『ナンパ男撃退』の説明を聞いて、しきりに頷いている。かくかくと一定間隔で。

こつという玩具が昔あったな、と勇吾は何の関係もない感想を持った。

「……さて、それじゃ行くか。とりあえず、ゲーセンでも荒らすかね」

勇吾は待ち人たる弘平が来た事でこの場に留まる理由がなくなったので、相方を促して、その場を立ち去ろうとした。

「まあ待てよ。勇吾」

「……何だよ」

勇吾の疑いの視線をスルーしつつ、弘平はわざとらしく咳払いした。非常に判りやすい男である。

「ゴホン。えーと、姫神さんだよな。今日これから暇？ 暇だったら俺達と遊びに行かない？」

ゴンッ。

勇吾は無言で弘平の頭を殴った。割と本気だった。

「いってえええ！あにすんだよアホ勇吾！」

「アホはお前だクソ虫。さっきの話を聞いてなかったのか？ こいつらはナンパ野郎共につきまとわれて困ってたんだ。面倒なのをこらえつつ折角殲滅したのに、お前が姫神をナンパしてどーする」

「別に構わないよ」

「ほら姫神もこう言ってるじゃねえか。……って、あん？ 良いのか、お前？」

「うん、良いよ。暇だからブラブラしてただけだし。紫亜も良いよね？」

「……うん」

紫亜は何故か勇吾の方をちらりと見てから、頷いた。

「いや、でもな。なんつーかよ……」

あまり女と接するのが得意ではない勇吾としては、なかなか乗り気にはなれない。正直、困る。

「えー。緒方は私達と遊ぶの、嫌なの？」

「嫌とは言わんが」

「じゃあ良いじゃん。私達とデートなんて滅多に出来ないよ？ さっきのお礼がわりに有り難く受けとりなさい」

勇吾は悪戯っぽく片目を瞑って言う紅葉に、苦笑というにはやや苦味の足りない曖昧な表情になった。

（やれやれ。何だか知らんがえらい地雷を踏んだらしいな）

呟く。しかしまあ、踏んでしまったものは仕方がない。このまま足を離せば爆発するのは確実なのだ。ならせめて、覚悟くらいは決めておくでしょう。

「了解。お供させてもらいますよ、おじょーさん」

皮肉気に肩を竦めながら、そういえば今月金は大丈夫だったかと心配しつつ、勇吾は本日三本目の煙草に火を着けた。

蘇る過去

まず勇吾達が向かったのは、公園から二分とかからない所にあるゲームセンターだった。

特に目的があるわけではないので、適当に目についたゲームをやる事にする。

最初にやったのはシューティングゲームだった。銃の形をしたコントローラーでゾンビを撃ち殺すあれである。

弘平はバカスカとリロードを考えずに撃ちまくり、開始五分でゾンビの餌になっていた。やる事がいちいちアホだ。援護するこちらの身にもなつて欲しいものである。

それを皮切りに、色々と品を代えて、しばらくゲームに興じた。

意外だったのは紅葉がやたらとゲーム全般が上手いことだ。

ゾンビはぐつちやぐちやの粉々になっていたし、カーレースでは他の車を破壊してぶつちぎりのトップ。

格ゲーなんか81コンボとか見たこともないような華麗な連続技で弘平を粉碎していた。

やたらと攻撃色が強いのは仕様だろうか。

ゲーセンを回っている間、紫亜がUFOキャッチャーのヌイグルミをチラチラと見ていたので、ふと思いついて取ってやつたりもした。勇吾はいつも、もう一人いる仲の良い友人を連れてこのゲームセンターに結構通っている。機械の癖も割と知っているのだ。

彼女には『あ、ありがとう……』と、何故か顔を赤らめながら礼を

言われた。

風邪でも引いたのだろうか。だとすれば急な話だ。

——そうして一通り遊んだ勇吾達は、

「遊び足りない！」

と言う紅葉の提案というか、単なる我俣に付き合い、ボーリングに行くことになった。

一番近いボーリング場は二駅隔てた所にあるので、徒歩では少しきつい。いくら若いとはいえ、流石に効率も悪そうである。

「……あー。俺はバイクで行く。別行動になるけど、構わねえだろ？」

勇吾がそう呟く。一応愛車なので、乗れる間は精々乗り回しておきたい。貧乏性な男である。

と、紫亜がふと顔を伏せた。何かを考え込むような顔になり、しばらくその細い顎に手を当てて眉間に皺を寄せていたが、やがて、

「……私、後ろに乗ってみたい」と言った。

勇吾としては特に断る理由も無いので快諾し、電車で移動する弘平達と別れた。

生憎とメットが一つしか無いので取り合えず紫亜に渡し、パトカーに見付からないことを祈りつつ、勇吾はノーヘルで走り出した。いつもはしっかり二つヘルメットを積んでいるのだが、その『いつも』ヘルメットを利用する人間が今は不在であるため、わざわざ降ろしてあるのだった。裏目である。

この辺の警察は中々優秀というか、厄介なのだ。土地柄的に暴走族

が結構多いので、交通違反者には執拗な追走が待っている。見咎められれば、地の果てまでも追いかけてきて交番か警察署に連行され、厳重注意を受けることになるだろう。実はスピード違反の常習犯である勇吾は、こちらの白バイのおっさんとは宿敵同士だったりする。それはともかく。

それ自体はどうと言うこともなかったが、バイクで走っている間には特に会話がなかった。

元々二人乗りは会話には向かないが、それでも何か話したほうが気楽であることに違いなかった。互いをよく知らない者同士での沈黙ほど重いものはない。

そうしている内に、勇吾たちはやたらと赤信号が長いことで知られる交差点に差し掛かった。

と、そこで初めて、紫亜から話しかけてきた。

「あの、ごめんなさい。後ろに乗りたいたんて言っで。迷惑じゃなかった？」

声が少し震えている。もしかしたら男と話すのが苦手なのかもしれない。

「いや、別に構わねえよ」

勇吾は肩を竦めつつ、軽く答える。と同時に、さきほど気になったことを聞いておこうと思い立った。

「ところでさ、さっき会った時、俺の顔……ていうか目を見てたけど、なんで？」

また『何でもない』で済まされるかもしれないと思ったが、他に話すことも見つからないので、勇吾はあえてその質問を口にした。

「あれは…緒方君が、知ってる人に似てたから」

意外なことに、あっさりと会話が繋がった。勇吾はこれなら少しは饒舌か、と納得して、次の質問をぶつける。

「へえ、俺に似た人ってどんな奴？」

「私の…初恋の人。九州の小学校に転校した時の時、いじめられていた私を助けてくれたの」

と、にわかに話の流れがシリアスになってきた。

「その人は、泣いてる私に>泣くなくって言ってハンカチを渡してくれた。……そのあと直ぐに転校してしまって、返す事も出来なくなってしまったけど……」

そう言つて紫亜は鞆から一枚のハンカチを取り出した。青い、男物のハンカチだ。

多分、話に出てきたハンカチだろう。いつも持ち歩いているのだろうか。だとすれば、よほどその思い出が大事なのか。結構な話である。

と、勇吾はふと頭の隅に引っかかるものを感じて、その青色の布切れを凝視した。

何か、違和感が脳裏で小躍りしているような気分だった。

（……あれ？ このハンカチ、どこかで見たよーな気がする……ていうか、今ちらりとハンカチの端に見えたのは多分イニシャルだよな……）

【Y・O】

だいぶ掠れてはいるが、しっかりと読み取れた。違和感が加速する。

……Y・O。

ユウゴ・オガタ。

違和感が確かな形になった。というか、正直大爆発だった。

(……………はい?)

OK、待て俺。勇吾はそう呟いて、どうにか心を落ち着けた。慌ててはいけない。偶然とは時に奇跡的な一致を生むことがある。

(…………でも俺って、祖父さんの家に住んでた頃——小学生の前半は九州に居たよな。確か、小二ん時だったか)

いやいやいや。まさかまさか。偶然の一致だろう。

再び心を静める。深呼吸をひとつして、『Be cool』と唱える。冷静になれ、と。

少し嫌な予感を引きずりつつ、勇吾は紫亜に訊ねた。

「因みに、似てるって何処が？」

「雰囲気とか……………凄く強い所とか。あと……………瞳の色」

言われて、勇吾は呆然とした。特に、最後の一言には絶対の力を感じる。

(…………おい。目だけが翠の男なんて、そうそういるもんなのか? ……俺だって、どう考えても神様あたりが遺伝子の配置を間違えたらこんなんできました、みたいな偶然の産物だったのに。そんなんが、この世にポコポコ散在するのか?)

と、慣れない熟考をする勇吾の脳裏に、ふと閃くものがあつた。

……ある昔の出来事だ。残り滓みたいな掠れた記憶の、ほんの一部。

確か、小学校の二年生の時。

当時、家庭の事情から今住んでいる家にはいらなくなっていて、勇吾は九州の小学校に通っていた。

祖父から空手を少し習っていた勇吾は、力を有り余らせていた。その上『家庭の事情』が原因で毎日を不機嫌に過ごしていたのだ。というか、はつきりと喧嘩三昧な毎日だった。敵にはひたすら事欠かないくらいに。

そんな勇吾はある日、その出来事に遭遇する。いつもとは少しだけ違う、異質な喧嘩だった。

女の子が、いじめられていた。

確か、男子が数人掛かりでやりたい放題やっていたのを覚えている。勇吾はそれを見て——気に入らない、と思った。勇吾は自分と、姉の渚の為だけに喧嘩をする。それが日常だった。だがその瞬間だけは、何故か目の前の光景が、酷く癪に障った。

弱者は強者の前に跪く。当たり前前の光景のはずが、どうしてか怒りを生んだ。

破壊しよう。そう決めた。

そして、勇吾は怒りに任せてその場にいた全員を、一人でたたき伏せた——

回想を終えて、勇吾は内心で呟いた。

(……あの時の奴……いじめっ子どもにやられ放題だったあの女が、目の前の、紫亜?)

だとすれば、彼女の『初恋の人』とやらは、勇吾だという事になる。凄まじい偶然である。だが、時間軸は間違っていない。紫亜が言ったように――勇吾はあの出来事の後すぐに、今いるこの町に引っ越している。

それが、八年もの時を隔てた後、二人が同じ高校に通っていて、尚且つ今こうして再会しているのだ。ある意味、運命的とすら言えそうだった。

……だが、だからどうしろというのだろう。運命的だろうが奇跡的であろうが、当人にはあまり関係ない。正直さっぱりだ。何をどうすれば良いというのか。

「その男って多分俺だよ」

とか言えというのか。阿呆である。いきなりそんな事を言い出したら、それは間違いなく極上の阿呆だ。

そもそも、記憶の上では間違いないものの、これが事実だとは限らない。

しかも、名乗り出たからと言って何がどうなるわけでもない。

(……黙ったところ。いや、もう何て言うか……そっとしておこう……)

勇吾が密かに心の中で呟くと同時に、信号が青に変わった。

(思い出は綺麗なままで。それが一番だ。半端な現実残酷だし。

うん、きつとそうだ)

背筋を流れる冷たい汗を自覚しながら、勇吾はバイクをノロノロと
発進させた。

今スピードを出すと、あっというまに事故を起こしそうだった。

ボーリング（前書き）

更新が遅れました。これからはもう少し早くします。

ボーリング

目的地であるボーリング場には、既に弘平と紅葉がいた。

道が混んでいたわけでもないのだが、と思いつつ、『遅い』とやじる弘平を蹴り倒す。

勇吾は地面とハートフルトークに夢中な弘平を捨て置いて、紅葉と紫亜を連れて受付へと向かった。

復活して追い掛けてきた（毎度思うが、凄まじい生命力だ）弘平と合流して、ゲームを始めた。

「よし！ ここはカッコいい所を見せるチャンスに相違ない！ 見よ、この華麗なフォーム！」

雄叫び一閃。弘平はボールを無駄にキメキメなポーズで投げた。重たい穴ぼこボールは、哀れにも一直線に側面の溝に吸い込まれていく。

「ぬおおお！ 何故だ！？」

「……そりや普段使わない、一番重いボールだしな。思いつきり投げりや良いってmondemoないだろーに、阿呆めが」

ゲーム自体は、まあそんなものだった。

弘平がアホな以外には特筆することなく、勇吾たちは普通にボーリングを楽しんだだけである。

——そして今は休憩所のベンチに座って、自動販売機で買った飲み物に口を付けつつ談笑している。

喋ってるのは主に弘平と紅葉だ。本来あまりお喋りなわけでもない勇吾は、とりあえず聞き役の方に回る。

内容は他愛のない事で、小学校はどこに行ってたのかとか、中学時代は何をしてたとか、そんなようなものだった。

「……ねえ、緒方と西口ってさ、いつからの知り合いなの？」

不意に、紅葉が訊いてきた。勇吾が黙っていると、代わりに弘平が答える。

「俺ら？俺らは……勇吾が俺のいた小学校に転校してきてからだから、もう十年近くになるんじゃないかな？たぶんだけど」

「そうだな」

勇吾は短く相槌を打つ。紅葉は紙パックのミルクティーのストローに口を付けつつ、

「へえ。十年か。私と紫亜は昔転校ばかりしてたから、長く付き合えた友達っていないんだよね。十年かぁ。何か良いな、そういうの」

「良くはないけどな。こいつとは、付き合い自体は古いだけで、実質的にはそう大したもんでもないさ」

勇吾は真顔で言い切った。肩を竦めて、さも当然というように。

「うわっ……ひっでえ。俺と勇吾は親友じゃんかよ」

「どこの勇吾だ？そいつは？」

……と、半ば漫才に近いやり取りになる。勇吾の返しがやや辛辣ではあったが。

と、唐突に紫亜と紅葉が笑いだした。

「アハハ、仲いいんだね、二人って」

「うん、緒方君と西口、息ぴったりだよ」

「そうね……って何で緒方だけ君付け？」

紫亜の男性陣に対する扱いの差を聞き咎めて、紅葉が疑問符を浮かべた。

「え？　べ、別に深い意味は……」

紅葉の問いに、何故か焦る紫亜。

その様子を見て、弘平の目がくわっと見開かれた。意味もなく血走っている。

そして無駄に大きい声量で、天よ聞けい、とばかりに、

「ま、まさか！　さっき二手に分かれたときに勇吾の毒牙に……！？」

「……………」

勇吾は無言で、既に飲み干したコーヒーの缶——スチール製——を弘平の頭に振り下ろした。

あとには、苦笑いの少女二人と悶絶する馬鹿が一人。そして、こめかみを押さえて嘆息する男が、やや微妙な雰囲気に残されていた。

お礼にキス！？（前書き）

今回は少しだけ長いです。

お礼にキス！？

頭を押さえて悶絶している弘平を無視して、勇吾は再度質問してくる紅葉に向き直った。

煙草を吸いたいと思いつつ、しかしここが禁煙スペースだということとが判っているので、とりあえず嘆息だけを漏らす。

「ね、緒方って西口の小学校に転校する前はどこにいたの？」

「……あー。いや、それはだな。やんごとなき事情につき……」

正直放っておいて欲しかった質問に、勇吾は口ごもった。

自分が九州にいた事を知られれば、紫亜が感づきかねない。物凄く直接的な証拠があるのだ。イニシャルと瞳の色。即刻逮捕状が請求されるだろう。起訴は時間の問題だ。というか、今の段階でも十分に気づかれかねないだけの情報がそろっているのだ。最後の駄目押しでするわけにはいくまい。

まあ、紫亜が事実を感じていたからといって勇吾に実害があるわけではないが、それでも余計なオプションをつけるのは避けたい。

そう思っ、勇吾は脳裏で作り話をでっち上げた。さらりと言っしまえば誤魔化しきれるかもしれない。そうして、どうにかこじつけようと口を開いた瞬間、いつの間にか復活した弘平の無駄にでかい声が、それを遮った。

「確か九州の方だったよな！ 学校名も覚えてるぜ。確か……竜ヶ峰小学校だったよな？ はは、すげえ偉そうな名前だから、俺一発で覚えちゃったよ」

（……………ええい、余計な事を。このクソ虫はいつもいつも阿呆丸出しで……………！）

盛大に呪いの言葉を思い浮かべながら、なんとなく紫亜に視線を向

けると、

「竜ヶ峰……？ Y・O？ え？ もしかして……」

凄じ勢いでパズルを解いてらっしゃいました。まあ、ラスト数ピースのみのパズルだったので、当たり前だが、完全に感づいている。

（あー、なんかもう色々と面倒になってきた）

「え？ 竜ヶ峰って……私達と同じじゃない。じゃあ、もしかしたら昔、会ってるかもしれないね」

紅葉のその何気無い一言に、紫亜と勇吾がピクリと反応する。

（……いや、もしかしたらとかいうレベルじゃなくて、会ってるんだよな、実際。それも紫亜の初恋っておまけ付きで。まあ、多分だけど）

勇吾と紫亜の間に、微妙な空気が流れる。

険悪ではないが……戸惑いや照れなど様々な感情の混ざった……とにかく微妙な空気。

弘平は持ち前のお馬鹿な脳味噌でスルーしているが、紅葉はこの空気に気付いたようだ。

流石は空気の読める子。

「ね、ねえ。そろそろ帰らない？ ほら、もう結構外暗いし」

紅葉の提案に、勇吾は頷いた。割合早い反応だった。紫亜が気まずそうだし、勇吾も少し居心地が悪くなっている。ここは解散するべきだろう。

……勇吾自身には実害があるわけではないが、この空気は少なくとも気分の良い物ではない。

結局——この日はそのまま解散することになった。

なっただが。

突然、紅葉がこんな事を言った。

「あ、そうだ。ね、緒方。今度は私、乗っけてくれない？」

先程紫亜を乗せた以上、断るのも気が引けるし、断る理由がそもそも無い。

（いや、あるにはあるか。またノーヘルのリスクを背負うことになるとか。ただまあ、それじゃ理由としては弱いかな）

思考する。そして、決定も。

「ああ、構わん。今更断るのも、あれだしな」

と快諾し、勇吾は紅葉をバイクで送っていく事になった。

紫亜が何か言いたそうな顔でこっちを見ていたが、やがてこっちに近付いてきて、一枚のメモを勇吾に手渡した。

「……これは？」

眉根を寄せて、勇吾。本気で意味が判らなかった。何だろう、これ。と、紫亜は渋面の勇吾に気づくと、慌てて補足する。

「あ、ごめん。これ、私の携帯の番号とアドレス。良かったら連絡して」

「ああ、なるほど。じゃ、帰ったらメールでも打つよ。あんま得意じゃねえんだけど」

「ん、ありがとう。それじゃ……また」

紫亜はそう言つと駅の方へと歩いて行つた。

……弘平を置き去りにして。

「あ、ちよつと待つてよ！」

弘平は叫びながら走り出して、不意に振り返つた。

「おい勇吾！ 二人きりだからって、姫神にエロい事するなよ！
したら天罰が下るぞ！？」
響きわたる弘平バカの声……

（こいつ、殺やつちまおうか）

勇吾は大きく嘆息した。なんとなく、近くに落ちていた拳大の石を拾う。

「うむ。当たると痛そうだな。頭に当たったりしたら死ぬかもしれん」

軽く肩をまわして、呻く。それから、勇吾はにつこりと続けた。

「……………そういうわけだ、弘平」

「へ？」

「死、ねえええッ！！」

叫んで、勇吾は全力でその石を投擲した。石ころはかなりの速度で飛空し、弘平の眉間に激突する――

「あんぎゃあああ！？」

弘平の断末魔の悲鳴はキツチリ無視して、勇吾はくると方向転換。気分は抑えの切り札。最後のバッターを三振にした感じ。

と、あんまりといえはあんまりな勇吾の所業に、紅葉がうわー、とか呻きながら言ってくる。

「……ねえ、あれ、大丈夫なの？」

「何がだ？」

「いや、だって西口……のたうち回ってるけど」

「そりゃ、あのサイズの石が直撃すれば痛いわな。つーか死にかなんぞ普通。ま、あいつなら問題ないさ」

「あ、今度は痙攣してる」

「気にしたら負けだ。慣れは武器だぞ？」

「……動かないわよ？」

「死なんだろ、弘平だし。俺の『壱の突き』でも生き残った生命体だぞ、あいつは」

「——っん」

まあ、そんな感じで。二人は弘平を放置することにして、その場を後にした。

バイクを走らせること二十分。

勇吾達は紅葉の案内によって姫神宅に到着していた。中々に立派な面構えの一軒家である。一介のサラリーマンがこの家を建てようとしたら、早死にしかねないくらいには、ご立派な家である。

「さて、着いたな」

紅葉を降ろしながら、呟く。こきこきと首を鳴らしつつ、紅葉の方に視線を向けた。

「悪いね、送ってもらっちゃってさ」

「構わん。美人が後ろに乗ってるつてのも、たまには悪くねえ」

勇吾が真顔でそう言う。いや、なんとなく映画のワンシーンを思い出したら口について出てしまったただけだが。紅葉がさつと頬を赤く染めた。

「……緒方、今すつごく恥ずかしい事言っただ自覚ある?」

「言っただろ。たまには良いんだよ、こういうのも」

勇吾は首を横に振った。大して意味を持たせた発言ではなかったからだ。

「ま、いいや。……あ、そうだ。」

紅葉は言いながら、一枚のメモを勇吾に手渡した。さつき紫亜に渡された物と似ている。

「これは?」

一応聞く。

「私の携帯の番号とアドレス。紫亜に先越されちゃったけど」

……先を越されると何か不都合なのかとも思ったが、ま、いーかと切り捨てておく。

「ん。帰ったらメールするよ」

「わかった。期待して待つてる」

「……いや、何を期待するんだよ。俺には小粋なジョークや爆笑トークスキルなんか無いぞ」

「アハハ、じゃあ普通に待つてるよ」

「そーしてくれ。んじゃ、俺帰るわ」

勇吾はそう言っただけで紅葉に背を向けて、バイクに跨った。

——と。

「ちよっと待って」

後ろから、紅葉が呼び掛けてきた。

「——ん？ まだなんかあるのか？」

勇吾は首だけ振り向いて言った。いちいち降りるのは面倒だ。

「うん。お礼がまだでしょ？」

「……礼？ それってあのチンピラ退治のか？……それならお前さん曰くの『デート』でチャラって話だろ？」

「うん。それはね。でも私が言ってるのは送ってくれたお礼……」

紅葉はそう言っていると、自然な動作で……そう、不自然なまでに自然な動作で勇吾に接近した。

（——？）

紅葉の顔が、勇吾に近づいていく。勇吾は動けない。紅葉の動きは特別素早いわけでもないが、勇吾はそれを見切れなかった。するりとあらゆる障害を無視して、紅葉の顔が勇吾に接近し——

そして——紅葉はその桜色の唇を勇吾のそれに……重ねた。

唇に感じる……少しだけ湿った、柔らかな感触。

突然訪れたその感触に、勇吾は混乱した。そしてその感触の正体が紅葉の唇である事に気付いて、

（な、に——？ この俺が、間合いを……！？）

とりあえず、大いに間違った反応ではあった。

どのくらいそうしていたのか、混乱した頭ではよく分からなかったが、多分数秒だろう。

「……アハ、やっちゃった」

「いや、やっちゃったって……んな軽く処理されてもなあ」

まだ混乱の抜けきらない勇吾はやつとのことと言葉を絞り出す。一応、キスに関する思春期的な云々もあるにはあるらしい。

「とにかく、お礼はしたから。それじゃ、またね」

紅葉は勇吾が口を開く前に家に入っていつてしまった。

残された勇吾は、

「……今の高校生って礼がわりにキスすんのが流行ってんのか？」
と訳の分からない事を呟いていた。

そして、その後ろから、事の一部始終を見ていた者がいる事に、不覚にも勇吾は気付かなかった。

一度間合いを破られた事で、警戒が薄れていたのかもしれない。

今の勇吾は、致命的なまでに——あらゆる意味で——隙だらけだった。

揺れるコロロ（前書き）

紫亜視点です。

何気にシリアス？かもしれません。

揺れるコロロ

紫亜はぼんやりと歩いていた。ボーリング場からの帰り道である。弘平と少し話をした——というか一方的に話しかけられていたただが——が、内容は殆んど覚えていない。

頭の中は別の事で一杯だった。ただ一人の、少年の事で。

緒方勇吾。

それが、紫亜の思考を八割方支配している少年の名だ。

——8年前。

彼女は気弱であるためか、クラスの男子からいじめられていた。ごく普遍的な、小学生のつまらないいじめだ。だが、それは他人事だからいえることで、当人にとっては酷く辛いものであるのは間違いない。

しかし、彼女は迷惑をかけたくない、姉には相談せず——いや、出来なかったというべきか。元々、姉にはずっと頼りっぱなしで、迷惑も心配もかけ続けていたから。だから一人で抱えこんで、でもやはり一人では辛過ぎて——そういう、時代だった。

だが、そんな中で。ひとつの出来事が彼女を救った。違うクラスで、名前も知らない紫亜を救ってくれた、一人の少年がいた。

——私の、初恋の人。

紫亜はふと、そんな言葉を思い浮かべた。すぐに恥ずかしくなって、打ち消す。

（今日は……あんなに近くに、彼がいた）

もう、会えないと思っていた。

あの日、もう泣くなと言つてぶっきらぼうに手渡されたハンカチ。
それを返す事も、

「ありがとう」

とお礼を言う事も、出来ないのだと。

あの日からすぐ後に、彼は転校してしまったから。
でも、また、会う事が出来た。

公園で見たあの強さ。

どこかぶっきらぼうな態度。イニシャルの書かれたハンカチ。
そして、あの綺麗な翠の瞳……

きつと、緒方君が、あの日の彼だ。

緒方君は、もう忘れてしまったかもしれない。

でも、私は覚えている。

だから、伝えたい。

この、気持ちを。

ありがとう、と。

そして、あの日からずっと好きでした。
そう、伝えたい。

彼が忘れていたとしても、私の心にある気持ちは、本物だから。

紫亜はそう決意した。

「そんな事を考えながら、ぼんやりと歩き、気が付けばもう家の近くまで来ていた。」

「あ、姉さんと緒方君」
紫亜が自宅の前を見ると、バイクに跨ったまま振り向いて紅葉を見ている勇吾が見えた。

それを見た紫亜は、とっさに身を隠していた。

（何で隠れたんだろ…）

自分にも、隠れた意味が分からない。

普通に声をかけて、勇吾を見送れば良いではないか。
…それでも、紫亜の体は身を隠したまま動かない。

「そして。」

紅葉がスッと動き、勇吾との距離が近付いている。

10センチ―5センチ―そして…0に。

（…！何で…？何で姉さんと緒方君がキスを…！？）

紫亜は呆然としてその場に立ちすくみ、ひたすら自問していた。

何で？ どうして？ どうして二人が――

そうしている間に勇吾のバイクが走り去り、紅葉が家の中に入っていく。

それでも、紫亜は動けない。ただ、自問が紫亜のココロに――螺旋のように絡まり続けるだけ。

――結局、紫亜の自問に、答えが出る事はなかった。

トキメクココロ（前書き）

紅葉が暴走します。

今回も主人公の影が薄い…

トキメクココロ

「やつちやった……」

紅葉は、自分の部屋のベッドの上に寝そべってポツリと呟いた。

「勢いに任せて緒方とキスを……あううう」

紅葉はポツポツと呟きながら、次第に頬を赤く染め、最後には耳まで赤くなってうめき出した。

……自分でやつといて、今更思いつ切り照れだしたのである。

「うううう……今になって恥ずかしくなってきたあ……」

抱き枕を力一杯抱き締めて、ベッドの上でゴロゴロとローリングし始める紅葉。

端から見ると完全に変な娘である。

事によつては高い塀のある病院に連れていかれるかもしれない。

「あうううう」

……妖怪イモムシ女。

そんな単語がなんとなく浮かんでくる光景だ。

「あうううう……はうっ！」

あ、転がり過ぎて落ちた。

……この娘、実は凄くアホなのかもしれない。

ピロリロリ

と、紅葉が落ちた時にぶつけたオデコを擦りながら起き上がろうとした瞬間、不意に紅葉のケータイが鳴動した。

一瞬ビクツと身をすくませたが、直ぐにケータイを手元に寄せ、画面を見た。

勇吾からのメールだ。

『届いてるか？』

絵文字も顔文字も無い、実に簡素な勇吾らしい内容だ。

『届いてるよ』でも顔文字くらい使つてよ(、ε、)』

紅葉は凄まじいスピードで指を動かすと、二秒くらいで送信した。

…無駄に器用な気がするが。

しばらくして、返信がきた。

『……使い方が分かん。というか、顔文字って何だ？』

なんというか、ツツコミ所満載な内容だった。

「うつそお。ケータイ持つてて顔文字知らないって…ひょっとしておバカ？」

さっきの自分のおバカな行動は棚の最上段に上げて言いたい放題言う紅葉。

『もしも勇吾がさっきの紅葉を見ていて、今の台詞を聞いていたら』
『おのれが言うか！』と大いにツツコミを入れただろう。

……そしてその後も数回メールのやりとりをして、紅葉はケータイを置いた。

「あうううう」

あ、また照れだした。

今度はカーテンにくるまって頭だけ出している。

……怪奇ミノムシ娘。

紅葉の暴走もピークに達してきたようだった。

彼女はしばらくそうしていたが、やがて疲れたのかコテンとベッドに倒れこみ、息を吐いて瞑目した。

「独白」

私は今、恋をしている。

緒方勇吾。それが、私の思い人の名前。

前から、気になる人ではあった。

緒方とは、クラスは違うけど、何度か話す機会があった。——どうやら彼は、そのことを覚えてはいないらしいけれど。

緒方はぶっきらぼうで粗野な男だけど、私はそういう奴が嫌いじゃない。変な気を遣うことなく、気楽に話せるから。

緒方のクラスにいる友達に会いに行つて、ついでに彼とも少し話す——そんなことが何度かあつて。

思えばあの時から、私は緒方が好きだったのかも知れない。ロクに知りもしない男子生徒に自分から話しかけるなんて、いくら私でもそうそうあることじゃないんだから。

でも、私が自分の抱いている恋心に気が付いたのは、今日の事だ。

紫亜が緒方のバイクに乗りたいつて言ったとき、胸がチクリとした。

それは、嫉妬。紫亜が自分から男の人に近付いた、という事実を感じた、私の焦りだった。

これは勘だけど、紫亜も多分、緒方が好きなんだと思う。

ただの勘。だけど紫亜は、ずっと一緒に暮らしてきた妹だ。この勘は、多分当たっている。

紫亜はきつと強力なライバルになると思う。

——でも、絶対に負けない。こればかりは譲れない。

相手が実の妹でも、これだけは——

心の中で静かに独白して、紅葉は目を開いた。

「もっと緒方との距離を縮めて、告白する」

そう、言葉にしてみる。

「……あううう」

——やっぱり恥ずかしいらしい——

「距離を縮めてって言っても、具体的にはどうすれば良いんだろ？」

紅葉はうーん、とうめく様に考え込み、

「……そうだ！」

何か名案でも浮かんだのか、ポンと手を打つ紅葉。

漫画だったら豆電球が頭の上で光っているかもしれない。

「私の特技と言えば、料理！ お弁当を作って緒方に食べてもらえば、女の子度をアピールできる！ うん、この作戦なら完璧。昔漫画で読んだし」

……いや、完璧どころかその作戦、穴だらけというか、下手したら穴の面積の方が大きいかもしれないくらいダメダメだ。

しかし、紅葉はえらく満足したようで、上機嫌だ。

「よし。そうと決まればお風呂入って、早く寝て明日の朝から作戦スタート!」

紅葉は拳など握り締めつつ、そう決意した。

ラブレター

「何で、姉さんと緒方君が…」
もう、数えるのも面倒なくらい繰り返された自問。

紫亜の決意。

勇吾に告白する、という意味は、先程目撃した勇吾と紅葉のキスシーンによって大きく揺らいでいた。

（——あの時、私の目には姉さんが緒方君にキスをした様に見えた。緒方君はただ立っていただけ……）

——では……あれは合意の上の事ではなかったのだろうか？
姉が一方的に迫っただけなのだろうか？

少しだけ冷静になった頭で、そう思考する。

——だとしても。

（緒方君にその意思が無かったのだとしても、姉さんには、確かにその意思があった）

それだけで充分に脅威だ。

正直なところ、紫亜は紅葉ほどに、女としての魅力は無いと思っていた。

誰にでも笑顔で接して、明るくて、美人で、料理も出来る。

そんな姉を誇りに思う。眩しいとも感じている。

自分では、とても敵わない。

——なら、緒方勇吾を諦めて姉に譲るのか——

「嫌……それだけは……絶対に嫌——」
思わず、考えていたことが口に出る。

「例え敵わなくても——諦められない」

せめて、この気持ちを伝えたい。
結果はいい。負けてもかまわない。

ただ、このままこの気持ちを、くすぶらせたまままで終らせたくない。

せめて——伝えたい。

大好きです、と。

初めて会った時から好きでした、と。

「姉さんの事は…さっきの光景は忘れよう。伝えられれば、充分だから」

紫亜はそう呟いて、静かに決心した。

勇吾に告白することを。

——正面きって言える自信は流石に無いので、ラブレター、と言う形で。

鈍感キング（前書き）

えーと、更新が遅れました。

最近多忙なので中々更新出来ませんが、どうか見捨てずに読んでやって下さい。

あ、それから。できれば感想頂けると有り難いです。励みになりますし。

鈍感キング

別に酔ってもいない、正常な異性にキスをされたら、一般的な男性諸兄はどう思うだろうか。

まあ、普通は『もしかして自分の事が好きなのでは』とか、思うだろう。

自意識過剰とか、そんなものを抜きにしても素直にそう思うはずである。

しかし。

「まさか、あれほど容易く間合いを破られるとはな……不覚」

勇吾の感想は、これである。

青春真っ只中の男子として『女の子とキスをした』ということよりも、『素人の女の子に間合いを破られた』という、なんとも武人チックな思考が働いていた。

（いくら俺が、全盛期に比べて鈍つてるとはいっても、な。訓練を受けた人間の間合いを、素人がああも容易く……）

渋面で呟き、明日から少し鍛錬を始めるべきかと真剣に検討する。

「にしても。たかが一度家まで送って行っただけで、礼の代わりに接吻とは……これが『乱れる若者の性の感覚』って奴なのか……」

なんというか、色々ツツコミ所が多いコメントだ。

『接吻』なんて言葉、普通は使わないだろう。

そして…どうやら勇吾は紅葉とキスをした事を、あまり気にしていないようである。

紅葉の言葉通り、『お礼』として認識することにしたのである。

キング。正に鈍感キングだ。勇気を振り絞ってキスをした紅葉も、これでは立つ背がない。

紅葉や紫亜が惚れた相手は、およそ考える得る限り、最悪の相手であるようだった。

「よーやく帰ってこれたな……妙に疲れた」

家に帰りついた勇吾は、少しぐったりとして、ポケットに手をつき込んだままりキングのソファに身を預けた。

そして煙草に火を着けて、ゆったりと紫煙をくゆらせる。

「…渚は——まだ仕事か」勇吾は姿の見えない姉の事を思い出し、数瞬遅れて社会人である姉がこの時間はまだ労働中である事に思い至った。

——カサッ。

と、何気無くポケットに突っ込んでいた手が、何かに触れた。

「ああ、忘れてた。そーいやアドレス渡されてたっけ」

指先で触れたのは、姫神姉妹に渡された紙だった。

「また忘れねえ内に済ましとくか」

慣れない手付きでケータイを操作する勇吾。

特に何も考えずに文章を打ち、送信する。

「まーこんなもんだろ」

受けとる姫神姉妹がどんな気持ちかは露知らず、お気楽に呟く勇吾。

その後しばらく紫亜と紅葉を相手にメールのやりとりをして、きりの良いところで切り上げた。

それからいくらしもないうちに、勇吾は睡魔と疲労感に襲われた。

「今日は何故かしらんが疲れたな。……寝るか」

まだ時間は早い、明日は学校だ。

早寝しても損は無い。

そう判断すると同時に勇吾はベッドへとダイブし、速やかに夢の世界へと旅立った。

お弁当パニック！（前書き）

読者数が2000人を越えました。これからもしければ読んで下さい。

メッセージや感想をくれた方、ありがとうございます！
反応があると励みになります。

次回は、勇吾の姉、渚が登場します。

では、本編をどうぞ。

お弁当パニック！

朝、勇吾は目覚めると、いつものように朝食を作り始めた。

——勇吾の両親はだいぶ昔に死んでいる。そのため、家事は彼自身が行っていた。

勇吾の両親が他界したのは、彼が三歳の時だった。物心つく前の出来事なので、彼は両親の事を6歳離れた姉に聞いた範囲以外の事は知らなかった。

そのため勇吾と姉——渚は母方の祖父の元で育てられていたのだが、勇吾が小学校二年生の時に祖父までもが他界してしまった。

結果として、勇吾たちはまたこの家——両親のいた頃に住んでいた家に戻ってきて、二人で暮らし始めたのだ。

幸いといかなんというか、両親の遺産が結構な額であり（生命保険が馬鹿げた金額で、しかも貯金まで残っていた）、なおかつ家もあるという状況と、ご近所のお節介なおばちゃん軍団の世話焼きによって、勇吾と姉の二人はなんとか今まで生活してこれたというわけだ。

そして、勇吾の姉は全く家事の出来ないダメっ娘さんなので、家事全般は小学校一年生の時から勇吾の仕事となっている。

当然、学校に持っていく弁当も彼が作る。

定番の玉子焼きからアスパラのベーコン巻き、ジャガイモとひき肉の炒め物――弁当なので、時間の掛からないもので手軽に済ませる事になっていた。

手際よく調理して、弁当箱に詰める。

その時余ったおかずを皿に盛って、取り合えずの朝食とするのだ。

弁当は完成。着替えも終わったし顔も洗った。

「さて、行くか」

呟いて、家を出る――

「っと、その前に」

くるりと回れ右。

「渚！ 飯はちゃんと食べよ！ それから、洗濯物は籠に入れておけ！」

起きているかは怪しいところだが、一応姉に呼び掛けてから、勇吾は今度こそ家を出た。

（……なんだってんだ、これは？）

いつものように登校し、いつものように退屈な授業を聞き流していた勇吾は、昼休みを迎えて首をかしげた。

目の前には、自分の机の向かい側でニコニコしている紅葉がいる。

昼休みが終わるやいなや、紅葉が勇吾のクラスに現れ、昼食を一緒にどうか、と持ちかけて来たのだ。

まあ、それだけなら良かった。

食事は一人よりは二人の方が楽しいし、いつも親友（弘平ではない）——今は 学校を休んでいる——と二人で食べているのだし、特に断わる理由はない。

しかし、そこでちょっと予想外な事が起きた。

紅葉が勇吾の分の弁当を用意していたのだ。学校のアイドルである少女と差し向かいで、それもお手製弁当を食べているとなると、男子連中にやっかみを買ひ、女子のゴシツプ好きに火を着けるには充分だ。

実際、

「緒方……貴様は我等の怒りを買った……」

「ぬおおお！嫉妬の炎がメラメラとオオ！」

「コノウラミハラサデオクベキカ！ カ力カ力カ……」

と男子連中の少しくレイジーな魂の叫びがあちこちから聞こえたし、女子は勇吾の方を見ながらヒソヒソと囁きあっていたし。

なんかもう、完全に晒し者状態だった。

（……………視線を感じるな。しかも、いくつかは殺気まで混じってやがんど、おい）

自分が好奇の視線に晒されている事には自覚があつたが、その理由がサツパリ理解できずに勇吾は一人首をかしげた。

……周りからみれば自分達が何か甘酸っぱい空間を作っているように見えていることには、ちっとも気付かない勇吾であった。

——しかし、何時までも首をかしげていられなかった。

昼休みは有限なのだから。

勇吾は周りの視線を取り合えず無視して、弁当に取り掛かる事にした。

折角作ってきてくれたのだから、時間切れで残してしまつては紅葉

に申し訳ない。実際、さつきから紅葉がこちらをチラチラ見て、何かを期待しているように目を輝かせている。

視線に言葉があるならば、

「食べて食べて」

と訴えていそうな感じだ。

「——むう、これは」

紅葉の期待に応えるべく——かどうかは定かでないが——弁当箱の蓋を開けて、勇吾は思わず感嘆の言葉を溢した。

ほうれん草の混ぜ込まれた玉子焼きに、定番ともいえるエビフライ。隅にはポテトサラダとプチトマトが配置してある。ご飯は色付きのそばろで彩られていた。牛肉とタマネギの炒め物は匂いから察するに、甘辛く味付けてあるようだ。

（ふむ。男が食うには丁度いいポリウム。肉が多めなのは、そのあたりを考慮してのことか）

そんなことを考えつつ、勇吾は玉子焼きを一つ抓んだ。単純だが、それ故に根本的な腕が試される料理である。

「……ほう。なるほどこれは——美味しい」

「ほんと？」

勇吾が称賛の言葉を呟いた瞬間、輝くような笑みを見せる紅葉。勇吾は肩を竦めて、

「ああ、俺もそれなりに料理は出来るつもりだったが……こいつは敵いそうにないな」

「ほんとに？ やった！」

紅葉は心底嬉しそうに言うと、先程よりも笑みを深めた。

——それは、極上の笑みだった。

見るものを残らず虜にして、なおかつ元気や幸せを与えるような。

ドクン。

勇吾の心臓が、一つ大きく跳ねる。

(……なん、だ……?)

突然訪れた自身の体の変化に、勇吾は焦燥を覚えた。

ドクン――

また、心臓が跳ねた。

(おい、なんだこりゃ!?! 心臓が軋んでやがる……)

ドクン――

(苦しい――のか? いや、こいつは不快じゃない。そういう類のもんじゃないねえ。なんだ……これは――?)

ドクン――

(分からない――)

顔が熱い。紅葉の目を見れない。

――心臓が壊れるくらいに暴れている。

「――た。緒方」

「……ああ、どうした?」

紅葉に呼ばれて、ようやく思考の海から這上がる。

「どうした? って…それは私のセリフ。どしたの? ボーッとして」

首をかしげて訊いてくる紅葉。

どうやら少し思考に没頭し過ぎていたようだ。

「いや、何でもない。弁当があんまり美味いんで感動してた」
内心の動揺を悟られまいと必死に取り繕う勇吾。

あながち嘘でもないが事実でもない事を口にして誤魔化す。
「大袈裟だって。でも、そう言われるとやっぱり嬉しい」

幸い、紅葉にはバレずに済んだようで、とりあえず勇吾は安心した。

その後の勇吾

昼休みが終わって紅葉が自分のクラスに帰った後、クラスの女子連中に紅葉との事を質問攻めにされた。

更には嫉妬に狂った男子連中に襲撃され、それを完全に撃退した。

そんなこんなで、勇吾は放課後になる頃にはすっかり燃え尽きてしまい、疲れた体を引きずるようにして帰路を辿った。

勇吾、激しく悩む（前書き）

この話でようやく全体の真ん中くらいです。

何とか完結に向けて頑張ります。

勇吾、激しく悩む

「だああああ！ウゼエ！」

勇吾は紅葉との一件によって、クラスメートにもみくちやにされて疲れた体をベッドに投げ出していた。

——そして五分もしない内に、ガバツと身を起こして突然叫び声を上げる。

「一体何だつてんだよ…昼休みから紅葉の事が頭から離れねえ。その上あいつの顔を思い出すたびに心臓が痛みやがる」

右手で胸の辺りを押さえて、勇吾はうめく。

そして空いている左手を額に当て、勇吾は一つ溜め息を吐いた。

肺に溜っていた空気を外へと押し出して、そのままの流れで小さく毒づく。

「……原因はわかってるんだ。この胸の軋みは紅葉と飯食ってた時に出てきたんだから、紅葉が原因だつてのは間違いねえ」

そう言ってから、勇吾は自分の失策に気付いた。

今、明確に紅葉の事を思い出したりしたら……

ドクン――

「う……またかよ」

勇吾は両手で頭を抱えた。この痛みは不快という程の物ではないのだが、無視できる範囲でもない。どうにか解消できないかと考えてはみるが、いくら考えても答えの尻尾すら見えてこないのだ。頭を

抱えたくもなる。

「頭いてえ……」

頭を抱えたそのままの姿勢で、勇吾はぼやいた。

普段考え事などあまりしないせいかわ、勇吾は気のせいではなくリアルな頭痛を感じた。

このままだと知恵熱でも出しそうである。

何とかならないものか。……と、にわかに閃くものがあつた。

「あー……しゃあねえ、渚に相談してみるか」

勇吾は頭に浮かんだ案を口に出してみた。自分だけでどうにもならないなら、誰かを頼るしかない。

あのお気楽極楽な姉に頼ったところで事態が好転するかどうかは限り無く疑わしいが、一人であーだこーだと無意味に悩むよりはナンボかマシだ。

『下手の考え休むに似たり』である。

……それに、今の勇吾の悩みの種は紅葉——つまり女性だ。

そして姉である渚も当然女性。

ならば男である自分よりは事の真相に迫れるかもしれない。

そんな事を考えつつ、勇吾は姉の部屋に向けてノロノロと歩き出した。

渚の部屋は勇吾の自室のすぐ隣だ。

五秒でたどり着いた渚の部屋のドアの前で一旦立ち止まった勇吾は、最低限の礼儀として取り合えずノックをした。

コンコン。

——返事は無い。

「…寝てんのか？」

ホステスとして働いている渚は、夕方と夜の境目くらいに出勤し、翌日の朝方に帰ってくる。

そのため、勇吾が学校から帰ってくるくらいの時間帯だと、寝ている事が多いのだ。まあ渚の場合、何故か昼間に出勤したり、丸一日帰ってこなかったりと、かなり変則的な勤務状況ではあるが。それはともかく。

コンコン。

もう一度ノックしてみる。

——やはり返事は無い。

ドンドントツ！

少し強めのノック。

——それでも、なんの変化も無い…

「……起きやがらねえな」

ドンドンドンドントツ！かなり乱暴に、勇吾は扉を叩いた。もはやノックというよりパンチに近い。

それでも。

「反応なし…か」

これだけやって何もリアクションが無いと、流石に心配になってく

る。

——まさか、中で倒れてんじゃないだろうな？

一度不安になるともう止まらない。

勇吾は意を決してドアを押し開けた。

中では、渚が仰向けに横たわっていた。

……ただし。

「むにゅ…もうお腹いっぱい…でもデザートは食べる」

…ベッドの上に。

「……………」

勇吾はその光景を見ると、無言で辺りを見回した。

そして、足元に転がっているヌイグルミを見付けて——おもいきり投げた。

渚に向かって。

ベシッ

「はうあッ！」

顔面にヌイグルミをぶつけられた渚は、文字通り飛び起きた。

そりやもう、エビのようにビクンツと。

そして目の前の勇吾を発見すると、抗議するように上目遣いで言った。

「うううゝ酷い。ゆーちゃんがくまたんを投げたゝ！」

「やかましい！何の反応も無えから心配してんのにグース力寝こけやがつて！だいたい22にもなつて くまたん とか言つてんじゃねえ！」

「むうゝだつてくまたんはくまたんだもん！…それにゆーちゃん、『れでい』の部屋に入る時はノックしなよう」

ぷう、と頬を膨らませる渚。

なんかもう、突っ込む気力を根こそぎ奪われて、勇吾は力無くドアを指差して言った。

「……見るか？千本ノックの痕」

勇吾が指差した先には、叩き過ぎて少し———というかかなり———へこんだドアがあった。

渚はパチクリとそのドアを見て、

「あれえ？聞こえなかったのになあ…ノックの音」と呟いていた。

「……もういい。このままだと本題が始まんねえ」

勇吾はこめかみを押さえて、うめくように言った。
なんとなく、頭痛が酷くなったような気がする。

「渚。ちょっと相談があるんだが、良いか？」

勇吾がそう言くと、渚がパアツと顔を輝かせた。

勇吾は普段、滅多な事では渚を頼らない。

勇吾が珍しく頼ってくれるのが、姉として嬉しいのかもしれない。

「えっ？ゆーちゃんが相談？」

「……ああ」

気は進まないんだけどな、と心の中で補足しながら頷く。

しかし渚はなんの疑いもない瞳で、Vサインなどしながら——意味は恐らく無いんだろうと思われる——このたまった。

「よし！お姉ちゃんに任せなさい！」

それを見て、勇吾は何だか不安が倍増したような気がした……

「——って事なんだけど」

大方の事情を、勇吾は渚に話した。渚はしばらく

「む」

と唸っていたが、やがて結論が出たのか、勇吾に向き直った。

「ゆーちゃん。それって多分、恋だよ」

聞いて、勇吾は露骨に眉間に皺を寄せた。

「……鯉？ いや、俺は魚の話はしてないんだが……」

真顔の勇吾。

対して、渚は苦笑しつつ、勇吾の勘違いを正した。

「違っよ、ゆーちゃん。恋、だよ。ゆーちゃんは、その紅葉って娘の事が好きになっちゃったんだよ」

「……？」

わけが分からず、勇吾は沈黙。

「……」

遙か彼方から舞い降りたかのような沈黙。

「……！」

無言で首を傾げていた勇吾の目が、大きく見開かれた。

「う、嘘だろー！ー！！？」

勇吾は目を見開いたまま、あらん限りの声量で叫ぶ。

「嘘じゃないよ。ゆーちゃん本当に気付いて無かったの？」

「ああ、恋愛つてのはまるつきり門外漢だから……そうか、これが恋愛感情つてヤツなのか」

——勇吾は恋をした事がなかった。

それどころじゃなかったのだ。

小学生の時から家事に追われ、喧嘩に没頭し、余った時間は全て趣味の空手に注いでいたからだ。その上当時の姉は——今も怪しいが

——勇吾がいないと何も出来ないダメっ娘さんだった。

色恋沙汰にうつつを抜かす時間は無かったわけだ。

というか、勇吾自身異性に無頓着であり、別段興味を持っていなかったのが最大の要因かもしれない。

ともかく、恋がどんなものか知らない以上は勇吾が自分で自分の恋心に気付く、というのは土台無理な話である。

「無論勇吾とて、テレビや漫画などで、得た知識から、『なんとなくこんなもの』という認識ならあった。が、知識と自分自身の体験はまったく違うものだ。」

公式も知らずに、数学の問題は解けない。

それと同じで、勇吾には、‘恋’に対する公式が無かったのだ。

だから、気付けない。

自分では。

——しかし勇吾は、公式を知った。
たった今、渚に教えられた。
これが、恋なのだと。

「……ゆうちゃん」

「……何だ？」

渚に呼ばれて、勇吾は我に返った。

「これは、ゆうちゃんにとって大事な問題だと思う。だから、自分でちゃんと考えてみて」

「わかった」

とは言ったものの、自分が恋をしたなどという事実を他人から聞かされたばかりで、勇吾の頭は絶賛混乱中であつた。なので本当にわかつているのか自分でも怪しいものだとは思つたが、とりあえず頷いて、勇吾は自室へと引き返した。

「自分で考えてみる、か」

自室のベッドで横になりながら、勇吾はぼんやりと呟いた。

頭の中で、本当に自分が紅葉に惚れてしまったのかを、自分なりに考えてみる。

五分後。

「うだー」

勇吾はやる気が完全に死滅したような声で呻いていた。

元々考えるのが苦手な勇吾は早くも限界を迎えているようだ。

「・・・やめた。やつぱ『下手の考え休むに似たり』だな」

そう言つて、勇吾は本当にスッパリと考えるのをやめてしまった。

ややこしい問題に直面すると、本当に追い詰められない限り、勇吾は状況に流されてしまうのである。というか、単に「そのうちなんとかなるだろ」という事なかれ主義なだけかもしれないが。

ある意味、ほとんど癖のようなものだ。

「ま、なんとかなるだろ」

自分にそう言い聞かせると、勇吾は今日の出来事を頭の隅へと追いやっていった。

このあと事態はもっと複雑でややこしくなっていくのだが・・・

当然、今の勇吾にそんな事がわかるはずもなかった。

真っ赤な空を見ただろうか（前書き）

今回はバトルとコメディとラブを無理に詰め込んだので、ちょっと慌ただしいです。

ちなみにサブタイトルは私が好きな歌のタイトルからつけました。
うーむ…分かる人いるかな？

ともあれ、本編をどうぞ。

真っ赤な空を見ただろうか

勇吾が渚に相談を持ちかけてから二日後。

勇吾は一日の授業を適当に聞き流して、取り合えず平穩に過ごしていた。

紅葉との事も、一昨日から特に変化が無かった。

たまに心臓の軋みを感じることもあったが、それはもう諦めて、片っ端から無視していた。

そんな日の放課後である。

特に用事もなく、家に帰って夕食の献立でも考えようと、勇吾はH・Rが終わってすぐに下駄箱へ向かった。

下靴に履き替えて、さあ帰るか、と一歩目を踏み出した瞬間、後ろから聞き覚えのある声がかかった。

「緒方君？」

「……？ ああ、紫亜か」

振り向いて、声の主を確認すると、軽く手を上げて呼び掛ける。

「緒方君、今から帰り？」

「ん。そうだけど」

下駄箱で下靴を履いていれば、問うまでもなく帰宅するに決まっているが、儀礼的に紫亜の質問に答える。

「じゃあ、一緒に帰らない？ 方向は同じはずだから、途中まで」
「ああ、構わねえけど」

紫亜の提案を、大して考えもせずに承服して、勇吾は紫亜と並んで歩き出した。

二人並んで歩く姿は、他人からみれば恋人同士にしか見えないという事には、サッパリ気付いていない勇吾。

下校中の生徒たちにバッチリ見られていても毛ほども気にしていない。

紅葉の件で少しは進歩があるかと思えば、まるで無かった。

結局、勇吾はやっぱり勇吾のままである。

——と、好奇の視線を向ける下校中の生徒に混じって、別の感情を込めて二人を見る者たちがいた。

「ぬうううう！ 姫神紅葉だけでなく、妹の紫亜ちゃんまでたぶらかすとは……もはや生かして置けぬ！」

「裁きだ！ 緒方に裁きの鉄槌を！ 我等の嫉妬で血祭りにしろ！」
「カカカカッ！ ノロイコロシテクレル……」

口々に飛び交うクレイジーテイストな言葉。
とつてもシニールである。

「行くぞ同志たちよ！ 緒方勇吾に血の制裁を！！」

ウオオオオオ！

男達は雄叫びを上げると、勇吾と紫亜のツーショットの後を追っていった。

——くだらねえ……

それが、現状に対して勇吾が洩らした感想の全てだった。

勇吾は今、数人の男子生徒に囲まれていた。

紫亜と会話をしながら帰宅していたら、突然この男達が現れ、すっかり取り囲まれてしまっていた。

「あー……なんつーか……」

取り合えず、勇吾は「お前ら、何者？」とか当たり障りの無い事を聞こうとしたが、途中で止めた。

聞かなくても見当がついたからだ。

——何故なら、その男子生徒たちは皆、珍妙なハチマキをしていたのだ。

そのハチマキには、

『紫亜ちゃんLOVE』

『紅葉ちゃん命』

とかそんな事が書かれていた。

内容はどれも似たり寄ったりで大差無く、勇吾にとっては全て等しくアホらしい。

まあ、とにかく勇吾にはこの連中に心当たりがあった。

——無い方が良かったと思うが。

「……お前ら、姫神姉妹を崇拜してるとかいう集団か？ ファンクラブだかなんだか知らんが、そういうのがあるってのは聞いたことあんぞ」

勇吾はこめかみを押さえながら——あまりに馬鹿馬鹿しくて頭痛を感じたのだ——投げやりに訊いた。

「その通りだ。……しかし、今は別の名の元に動いている」
男子生徒たちの中から、一つの人影がずっと前に出る。

その人影の正体を見て、勇吾はいよいよ頭痛が深刻になるのを感じていた。

……本気で頭痛薬が要るかもしれない。

頭によぎった思考を取り合えず脇に置いて、勇吾は口を重々しく開いた。

「……弘平。ンなとこで何やってんだ？」

「そう！今の我等の名は！」

勇吾の問いは無視して、弘平が両手を大袈裟に開いて叫んだ。

「緒方勇吾抹殺同盟！その名の如く、姫神姉妹を弄ぶ悪魔、緒方勇吾を抹殺する崇高な同盟だ！」

何の迷いもなく、キッパリと言い切る。

「と・言うわけで、野郎共！ 殺れいつ！！」

何の脈絡も無く、続けて弘平が宣言した瞬間、周りの男達が勇吾目

がけて飛びかかってきた。

「って何がなんなんだ！？何一つとして意味が分からねえぞ！」
思いつ切り突っ込むが、返事無く、シニールなハチマキを巻いた男共が殺到する！

「ええい！ そっちがその気なら相手してやろうじゃねえか！」

ほとんどやけくそで叫びながら、勇吾は持っていた鞆を、まったく状況が分からずにオロオロしている紫亜に預けて、戦闘体勢をとった。

相手は全部で七人。

（倒せないほどの人数じゃねえ——が、ちよいと厄介ではあるな）
冷静にそう呟きながら、拳を握って視線を巡らせる。勇吾は仮にも訓練を受けた人間だ。武術を習い、しかも喧嘩という実戦の中で牙を研ぎ続けている。最近では少し鈍り気味ではあったが、素人に遅れを取るほど間抜けではない。
だが、それでも注意すべき点はある。

（素人とはいえ、七人もいるとなると、怪我をさせずに無力化するのは難しいな。しかも、とっさの判断で動いちゃうと、急所をぶち抜いちゃうかもしれない。下手すりゃ殺しかねんぞ、くそ）

問題は、勇吾が強すぎるということだった。しかも、ごく単純に強いだけで、技術的には割りと下手くそなのである。手加減が不得意なのだ。

（となると、二、三人ほどに痛い目を見てもらって、示威行為に仕立てるか。所詮は烏合の衆。適当にボコれば、すぐに散るだろ）

勇吾はそう判断すると、一番近くまで走り寄ってきている男に視線を向けた。まずはこいつから――そう決定して、体勢を低くする。そしてそのまま、男に足払いをかけた。

走っている途中では堪えきれぬ筈もなく、男Aはあっけなくすつ転び、電柱に衝突した。

男共の注意が一瞬そちらに移る。

（よし、順調――）

勇吾は拳を固めて、男たちの内の一人、位置的に一番端っこの者に狙いを定めて駆け出した。

「ひょええ！？」

こちらの接近に気づいたらしく、情けない声が上がる。それは無視して、勇吾は走った勢いそのままに、男の顔をぶん殴った。

悲鳴を上げて、男が転がっていく。それを見送りながら、勇吾は手近な男の胸倉を掴み上げて、頭突きを打ち込んだ。一発では済ませず、二発、三発と打ち込んで、更に肘打ちまでくれてやる。

「あだっ！？　ちょ、なんで俺ばかりいてえ！！　うわ、だば、いだだだだ！？」

ほとんど一方的に殴りまくっていくうちに、だんだん抵抗もなくなっていく。ちよっぴり凄惨な光景であった。

と、殴られていた男が不意にくったりと体を投げ出した。気絶したらしい。痛々しい話である。

その様子を見ていた残りの男達は、一斉に顔色を変えた。あれ、何か真面目にやばくね？ といったところだろう。

そこで、勇吾は最後の仕上げに取り掛かる。駄目押しだ。

「……こうなりたいか？ お望みなら、ひとりずつ痛覚を持って生まれてきた事を後悔させてやるが？」

ブンブンと首を横に振って拒否を示す男達。

そして次の瞬間には後方に向かって走り出していた。

数秒もすれば、どうも逃げ出すタイミングを逸したらしい弘平以外は誰もいなくなって、その場の暑苦しさが減っていた。

「さて。残りはお前だけだぞ、弘平」

言って、勇吾は弘平に向き直る。

「う、うぬう。こ、ここで俺が倒されても、いつか必ず第二第三の俺が……」

「どこの大魔王だテメエは。まったくこのボケは毎度毎度……歯あ食い縛れやあああ！！」

勇吾は右手で弘平の顔面をむんずと掴み、持ち上げた。そのまま、ギリギリと締め上げる！

「あだだだ！ 割れる割れる割れるッ！」

「やかましい！ その頭に正常な脳ミソが入ってるか調べてやっからおとなしく往生しろ！」

ギリギリ……コキンッ。

「いででで！暴力反対暴力反対暴力反対いいい！」
バタバタと暴れる弘平。

しかし、あまりにガツチリホールドされていて、抜け出すのは無理っぽい。

「あだだ！ ま、待て待て！ 何か奢るから助けてくれえええ！」

それを聞いて、勇吾はパツと手を離れた。

ドサリと弘平が地に落ちる。

「その言葉、忘れんなよ？」

勇吾はそう言つと、目の前で起こった乱闘が怖かったのか、何やら呆然としている紫亜の方を向いた。

「む、紫亜。大丈夫か？」

「え？ あ…うん。ちょっとびっくりしただけだから」

「なら良いが」

そう言つて、勇吾は紫亜の頭にぽん、と手を置いた。なんとなく、撫でてみたりする。

特に意味は無いが、そうしたい気分だった。

「んっ……」

突然頭に大きな手の感触を感じた紫亜は、最初だけ少し戸惑ったような声を出したが、すぐにくすぐったそうに、あるいは心地良さそうに目を細めた。

勇吾はふと気づいて、無遠慮だったかと空いている方の手で頭を掻いた。

「あ、悪い。つい、な」

「——っうん。いいの。続けて」

とろん、と紫亜の表情が緩む。

紅葉とは少し種類が違うが、これはこれで凄く魅力的な笑顔――

ドクン――

覚えのあるタイミングで、勇吾の心臓が大きく跳ねる。

（……おいおい。うそ……だろ……？）

ドクン――

（だってこれは――）

ドクン――

（――紅葉の時と同じ……）

ドクン――

（恋愛感情の証――）

勇吾はハッと我に帰り、紫亜の頭から手をどけた。

これ以上触れていたら、気が狂ってしまいそうな予感が、勇吾にはあった。

「あ……」

離れる勇吾の手を、どこか名残惜しそうに見つめる紫亜。

その表情だけで、勇吾の心臓は更に大きく跳ねた。

「そ、そろそろ行こうか」

「……うん」

少しどもりながら、勇吾は紫亜を促して歩き出した。
空は見事に茜色に染まっていた。

勇吾の頬は空と同じ色に染まっていたが、それは夕焼けだけが理由ではなかった。

——そして……別れ道で紫亜と別れた後、勇吾は家に向かって意味もなく走り出した。

「う、がああああ！　なんだってんだちくしょうっ！」

何か、色々な物を誤魔化すかのように、叫び声が口から迸っていた。

勇吾の勘違い（前書き）

今回は、次回の内容に繋げるためのお話です。

勇吾の勘違い

無意味なまでに息を切らせつつ、家に帰りついた勇吾。

未だに心臓はロデオのように暴れまわり、思考は引っくり返って意味を成していない。

乱暴に玄関を叩き開け、勇吾の足は自然にある一点へと向かう。

パンツ

「渚あああ!!」

「ひゃわっ! どど、どーしたの? ゆーちゃん?」

開口一番悲鳴じみた叫びを上げる勇吾に、渚は飛び上がって——と
いうかベッドから転げ落ちて——こちらも半ば悲鳴気味に切り返す。

「不味い! 非常に不味い事になった!」

「え、えと……何が?」

「俺が!!」

勇吾は混乱して戸惑う渚の肩を掴んでガクガクと揺さぶる。

「あうあうあう、ゆーちゃんーはーなーしーてー」

あんまり強く揺らされたものだから、渚は目を回して抗議した。

「——ああ、すまん。取り乱した」

どうにか平静を取り戻した勇吾は、きゅー、と目を回して引っくり返ってしまった渚を起こしてやりながら混乱した頭を整理した。

やがて復活した渚と向かい合って、勇吾は状況を説明した。
一昨日とまったく同じ状況である。

「——という事なんだが……」

勇吾が説明している間、渚は終始ニコニコ——というかニヤニヤと——あまり上品とは言えない笑みを浮かべていた。
そしてそのままの表情で——つまりは意地の悪い笑みのままで——渚は口を開いた。

それはもう楽しげに。

「せーしゅんだねえ」

「お前なあ……他人事だと思って気楽に言いやがって……」
「いーんじゃないかな。ゆーちゃんが誰をどう好きになっても。それはゆーちゃんの自由だし」

「まあ、そうなんだろうけどよ……なんつーか、我ながら節操がなくて情けないっつーか」

と、そこまで言うてから、勇吾はある事に気付いた。

「待てよ……俺がどう思ってようと、紫亜と紅葉が俺の事どうとも思っただけじゃ意味無いんじゃない？」

「あの……ゆーちゃん？もしかして今までそれ、気付いて無かった

の？それは人としてどーなのかとお姉ちゃんは思っただけど……」
渚が至極正当な突っ込みを入れるが、当の勇吾は聞いていなかった。
それどころか、さも重大な事実に気付いたかのように一人思考に耽
っている。

「そうだ！そうだよ！今なら俺が勝手に想ってるだけなんだ！今な
ら……」

勇吾は拳を握って、高らかに宣言した。

「今なら、俺が全部忘れちまえば、無かった事に出来るじゃねえか
！」

「……あの、ゆうちゃんは？それもやっぱ人としてどーなのかとお
姉ちゃんは思っただけど」

「何故だ！？」

自信満々で答えたクイズの答えが外れたかのように、疑念を全開に
して渚に噛みついた。

「……えと、ゆうちゃんはその姫神さんたちの事好きなんだよね？」

「……恐らく」

「……ゆうちゃんは姫神さんたちともっと仲良くなりたいとか、そ
ーゆつのは思わないの？」

「む……それは……」

勇吾は顎に手を当てて考え込み始めた。

「……………わからん」

勇吾の答えを聞いて、渚は溜め息を吐いた。

（はぁ……………ゆうちゃんってどこかズレてるんだよねえ。好きになつた娘の事忘れて無かつた事にしようなんて、普通思わないよう）

「しかし、渚は俺の案のどこが不満なんだ？紫亜達だって、俺みたいな奴に好かれたって迷惑なだけじゃねえか。プラマイゼロになつてメデタシだろ？」

真顔で言い切る勇吾。

その顔には何の迷いもなく、『やましい所は何も無い』と言わんばかりである。

「でも、ゆうちゃんは？ゆうちゃん自身の事はどうなの？」

渚は真面目な顔で訊いた。

その瞳にも、真剣さが見て取れる。

「俺？いや、俺の事なんかどうでも良いだろ」

勇吾はまさに『どうでも良い』という感じの口調で切り返した。

（うーん。やっぱり……………ゆうちゃんはズレてる。自分が駄目な人間だと思つから——とことんまで自分に自身がないから、自分の気持ちを無かつた事にするなんて発想をするのかな？）

渚は思う。

勇吾は自分を犠牲にするのを何とも思っていないと。自己犠牲が癖

になっているのかもしれない。
だとすれば、それは美談というよりただの『馬鹿』が付くほどお人
好しな愚者とも言える。

「紫亜達が好きだからこそ、自分のような人間が近づいては迷惑に
なる」

恐らく無意識なのだろうが、そんな論法で、勇吾は動いているのだ。

とはいえ、結局一番の原因は勇吾の鈍感さであるのだが。

何が『紫亜達も俺みたいにな奴に好かれたって迷惑なだけじゃねえか』
だろうか。

彼は自分の気持ちに正直であるべきなのだ。勇吾に惚れられている
と知れば、紫亜も紅葉も声を上げて喜ぶに違いないのだから。

（それでも、結局ゆーちゃん次第なんだよね。ゆーちゃんが決めた
ことなら、それが答えなんだよ、きつと）

渚はそう結論付けると、ふう、と息を吐いてから勇吾に言った。

「ゆーちゃんがそう思うなら、そうかもね。ゆーちゃんがしたいよ
うにしたら、一番だと思うよ」

「よっしゃ。んじゃ、この話はこれで終わりだな」

勇吾はそれだけ言っと、満足したように頷いた。

勇吾はグッと伸びをすると、自室へと帰っていった。

残された渚はこんな呟きを洩らしていた。

「……でも、何かありそうなんだよね……ゆーちゃんってそういう星の下に産まれてるみたいだし」

この言葉は、僅か数日後に実現することになるのだが、もちろん、勇吾はそんなことは知らない。

——さて、どうなることやら。

偶には、いついつ日も（前書き）

コメディ要素多めな話です。

いつもより若干長いですね。

では、本編をどうぞ。

偶には、こういつ日も

「カラオケ行かねえか？」

勇吾が弘平にそう言われたのは、勇吾が姫神姉妹に対する気持ちを『無かった事にする』と、心の中に押し殺し始めた二日後の事だった。

先日弘平に何か奢らせる約束をしていた（真つ赤な空を見ただろうか参照）勇吾は、料金が弘平持ちである事を条件に、それを承諾した。

そしてその日の放課後。

勇吾は一旦帰宅した後、よく利用するカラオケ店にバイクで向かった。今日は渚が仕事の関係で帰ってこないため、多少遅くまで遊び回っても支障ない。ただ、明日も学校なので限界はあったが。

ともあれ、渚の世話をするためにあまり羽を伸ばして遊ぶ事の無かった勇吾は、これ幸いと上機嫌で出掛けたのだ。

出掛けたのだが。

（何だつてこの二人がいるんだ？）

勇吾はカラオケ店に先に到着していた弘平と、もう二人の人影を見止めて首を捻った。

しかし、直ぐに弘平が誘った以外には考えられないか、と納得した。――ともあれ、ひとまずバイクを停めておいて、勇吾は三人に歩み

寄った。

すると弘平が早速噛みついてくる。

「遅えぞバカ勇吾！」

「……」

勇吾は無言で弘平を蹴倒すと、更に地を這う格好になっている彼の背中を踵でグリグリと踏み付けた。

「あだだだだ！やめろヤメテやめてくださいいいい！」

段々と卑屈になってくる弘平の謝罪三段活用をまるつきり無視して、勇吾は横に視線を投げる。そして視線の先で並んで立っている少女達に話し掛けた。

「よお、紫亜、紅葉」

軽く手を上げて挨拶する。

「チス。西口に呼ばれて来たよ」

「こんにちわ。緒方君」

それぞれ、挨拶が返ってくる。

「悪い。どうやら待たせちゃったみたいだな。んじゃ、早速入るか」

言って、勇吾は二人を従えて店に入ろうとした。

——と、にわかに足元から声上がる。

「おいコラ勇吾！ひたすら人を踏み潰しといて無視かお前！つーか何も言わずに蹴倒すなんて酷すぎる！」

車に潰されたカエルみたいになっていた弘平がやおら立ち上がって吠える。

勇吾はそれを、うるさそうに見やって、
「うっせえ。じゃあ次からは『蹴るぞ』って言うってから蹴る。そんでいーんだろ？」

「……」

——そう言われて、弘平は何か色々諦めたように黙った。

♪♪♪♪♪♪♪♪

そんなこんなで、一行はカラオケ大会と洒落こんだ。

一番盛り上がっていたのはやはり紅葉で、ずっとハイテンションを維持していた。

「選曲も女の子らしいもので、かなり上手かった」とは勇吾の弁。

弘平もそれなりに上手かったのだが、歌そのものが誰も知らなさそうなマイナーなアニソンだったので、評価は微妙だった。

勇吾に関しては好きなバンドである【アーク】の曲を———それしか歌ったことが無いのだが———いつに無く、熱く歌っていた。

……そして今は、紫亜が歌っていた。

曲は、バラード。

紫亜の落ち着いた声音が、曲調に良く合っている。

(……綺麗な声……だな)

勇吾は無意識に、そう頭に思い描いた。

(紅葉も上手かったが、紫亜の方が……なんつか——俺の好みに合ってる)

留まる事無く紡がれる思考。

(それに……綺麗なのは声だけじゃない。もっと綺麗なものが——)

脳裏に浮かんだのは、赤く染まる空の下で見た——紫亜の笑顔——

(って何考えてんだ俺は！？あの気持ちは理性で心の中に叩き込んで放置した筈だろうが！なのにあん時の紫亜なんて思い浮かべたら……)

勝手に余計な事を考え始めた意識に激を入れつつ、勇吾は頭を振って余分な思考を追い出した。

追い出したつもりだった。

しかし、それに反して、勇吾の思考は続く。

勇吾の理性を押し退けて。

そこで勇吾は溜め息をひとつ。諦めの吐息だ。

——もうここまで考えてしまったらしょうがない。

潔く——認めようじゃないか。

「あいつの笑顔を思い浮かべちゃったら——理性が削れて、いずれ——無くなる」

紫亜の歌声に混じって、勇吾の独白が虚空へと消えた。

♪♪♪♪♪♪♪♪

「いやー歌った歌った」

弘平が声を張り上げ過ぎたせいか、少し掠れた声で、ご機嫌に呟いた。

あれから延々3時間歌い続けた勇吾たち——主に紅葉と弘平だが——は、そろそろと店から出てきた。

「いや、歌いすぎだろ。お前の場合。しかも何だあの意味不明な選曲は」

多分に呆れの籠もった視線で弘平を見やって、勇吾。

「気にすんなって。いやー気分後悔だ」

「……『気分爽快』だろうが。悔やんでどうする」

発言するたびにアホさ加減が露見していく弘平に、それでも律儀に突っ込んでやる勇吾は案外お人好しかもしれない。

「あ……雨が降りそう」

「ありゃ、ホントだ」

勇吾と弘平の漫才じみたやりとりにも流石に慣れてきてのか、あっさりやり過ごして、紫亜が呟いた。
続いて、紅葉も便乗する。

勇吾もそれを聞いて空に目を向けた。確かに、来た時には晴れていたのに、今はえらく分厚い雨雲がこれ見よがしに空を覆っていて、今にも泣き出しそうだ。

「こりゃ一雨くるな。まだ時間は早いが、帰ったほうが無難かもしれない」

まだ遊び足りない気もしたが、雨に降られて立ち往生するのも厄介だ。

「そうだね。今日はここまでにしとこうか」

紅葉が同意して、今日はここで開きにする方向で話が進んだ。

弘平と紫亜にも異論は無いようで、そのまま決定した。

・・・したのだが。

『あいこでしょ！』

紫亜と紅葉はじゃんけんをしていた。

理由は・・・どうということはない。勇吾にバイクで送ってもらった権利を巡っての事だ。

今日はここでお開き、と意向が固まった直後、紅葉が「緒方、バイクで送ってよ」と言い出した。
そうになると当然紫亜も黙っていない。すかさず「私も」と口を挟んだのである。

そうして「第一回勇吾の送迎権争奪じゃんけん戦争」が勃発した。

「いつまで続くんた・・・？」

勇吾は腕を組んで呻くようにぼやいた。

38回。

紫亜と紅葉があいこを出した回数である。

いくら双子だといってもここまで同じ考えをするだろうか？

『あいこでしょ！』

グーとグー。またあいこだ。

少女二人はなにやら必死な感じで次の手を考えている。

「・・・何があいつらをあそこまで本気にさせてるんだ？」

勇吾は今まであいこの数を数えていたが、何か虚しくなつて、やめた。

「・・・なあ勇吾！」

背後で同じように少女らの姿を傍観していた弘平に、呼ばれる。何

事かと振り返り、問う。

「どした？」

「必死な女の子って、なんか萌えないか!？」

弘平がいつもどおりくだらない事を嬉々として言っのを聞いて、勇吾は肩をコケさせた。

しょーもなさすぎて腹が立った勇吾は、声を荒げて、

「だあああ!おのれは毎度毎度人の神経逆撫でしやがって!おい弘平っ!」

「なんだ？」

「蹴るぞっ!」

「へ?・・・うるげっ!」

叫ぶが早いか放った勇吾の回し蹴りは、問答無用で後頭部を叩き倒し、弘平は奇声を上げて地に突っ伏した。

——倒れる弘平の向こう側では、紅葉が拳を握ったまま悔しがり、紫亜が開いた掌を突き出して喜びの表情を見せていた。

・・・なんにしろ、42回のあいこの末に、勇吾が送っていいのは紫亜に決定したようだった。

雨に降られて（前書き）

今回は後半ちょっとだけシリアスです。

携帯だと若干読み辛いかもしいないので、一応パソコン推奨になります。

では、本編をどうぞ。

雨に降られて

「やれやれ・・・なんぼなんでも降り過ぎだろ、これは」

濡れた髪の毛を乱暴にタオルで拭きながら、リビングの窓から外の様子を伺って、勇吾はウンザリしたように呟いた。

窓の外では、風に煽られて軌道が変わり、横殴りになった雨粒が地を叩いている。

耳を澄ますと、雨の音とは別の水音が聞こえてくる。誰かがバスルームを使っている音だ。

本来なら有り得ない現象。勇吾がリビングに居て、渚は今日、仕事の関係で家を空けている。

これでこの家の住人は候補から外れることになる。

ならば今バスルームに居るのは誰か？

——と、雨と混じっていた水音が消えた。

それから約一分後、ぺたぺたと裸足で床を踏む音が微かに勇吾の鼓膜をくすぐる。

「——緒方君。お風呂、上がったよ」

呼ばれて、勇吾は振り返った。

視界に飛び込んできたのは、言わずもがな、紫亜の姿だ。

ここで事の経緯を説明しよう。
と言っても、大した事情があるわけではないのだが。

——カラオケからの帰り、勇吾はじゃんけんによつて二人乗りが確定した紫亜を、バイクの後ろに乗つけて、家まで送っていかうとした。しかし、ここで単純なイレギュラーが起こった。紫亜の家にたどり着く前に、とうとう雨が降り出してしまったのだ。雨は次第に強くなり、視界すら危なくなってきたところで、その場から比較的近くに位置していた勇吾の家に非難してきたのである。

それでも、勇吾の家に着いた頃には二人仲良く全身濡れ鼠になっていて、これでは風邪を引くからと、紫亜にシャワーを貸した次第である。

「おう。そうか」

言つて、勇吾は紫亜に視線をやる。彼女は今、勇吾のＴシャツを着ていた。

ズボンは流石にサイズが違つと履けないため、大きめのＴシャツで代用したのだ。

勇吾が着ても少し大きいと感じるような代物なので、小柄な紫亜は膝の辺りまですっぽり覆われている。

本来なら渚の服を貸すところなのだが、勇吾の姉たるあの女性の服は、その全てが衣服の機能性と言うものに真つ向から喧嘩を売るような物ばかりだ。

仕事柄、仕方ないと言えば仕方ないかもしれないが。

まあ、紫亜の今の格好、つまりいくら大きめとはいってもＴシャツ一枚と言うのは、思春期の少年に対して刺激が強いような気がしないでもないが、それでも裸と大差ないような透けたネグリジェモドキや、歩くだけで下着が見えそうになるスカートなどを目の前で着られているよりはいくらかましだろう。

「雨、止まないね」

勇吾の横に並んで、紫亜。

「ああ、雲の動きからすると、今夜いっぱいこの調子だろうな。大雨洪水警報も、さつき発令されたみたいだ」

「どうしよう。これじゃ帰れそうもない」

「家には車で迎えにこれる人、居ないのか？」

「うん。両親揃って、海外に出張中だから」

「で、紅葉も当然無理だからな。しゃあねえ。今日のところは泊まっただけ。明日には雨も止んでるだろうから、朝起きたら早めに出て、バイクで家まで送ってやるよ」

明日も普通に学校がある。鞆を取りに一度紫亜の家まで行く必要があるのだ。

送っていったら、そのまま二人乗りで登校してもいいだろうと、勇吾は考えていた。

——勇吾の通う学校は、距離によってはバイクでの登校が認められている。

勇吾の家は、許可が下りるギリギリの範囲に位置していた。

普段はガソリンがもったいないから徒歩でえんやこらと登校しているが、こんな時くらいは楽をしても良いだろう。

「いいの？」

遠慮がちな性格のせいか、紫亜が所在無さげに聞いてくる。

「良いも何も他に手が無いしな。今更遠慮しなくても良いだろ」

「——うん。わかった」

ほっとしたように、彼女は頷いた。

そのあと、紫亜は紅葉に勇吾の家に泊まる旨を電話で連絡した。

その時紅葉が何故かそれを認めず、挙句『私も行くー！』などと騒いだが、勇吾に『そりや無理だろ』、と諭されて渋々了承。

そして電話が切れる間際、『既成事実なんて作ったら承知しないからねー！』と何故か勇吾が物凄い声量でお叱りを受けたのだが、彼はやっぱりというか、さっぱり意味が分かっていなかった。

ただ、電話口から漏れていた紅葉のその言葉を聞いた紫亜は完熟トマトよろしく真っ赤になって目を伏せていた。

勇吾にはその意味も分からず、不思議そうな面持ちで首を傾げていたのだった。

流石キング。まるで恐竜並みの鈍さである。

——とまあ、そんなこんなでわたわたりしている内に、二人は空腹を覚えて、とりあえず食事を摂ることにした。腕を振るったのは言わずもがな勇吾である。

味の方は紫亜にも好評で、勇吾は満足げに箸を進めていた。

そして数十分後。食卓に並んだ料理が大方無くなり、現在はまったくと会話を楽しんでいた。

これまで勇吾は紅葉と紫亜がセットの時にしか会っていなかったから、紫亜と差し向かいでゆっくり話するのは新鮮でもあった。

と、他愛無い会話をしている中で、突然紫亜が居住まいを正した。

「……………？どうしたんだ、急に？」

「うん……………ちゃんとお礼、言いたくて」
真面目な表情で、紫亜。

対する勇吾は苦笑して、

「言ったろ？　遠慮はいらないって。むしろこうして話せて良かったと……」

「ううん、そうじゃないの」

勇吾の言葉を遮る形で、声をかぶせてくる。

「……………？」

「八年前の事……………覚えてる？」

「——ああ、あの事か」

『八年前』。その言葉を聞いて、理解が脳裏に広がる。

「あの時、緒方君が助けてくれなかったら、私はどうなっていたか分からない。ずっと怯えて、自分の殻に閉じこもっていたかもしれない」

ぼつぼつと、少しずつ、語られる言葉。

「姉さんや両親には迷惑を掛けたくなくて、ずっと黙って平気な振りをしてた。……でも一人で抱えているのはすごく……辛かった。それを救ってくれたのは、緒方君。……あなた」

小さな、掠れるような声。しかし、勇吾の耳にはしっかりと届いていた。

「今更。本当に今更だけど」
一度、目が伏せられる。しかしそれも一瞬の事。

「ありがとう。私を救ってくれて」

紫亜は勇吾の目を真っ直ぐに見つめて、言葉に確かな想いを込めていた。

ややあつて、勇吾。

「そりやどうも。どういたしまして——とでも言つべきかな」

滅多に見せない微笑を浮かべて——喧嘩の時に哄笑を上げることがあつたが、素直に微笑むのは稀だ——勇吾は返した。

意識して助けたわけではない。

それでも、自分の行為が一人の少女を救っていたのだと思うと、自然に表情が緩む。

紫亜も、八年間溜め込んでいた事を言えたためか、心のつかえが無くなったような表情だ。

それから、しばらく沈黙が続いた。お互い、何を話せば良いのか分かりかねていたのだ。

と、不意に勇吾が口を開いた。

「なあ、紫亜」

「なに？ 緒方君」

「その、苗字で呼ぶの、やめてくれないか？」

「……？ どうして？」

紫亜は首を傾げた。今までは普通に苗字で呼んでいたのに、突然そ

んなことを言われて、戸惑っているようだ。

勇吾は視線を逸らしつつ、

「——俺は、名前には意味があると思っている。『緒方』の名は顔も知らない両親の物だ。ただ、戸籍上は『緒方』である以上、他人が俺を苗字で呼ぶのは仕方ない。だが、『俺』の事を知っている人——友達には、『勇吾』と。俺自身の名で呼んで欲しいんだ」

それは他人にとってはくだらない拘りだろう。だから、『他人』にそれを言っても無駄な事だ。

故に、勇吾は『友達』以外にそれを言わない。

逆に言えば、それを話した今、紫亜を本当の意味で『友達』だと、勇吾が思っている事を示唆している。

「うん。わかった。え、と……勇吾——君」

頷いて、紫亜は勇吾の名を呼んだ。

ただし、呼び捨てにしようという試みは失敗に終わったようで、取って付けたように『君』を添えていたが。

「サンキュ。——ああ、そうだ。今の事、紅葉にも伝えておいてくれないか？」

「姉さんに？ いいよ、伝えとく」

「すまない。さて、そろそろ良い時間だ。明日に備えてもう寝ようか」

言って、勇吾は立ち上がり、二階——寝室へと足を向けた。

紫亜はもう少し話していたかったのか、少し名残惜しそうに躊躇していたが、やがて勇吾の後を追っていった。

雨に降られて（後書き）

前書きでも書きましたが、シリアス風味ちよっぴりなお話をお届けしました。

へっばこ物書きの龍之介です。

次回は恐らく新キャラが出てきます。

現状でも崖っぷちなのに何考えてるんでしょうね、私は？（訊くな）

しかし、その新キャラが今後の展開に深く絡んでいく予定が有ったり無かったりして外せなかったりする（ややこしい）。

あと、次回はほぼコメディ一色になるかと思えますので、軽いノリがお好きな方は覗いてやってください。

では、この辺で失礼します。

神様の裏切り（前書き）

まず、お詫びをします。

前回のあとがきで「新キャラ出します」と言ってたんですが、容量の関係で次回に延ばしました。予告を外してすいません。

さて、今回は物々しいサブタイトルのわりにコメディ多めな内容となっております。

では、本編をどうぞ。

神様の裏切り

人間、思いもよらない事態に陥ると、驚きで声も出ない事がある。

勇吾は朝起きた途端に、そんな状況に陥った。

（ありえん意味が分からんどーしてこーなったんだ！？）
酸素を求める魚よろしく、口をパクパクと開閉しながら、勇吾は内心、盛大に混乱していた。

昨晚、勇吾は紫亜に、トイレの位置を教えて、何かあれば俺を起こしてくれと言った後、渚の部屋で寝るように、と指示した。
紫亜も頷いて、ちゃんと渚の部屋に入った。そして自分は自室のベッドで、一人で眠りについたはずなのだ。

なのに……

（なのに何で紫亜が俺のベッドで——しかも俺を抱き枕にして寝てるんだよ！？）

つまりは、そういう事だった。

さっき目が覚めたら、違和感を感じたのだ。
腹の辺りが微妙にくすぐったいというか、何というか。

疑念を抱いて見下ろしてみたら、紫亜が勇吾をガッチリとホールド

して熟睡していたのである。

更に言えば、勇吾は何故か上半身裸であつた。寝巻き代わりに着ていた筈のＴシャツはいずこかに消え、鍛え上げられた腹筋がその姿を露わにしている。

いくら鈍感で朴念仁な勇吾でも、一応は男の端くれだ。朝起きたら上半身裸で可愛い女の子——下着とＴシャツしか着ていない——に抱き付かれてたなんて、いくらなんでも心臓によろしくない。

（……まさかとは思うが、覚えてない間に何かやらしたんじゃないんだろな！？）

物凄くリアルな予想が頭をよぎって、脳内で警報が鳴り響く。

すると、紫亜の抱きついてくる力が強くなった。必然、二人の体はより密着する事になる。

（待て待て待て待て！　どっから突っ込めば良いのかもわかんねえが、とにかく何かおかしいぞこの状況！）

どうにもならない事は分かっているが、だからといって落ち着いてもらえず、心の中でひたすら喚き散らしながら、勇吾は頭を抱えた。

「んっ」

と、勇吾が頭を抱えた時の動きに反応して、紫亜が身じろぎした。

（つてちよつと待て！今起きられたらどう考えても嬉しくない誤解を招くだろ！）

そんな殆んど悲鳴に近い叫びを——誤解かどうかは確信できないが——胸中だけで器用に上げて、勇吾は戦慄した。

同時に、神か仏かは分からないが、とにかくそのどちらかに祈る。
どうか紫亜が目覚めませんように――

――と、勇吾の叫びが神に届いたのか、とりあえず紫亜が起きる事は無かった。

（セーフ！ 居るかは知らねえが、とりあえずサンキュー神様！）
生まれて初めて神――別に仏でも良かったが――に感謝して、快哉を上げる。

――とはいえそうそう都合の良い神がいる訳も無く。

「んん……」

微かな声を漏らして、紫亜がまた身じろぎする。
今度は起きる類の動きではなく、単なる寝相。

そして、スリスリと頬を、勇吾の裸の胸元にスリ寄せて来た。

（おいこら！ ふざけんな神様ッ！）
クソツタレ

柔らかく滑らかな頬の感触がダイレクトに伝わってきて、混乱の極みに叩き込まれる。

信じてもない神を胸中で罵っているあたり、勇吾のパニック具合は深刻かもしれない。

――スリスリスリスリ

勇吾の肌触りが気に入ったのか、更に頬擦りが激しくなる。

（――マズイ。これは流石に不味いぞ。俺のポンコツな精神力じゃ、

そう長くはもたねえ)

理性の限界を感じて、混乱する頭を無理やり鎮めようとする。

(無だ。心を無に——女つてのは良い匂いがするんだな——じゃなくって！クールになれば、落ち着けば何とか——このまま抱き寄せたい——だ・か・ら！そうじゃねえだろ！)

心中で絶叫しつつ、無意識に紫亜の背中に廻っていた手を引き戻そうとした時、

「ん……」

紫亜の目が、開いた。

勇吾と、視線が絡む。

「……………」
「……………」

沈黙。

「……………」
「……………」

お互い見つめ合ったまま、石像のように静止する。

ややあつて。

「……………」

喉の奥が引きつったような声——ただ引きつただけの——を漏らし、紫亜が勇吾から弾かれたかのごとく離れた。

「ま、待て。とりあえず話を聞いたほうが吉というか何と云うか！——勇吾は次の瞬間には悲鳴を上げられるような気がして——直感的に間違いないと判断した——自分でも何を言っているか把握できないまま、とにかく喚く。」

しかし既に紫亜の口は開かれていて――

（だあああああ！ やっぱりそう来るのか！？）

半ば諦めるような心持で紫亜の反応を待つ――
と、

「――ごめんなさい！」

「あああ何か分からんが俺が悪かつ――っへ？」

良く分からないがとにかく謝っちまえ！と頭を下げかけてから、紫亜から意外な言葉が聞こえて、勇吾は思わず間抜けな声を出した。

「あのその私よく寝ぼけて自分のベッドから出てったりするから多分今回もそんな感じだと！」

紫亜にしては珍しく、取り乱した様子で捲くし立てる。

紫亜の話す内容を噛み砕いて、何とか勇吾の頭にもこの状況の理解の色が見えてきた。

「あー・・・つまり、これ――同衾したのは事故だから気にするなっ
って事か？」

かなりアバウトな解釈だが、間違っではない。

紫亜も頷いている。

「頬摺りも？」

さつきよりも強くコクコクと頷きが返ってくる。

「わかった。この事はスルーしよう」

一旦落ち着くと、意外とスムーズに思考が働いてくれる。何も間違いは起きていないようで、それは安心だ。そしてこれは事故なのだから、深く考えるのは止めておいた方が賢明である。

「う、うん」

少しどもりながら、紫亜が肯定してくる。

が、どこか態度がおかしい。具体的には、勇吾の方を見たり見なかったりと視線が忙しく動いているのだ。顔も、少し赤い気がする。

「勇吾君」

やがて、紫亜が小さな小さな声で勇吾の名を呼んだ。ゆつくりと、胸元辺りを指差しながら。

「……………」

勇吾は首を傾げながら自分の体を見下ろして、

「あー、そうか」

そこでようやく、自分が今、上半身に何も纏っていない事を思い出した。

+++++

・・・あのあと、いつまでもあしている訳にもいかないの、勇吾と紫亜は気恥ずかしい雰囲気を引きずりつつも、学校へ行く準備を始めた。

簡単に朝食を摂って、勇吾は制服に、紫亜は勇吾が洗濯して乾かしておいた、昨日の服に着替える。

そして二人並んで家を出た。

まずは紫亜の家に、彼女の鞆と制服を取りに行く必要があるの、先にそちらに進路を向けた。

目的地に到着すると、勇吾は家に入って準備をする紫亜をどこぞの忠犬よろしく待ち、やがて準備を終えて出てきた彼女を再び後ろに乗せて、今度こそ学校へ向けて愛車を走らせたのだった。

「あの二人って付き合ってるの？」

それが、学校に到着した二人に対しての周りの感想だった。

当然と言えば当然の反応であると言えた。

ただでさえ紫亜は学校内で『親衛隊』なるものが存在するくらい人氣が有り、尚且つ目立つ存在なのだ。

それが、最近になって急に男と一緒にいる姿がたびたび目撃されていて、拳句バイクの二人乗りで派手に登校した日には、いやでも注目が集まり、その中に交際を邪推する者がいてもなんら不思議はない。

そうした好奇の声は、小声の噂話のつもりでも、本人たちの耳にしっかりと届いていた。

とはいえ。その当の本人たちとは言つと。

（――、ちつ。なんだってんだ、この視線の雨は。胸糞の悪い）

勇吾は見世物みたいに注がれる視線に、あっさりとやさぐれていた。元々、どちらかといえばチンピラじみた男である。この反応は当然だった。

一方紫亜はというと、周りの囁き声が聞こえてくるたびに、目を伏せて恥ずかしそうにしているが、満更ではない、と言う感じで否定はしていなかった。

事実として付き合っている訳では無いが、いずれそうなりたいとは思っているので、少し嬉しかったりするのだ。

もちろん照れもあるが、敢えて否定するほどのものではない。

まあ、そんなこんなで。

勇吾は堂々と視線を無視し、紫亜は少し照れながら。

二人は教室へと歩いて行く。

勇吾と紫亜はクラスが違う。なので途中で別れて、それぞれの教室に入っていた。

神様の裏切り（後書き）

えーと、見事に予告を外したヘツポコ物書きの龍之介です。

次回こそ、新キャラ出します。

そして、これからストーリーが徐々に展開が速くなる予定です。

もうしばらく、勇吾の恋愛事情にお付き合い頂ければ幸いです。
ではまた。

発令！修羅場発生警報！

人間、自分自身すら把握できていない事を質問攻めにされれば、その心的な疲労は甚大な被害を精神に与える。

その上肉体的な消耗を強いられたら、どんな屈強な猛者でも耐えられるものではない。

勇吾は今まさに、そんな状態だった。

自分の席に突っ伏して、殆んどグロッキー状態で荒い息を吐く。

先ほど紫亜と別れてから、事の真相を聞き出さんとする野次馬の集団（女子たち）に、半ば拉致されるかのように質問攻め——尋問とも言う——を受けたのだ。

紫亜との事だけでなく、以前紅葉と差し向かいで弁当を食べていた事も言及され、「どっちが本命なの！？」「もしかして二股！？」「それとも双子そろっておいしく頂くの！！？キヤー！」などと勇吾にとってはちんぷんかんぷんな問いを散々投げつけられた。

（つーか一体何だよ『おいしく頂く』ってのは！？）

更には『姫神姉妹ファンクラブ』の連中から物理的な襲撃を受け、撃退するのに全力で戦わなければならなくなった。

（ええい、しつこい！！数ばかりゴチャゴチャと！！）

と・いうわけで。どうやら野次馬たちも、アイドル的存在である紫亜に直接訊くのは抵抗があるようで、対外的には一般人の勇吾が集

中砲火を浴びたのである。

「理不尽だ。俺が何したってんだよ、くそ」
教室で頭を抱えて、一人か細く呟く勇吾。

——と、そんな勇吾の肩がポンと叩かれる。

「お疲れさん。えらい騒ぎみたいだな、勇吾」

陽気な声に勇吾は振り返って、自分の肩を叩いた人影を視界に捉えた。

「——って昂！？ お前、帰ってきてたのか！」

ここ数日間、法事で学校を休んでいて、姿を見ていなかった人物が、そこに居た。

「よ、一週間ぶりだな」

彼はそう言っ、ニヤリと笑って見せた。

——彼は芹沢昂^{せうざわ けい}。日英のハーフで、顔はまるつきり日本人なのだが、髪だけは豪華な金髪だ。とはいえ、バランスの悪さは感じるが、顔立ちは非常に整っている。

そして勇吾の十年来の友人で、自他共に認める親友でもある。

勇吾は彼の事なら何でも知っていたし、彼も勇吾の事を誰よりも熟知していた。

昂は勇吾の隣の席に腰を下ろすと、最初と同じく陽気な声で言ってきた。

「聞いたぜ有名人。我が校の二大アイドル、姫神姉妹をを手籠めにしたらしいじゃないか」

「またそれか。いい加減殺意が沸くぞ、おい」

勇吾は多分にうんざりした様子で、呻く。

似たような質問をさつき散々言われたのだ。今更、同じ弁解を繰り返す気力は残っていない。

「——おやおや、折角、万年鈍感虫の勇吾に、彼女ができたと思っただけにな」

ニヤニヤと意地悪い笑みを浮かべて、昴。

それを見て、勇吾は気付いた。

「お前な。——さては、噂を頭っから信じてねえだろ？ 違っつて分かってて俺をおちよくってやがるな！」
言われて、昴は軽く肩をすくめる。そして、あっさりと認めた。

「あ、やっぱバレた？ そりゃ、お前が一週間で、しかも自発的に、二股で彼女作るなんてヨタ話、信じるわけないだろ。ノストラダムスの大予言とかの方がよっぽど信憑性あるぜ」

大分とひどい言われようだが、事実だけに否定できない。

「——とはいえ、だ。この噂、ここまで出回ってるって事は、全部出鱈目で、姫神姉妹とまったくの他人ってわけでもねえんだろ？」
昴から、的確な質問が来る。相変わらず鋭い。

「ああ、まあそうだけだな」

曖昧に、勇吾は小声で切り返した。

「俺としては、どーやって奥手な勇吾君が女の子とお知り合いになったのか、聞きたいんだけどな？」

意地悪く笑ったまま、告げる昂。

それを聞いて、勇吾は軽く思考に入った。

確かに紫亜は——紅葉もだが——勇吾にとって他人ではない。

友達として認識している。

ただ、友達以外の認識——異性としての——もあるから、ただの友達でもないような気がする。

その辺を、正しく説明する自信は、まったく無い。

仮に出来たとしても、それには紅葉とキスした事や、今朝方、紫亜とあわや一線を越える所だった事まで話さなければならぬ。

それは流石に気恥ずかしいし、あまりペラペラ話すべきでは無いように思う。

とはいえ。

（こいつには話しとくか。口の軽い奴じゃねえしな。——それに、こいつに事情を知ってもらった方が、今後なんかあった時に頼れるだろうし）

そう思い至って、勇吾は事の経緯を説明する事にした。

が、いざ話そう、と身を乗り出したところで、不意に横合いから声がかかった。

「勇吾ー！ おはよっ！」

突然飛び込んできた明るい声にタイミングを外されて、勇吾は肩を

コケさせた。

昂も、突然の闖入者の声に、驚いた様子を見せている。

「おはよう、勇吾君」

と、続いて、さつきとは別の、控えめな声が聞こえてくる。

「紅葉——紫亜も居るのか。おはよう」

とりあえず勇吾は声のした方に目を向けた。そこには、今まさに話題の中心となっていた姫神姉妹が並んで立っている。

（紅葉が俺を名前で呼んだって事は、紫亜が忘れずに伝えといてくれたみたいだな）

コケた肩を元に戻しながら、漠然とそんなことを考える。

「どうしたんだ？二人揃って」

「んー。ちよつとね。一度ちゃんとお礼言つとかないと、って思ってたさ。ほら、昨日紫亜を泊めてもらったじゃない？」

「ああ、それが。紫亜にも言ったが、別に構わねえよ。気にすんな」「でも、やつぱ悪いじゃない？私たち、会って間もないんだし、そこまで親しくもないんだし——」

紅葉がそう言った時——特に『親しくない』のあたりで——紫亜が露骨に不機嫌そうな表情を見せた。

（おい、何もそこまで怒らんでも——）

何故かは知らないが、紫亜が物凄く機嫌を損ねたようで、勇吾は焦った。

自分は別に悪くないはずだが、何か嫌な冷たい空気が背後を通り抜

けたような気がして、背筋に悪寒が走る。

何と言うか、どこに地雷が埋まっているか分からない地雷原のど真ん中を歩いているような、とんでもなく危険な気分だった。

数秒間不機嫌な表情のままで押し黙っていた紫亜だったが、やがて露骨に、周りに聞こえるような——いつもより力の籠もった声で——それを告げた。

——あえて、曖昧に。

「でも、私——昨晚は勇吾君と一緒に寝たのに」

地雷踏んだ。大惨事の予感。

「なっ」

紅葉が驚き過ぎて言葉を詰まらせた。

それに被せるようにして、クラス中から怒号が上がる！

『何だつてええええ！？』

「ってちよつと待てえええ！紫亜！お前あれは忘れるんじゃないかったのか！？つーか重要な部分を端折りすぎだろーが！それから昴！ニヤニヤしながら肩を叩くな！」

流石に黙ってはいられず、勇語が悲鳴じみた声で口を挟む。
が、それが裏目に出た。

「あ、そうだった。勇吾君は裸だったよね」

地雷炸裂、本日二回目。

『な・ん・だ・っ・てえええ!!?』

爆発するかのような怒号が教室中から巻き起こり、それに混じって昂が、またニヤニヤと勇吾の肩を叩いてくる。

「だ・か・ら！端折りすぎなんだよそれまでの経緯とか全部無視か！？それから昂は後で体育館裏に集合そんなニヤニヤした笑い浮かべて俺を見るんじゃないか！」

絶叫。とにかく絶叫する。

勇吾は肺活量と滑舌を最大限に駆使して、なんとか誤解を解こうと声を張り上げる。

しかし、勇吾の叫びも虚しく、騒ぎは際限なく大事に発展していく。そこかしこから

『キヤー！大胆発言!』

『卒業後すぐにゴールインか!?』

などと、とんでもなく飛躍した憶測が飛び交っている。

——と、不意に紅葉が勇吾に歩み寄り、ぐわし、と胸倉を掴んだ。何故か笑顔で。

「ゆーっごー？私、言ったよねえ？既成事実なんか作ったら承知しないって・・・!」

言って、紅葉はガクガクと勇吾の首を揺する。

（うおわっ!? なんだこの得体の知れないプレッシャーは!?!）

紅葉の笑顔に得体の知れない恐怖を感じて、勇吾は胸中で悲鳴を上げた。

そのせいか、胸倉を掴んでいる手を振り解く事も出来ず、されるがままに頭をシェイクされる。

それを見たギャラリーは、面白がってまた勝手な憶測を始める。

『おっ！なんだなんだ。三角関係か？』

『二股か？双子そろっておいしく頂くのか？』

憶測はどんどんエスカレートして、もはや収集が着かなくなってきた。

「違う断じて違う殊更じゆせうに違う！大体何だ『おいしく頂く』ってのは！？さっきも言われたぞそれ！っ！か味方は居ないのか味方はあ！」

紅葉に掴み掛かられたままの格好で、聞こえてきた邪推の数々を思いつきり否定してから、勇吾は救いを求めて昴を見た。

彼はもう、素の表情に戻っていた。勇吾から紅葉を挟んだ反対側で、腕を組んで事の成り行きを傍観している。

「タスケテクレ」

勇吾は長い付き合いの中で習得したアイコンタクトで、SOS信号を発した。

ちなみに、これは勇吾と昴の間でしか成立しない。

昴は勇吾の視線に気付くと、苦笑を一つ漏らして、アイコンタクトで答えてくる。

「ワカタ。マカセロ」

スツと自然な動きで、昴が動く。

そして廊下に出て行き、次の瞬間、突然声を荒げた。

「おい！先公が来たぞ！」

もちろん大嘘である。

しかし、皆あっさり騙されて、それまで大騒ぎだった教室内が急に静かになった。その刹那後。皆、弾かれたように慌しく散っていく。

「ほら。お前さんも教室に帰んな」

他の者が蜘蛛の子を散らすように席に着いていく中で、まだ頑固に勇吾の胸倉を締め上げ続ける紅葉に、呆れたように語り掛ける昴。

「でも、まだ話は終わってない！」

「んなもん後で良いだろ？昼休みにでも続きやれば良いんじゃないか？」

勇吾もぶんぶんと首を縦に振る。

「……………わかった」

たっぷり二十秒沈黙してからようやく頷いて、紅葉は教室を後にした。

それに続いて、紫亜も自分のクラスへと帰っていく。

数秒後、肩をすくめながら、昴が言ってきた。

「……………さて、詳しく聞かせてくれるな？」

勇吾はそれに、物凄く疲れた顔で、ただ頷いた。

それ以外の事をするには、どうやら氣力が足りないようだった。

針のムシロ（前書き）

コメディ多めですので、深く考えずにお読み下さい。

針のムシロ

今日も太陽は絶好調らしい。

矢のように降り注ぐ日差しを全身で浴びれば、誰しもそう思うに違いない。

今はまだ五月の後半だから、今年の太陽は少し気が早いのかも知れない。

しかしそれでも大して暑いと感じないのは、爽やかな風が頬を撫でていくからだろう。

(……………いや、それは現実逃避か)

脳裏によぎる感想を重々しく否定して、勇吾はため息を吐いた。

勇吾は思う。漠然と思う。

多分、この馬鹿みたいな日差しの中でも全然暑くない——寧ろ肌寒いくらい——のは、目の前で殺氣じみた気配を撒き散らしている少女が原因だと。

彼女はその雰囲気だけで周囲の体感気温を下げまくっている。

ゴジラだってこの少女——紅葉を前にしては裸足で逃げ出すだろう。

ここは屋上。時は昼休みだ。

勇吾と紅葉、紫亜と昴も加わって、四人がその場に居た。

(うつ……………この状態の紅葉相手に弁解なんて通じるのか?)

勇吾は胸中で情けなく呻いて、眼前の少女を見る。

怖い。物凄く怖い。

腕っ節云々とは別の、何か生物としての根本的な恐ろしさを感じて、勇吾は直ぐに目を逸らした。

この膠着状態が形成されたのはついさっき。

朝、紫亜による『勇吾と一緒に寝た』発言の真相を紅葉に告げるべく——でないと言がやばい——昼休みになるのを待って、紅葉を屋上に呼び出した事から始まった。

「つてなわけで」

紅葉と紫亜が立ち去った後。

勇吾は昴に事の顛末を全て話した。

紫亜と昔関わりがあった事、紅葉とキスしたこと、二人を同時に好きになってしまった事……そして、昨日事故とはいえ紫亜と同衾してしまったことなど、彼女たちに会ってから現時点までに起こった事、全てである。

「……………何とか、俺の居ない間に随分と愉快な事になってるみたいだな」

話を聞き終えた昴は苦笑で心中を表した。

そしてそのまま、思考に入る。

（やれやれ、話を聞いた限りじゃ、勇吾に自覚がないだけで……………ほとんどそこらに出回ってる噂と同じか）

額に手を置いて、黙考を続ける。

（俺の予想が正しければ、姫神紫亜は確実に勇吾への初恋を引き摺ってる。姫神紅葉も勇吾に気があるのは間違いないだろう。故に、姫神紫亜の『一緒に寝た』という発言に対して強い嫉妬が生じる。……………何故勇吾にその矛先が向くのかは分からないが。厄介なのは——勇吾に好かれている自覚が無いって事が一つ）

昴は持ち前の洞察力で、数秒の間にそれだけの事を看破してしまった。

それも、聞いた話の内容だけで、ほぼ完全な事実を。

昴は額に当てていた手を口元に移動させた。

（そしてもう一つ。これが一番厄介な点だ……………勇吾が致命的な勘違いをしている事——）

——と、そこまで考えて、昴はふと思考を止めた。

今はかなり状況が混乱している。

現状では細かい分析よりも、姫神紅葉の誤解を解いて、状況を整理しておいた方が良い。

昴はそう思い至って、思考の方向性を切り替えた。

「……………勇吾。姫神紅葉に対する弁解、お前一人で出来るか？」

「無理」

たった一言断言する勇吾。

男らしいというより、現状では単に情けない。

「だろうな。お前はそんなに弁の立つ方じゃない。仕方ない、もしお前じゃどうにもならなかったら、代わりに話を付けてやるよ。事情は大方理解したし、お前よりはマシに話せる筈だ」

「頼めるか？」

数瞬の間を置いてから、勇吾。

「任せな相棒」

陽気に言って、昴は勇吾の肩を叩いた。

そして、冒頭の膠着事態へと突入した。

「さて、どういうことか、説明してもらいましょうか」

ギロリと勇吾を睨み付けながら、紅葉が口火を切った。

「あーいや、その・・・」

思いつきりどもる勇吾。

こめかみには、早くも冷や汗が一筋流れている。

「は・っ・き・り・言・い・な・さ・い・!」

一文字ずつ区切りながら、物凄く不吉な感じで言ってくる。

「いや、だから・・・」

「・・・だから?」

今度は冷たく絶対零度の口調で聞き返してくる。なんというか、視線がとつても痛い。

（無理です!この任務は自分には荷が重過ぎますよ軍曹殿!?)
大混乱を起こした勇吾の脳内は、なんだから良い具合にぶっ飛んでいた。

誰だよ軍曹殿って。

『エンゴモトム』

勇吾は背中に冷たい空気を感じながら、かなり必死のアイコンタクトを昂に送った。

『リヨウカイ。サガッテロ』

昂はすっかり御馴染みになった苦笑を浮かべて、返答してくる。

そして、軽い足取りで紅葉と勇吾の間に割り込んでいく。

「ちよいとストップ。そんなに睨まれちゃ、勇吾も話し辛いぜ？」
勇吾を背中に隠す形で、昂が言う。

「誰よあんだ。朝も居たけど、何者？」
まるつきり怪訝な表情で、やはり冷たく告げる紅葉。

しかし、昂は意に介さずにその視線を受け流し、陽気に言った。
「おっと、そういや自己紹介した覚えが無いな。俺は芹沢昂。勇吾の親友だ」

「ふうん。それで、あんたは何でここに居るわけ？」

「だからそう睨むなって。俺は勇吾の代理人つてとこだ。大方状況は聞いてるから、口下手なこいつの代わりに俺が事情を説明するよ。」

「あんたが？・・・まあ良いわ。説明してもらおうじゃない」

紅葉の許可が下りた。

「OK。それじゃ、始めるか――」

昴はなるべく紅葉の神経に触れないように言葉を選びながら、勇吾から聞いた事の顛末を語りだした。

「――つてわけで、勇吾とそこに居る姫神・・・妹の方が一緒に寝てたつてのは、単なる事故で、特に何かあった訳じゃない」

しばらく黙って昴の説明を聞いていた紅葉は、突然くるりと首だけを紫亜に向けて、

「今の話、ホント？」

「・・・・・・うん。そう」

2秒ほど閉口してから、紫亜が頷いて肯定した。

「そっか。なら良かった」

心の底から安堵したように、紅葉は言った。

それまで周囲に充満していた殺気が無くなって、勇吾も安堵する。

（・・・・何か良くわかんねえけど、とりあえず助かった！無事生還であります軍曹殿！！）

勇吾は肺の中の空気を、根こそぎ溜め息に変えて吐き出し、心中で快哉を上げる。

・・・・だから誰だよ軍曹殿って。

「・・・でも」

「でも？」

・・・と、不意にポツリと呟かれた紅葉の一言に、昴が聞き返した。

紅葉は昴には答えず、彼の後ろに居る勇吾に問いを放った。

「どうして勇吾は・・・朝起きて、紫亜に抱きつかれてるって気づいた時点で、引き剥がさなかったのかなあ？」

首を傾げて、告げてくる紅葉。

（全然助かってねえええええ！？）

むしろ悪化してるかもしれない。

「ど・う・し・て・か・な・？」

一歩ずつ近づきながら、にこやかに言ってくる。

（それは俺も一応は男な訳で・・・あのまま抱きしめたいって誘惑が在ったからだけど！そんな事言ったら俺の命が^{ライフ}とってもマズイ事に！）

先ほど胸の内では上げた快哉は悲鳴に取って代わり、勇吾はどんどん詰め寄ってくる紅葉に追い詰められていく。

「えーと紅葉？何故そんな^{なにゆえ}に素敵な笑顔で詰め寄ってくるんですしよ？う？というかその振り上げた握り拳は痛っ！ちよっ痛てえ！脇腹は

地味にすつげえ痛いからNGだって！」

思わず敬語で問いかける勇吾だが、さらりと無視して、とっても可愛らしい笑顔のままでポコポコと叩いてくる紅葉。
腰が入っていて結構痛い。

「おー良いパンチ持つてるな」

「姉さん、世界狙えるかも」

「インパクトの瞬間に拳を捻ってるあたり、素質ありそうだな」

「コークスクリューパンチ？」

「そうそれ」

すっかり観戦モードに入った昴と紫亜が、お約束のボケをのほほんと交わしていた。

初対面のはずなのに、中々息の合ったやり取りである。

「って昴！見てないで助けるよ!？」

薄情な親友に救援要請を出す勇吾。

しかし、

「いやいや。そんな楽しそうじゃれ合い、邪魔すんのは野暮だろ」と、彼は陽気に言い切った。

「違う楽しかねえじゃれてねえ痛いだけだ！昴お前はいつペン眼科か脳外科へ行って来い！」

勇吾が魂で突っ込みを入れている間も、紅葉のラッシュは続く。

「紫亜！何とかしてくれよ！」

考えてみれば原因の一端である紫亜に、SOS信号。

されど、

「昨日は私が勇吾君を独占してたから、今日は姉さんに譲らないと」と、少し申し訳なさそうに、彼女は言った。

「ああもう！紫亜に至っては言ってる意味すら解らねえ!？」

勇吾は頭を抱えようと思ったが、紅葉のパンチをガードするのに手一杯で、それすらままならない。

「コラ勇吾！よそ見してないで質問に答えなさい!」

「だから脇腹はマジ痛てえから禁止だつて!」

「問答無用——!」

・・・・・・結局。

昼休みが終わる寸前までその尋問——八つ当たりとも言っ——は続き、勇吾は午後からの授業を机に突っ伏した状態で受けた。

——というか、紅葉のあれは本当にただの八つ当たりだったらしく、その後紅葉が勇吾に『何故紫亜を引き剥がさなかったのか』を質問してくる事は無かった。

針のムシロ（後書き）

さて、なんとか20話まで来ました。

執筆ペースがカタツムリ並に遅いヘッポコ物書きの龍之介です。

これからラストに向けて、少しずつシリアスが混じってきます。
なんとか書き上げますんで、もう少しお付き合い下さい。

清き瞳は誰を映す（前書き）

今回は、全体的に昂視点です。

清き瞳は誰を映す

屋上での一件から、少し後。

あれから、昴は紅葉、紫亜とすっかり打ち解けて、勇吾と一緒に彼女らと行動を共にするようになった。

元々人付き合いの上手い、器用な男であるし、勇吾の親友という事もプラスに働いた為、当然と言えば当然の結果ではある。

そして、二日後。

その日の授業を無事消化して、勇吾と共に帰宅しようとした昴は、下駄箱に違和感を感じていた。

「何だ、これ？」

靴の上に、何か小さな紙が乗っている。

ラブレターの類か？それにしても古典的な手法だな……。

普段から女子生徒に人気のある昴は、告白される事もしばしばある。なのでさほど驚きはせず、適当な感想を胸中で呟いてから、その紙を手にとってみた。

近くで見ると、その紙はただのノートの切端で、ラブレターとは少し違う様相だった。

四折りになっているそれを、開いて内容を黙読する。

『放課後、視聴覚室に来て』

ただ、それだけがボールペンで走り書きされていた。差出人の名前も無い。

「……ますます何だこれ？だな」

内容に関しては、告白の為の呼び出し状に見えなくもない。
が、その割にはお粗末なやり方でもあった。

（——目的が見えない。悪戯か？）

そう思い、紙を捨てようと軽く振りかぶって——昴はピタリと動きを止めた。

（・・・待てよ。このタイミング、もしかしたら——）

「おい、どうしたんだ？ 昴」

突然動きを止めた昴に、勇吾が声を掛けてきた。

「いや、何でもない」

昴は手を振ってそう言つと、紙をポケットに放り込んで、開いたままの下駄箱の蓋を閉じた。

そして、

「悪い勇吾。少し用事が出来た」

「用事？」

「ああ。確認したい事があってな」

「わかった。んじゃ、校門で待ってるよ。今日はウチに寄っていくんだろ？」

「すまない。じゃあ、少し行つて来る」

手を上げて勇吾と一度別れ、昴は歩き出した。

何か面白い物を見つけたかのように、口許を少し緩ませながら。

この学校の視聴覚室は、あまり使われていない。

通常の教室を二つ並べたくらいの広さの空間に、大きめのスクリーンや素人にはよく解らない機材、あとは標準的な机と椅子があるだけの、質素と言えば質素な教室である。

使用頻度が少ないためか、掃除も極稀にしかされておらず、どこか埃っぽい。

とは言え、位置的に太陽を遮る物が無いので、陽当たりだけは良く、窓からは赤い夕焼けの光が差し込んでいて、教室内は幻想的な光景だとも言えた。

(……状況だけ見れば、愛の告白ムード全開なんだが) ずさんな管理のせいで鍵の掛っていない戸を開けて、昴は内心呟いていた。

しかし、と、教室の中にいる人物を確認すると、今度は口に出して呟きを洩らす。

「どうも、あんまり色気のある話じゃ無さそうだな……」

昴の視線の先では、窓際の席のあたりに、夕焼けで赤く染まった少女——紅葉が一人で、こちらを見据えていた。

彼女はこちらの姿を捉えると、眉を寄せた。

「やっと来た」

「匿名で呼び出しといて、中々言ってくれるじゃないか」

不満げに言ってくる紅葉に、軽口で切り返ししながら、後ろ手で戸を閉める。

（さて……紅のお姫様が何の用だろうな？——まあ、可能性は一つしか無いわけだが）

思考を遊ばせて、軽口に機嫌を損ねた様子の紅葉を観察する。

と、不意に紅葉の表情が、不満げなものから、どこか気まずい感じのものに変わる。

視線を天井や窓の外に泳がせ、所在無さげに両手の指を絡ませながら、何か言おうとして口を開き、しかし言葉が見付からないように、直ぐに閉口してしまっている。

昴はしばらくその初々しいというか、恥じらいの様子を苦笑混じりに見ていたが——途中でその苦笑を意地の悪い笑みに変貌させて、やおら口を開いた。

「勇吾」

「はうつ」

昴が口にした人名に、露骨に反応する紅葉。

「……なるほど。やっぱり勇吾絡みの話か」

昴はやれやれ、と肩をすくめると、紅葉の傍らにある椅子に腰を下ろした。

「な、何で解ったの？」

恥ずかしさ半分、驚き半分。更に困惑をトップピングしたような表情で、紅葉。

「いや……俺らの関係で、わざわざ呼び出してまで話す事なんて、勇吾絡みの事くらいのもんだろ？」

「あ、うん……」

「そして用件は、何か聞きたい事——というか相談したい事がある、
じゃないか？」

「うん、そう……。それでさ……」

「どうすれば勇吾を振り向かせられるか……か？」

昴は紅葉が何か言う度に、先回りしたように言葉を被せる。

「……もしかして、全部お見通しだったりする？」

「大体はな。姉妹揃って勇吾LOVEだとか、その辺は気付いてるよ。あと、これまでの経緯も勇吾から聞いてるしな。——キスの事とか」

ニヤリと笑って、昴は口許を指差した。

「あうう……」

どうやらその事を思い出したらしく、完熟トマトよろしく真っ赤になって顔を両手で覆う紅葉。

彼女はしばらくその体勢で固まっていたが、不意に素の表情に戻ると、突然語気を荒げて詰め寄ってきた。

「そう……そこまで知られてるんじゃないわね。そうよ！ なけなしの勇気振り絞ってキ、キスまでしたのに、なんの反応も無いなんておかしいじゃない！」

（いや、一応君ら姉妹を異性として認識してるみたいだったが）

唯一全ての事情を理解している昴は、冷静に突っ込みを入れていた。とはいえ、ここで『勇吾は君らの事好きみたいだぞ』などと言うわけにもいかないので、心の中だけで、である。

「紫亜とは一緒に寝ちゃうし！ おまけに昔に二人は会ってるみたいだし！ なんか紫亜にフライングされてる気がする！」

「いや、だからそれは解決したことだろ。第一フライングなら・・・
事実としてキスしてるお前さんの方じゃないのか？」

「それはそれ、これはこれよ！」

「なんだそりゃ・・・」

昴はとりあえず律儀に突っ込みを入れながらも、内心ため息を吐き始めていた。

なにか話の流れがおかしい。どんどん核心から遠ざかりつつある。
なので昴は、ひとまず話の軌道修正を図る事にした。

「まあ、それはそれとして。・・・要は勇吾と、もっと深い
仲になりたいんだろ？」

「それは・・・そうだけど」

具体的な話になると、途端に紅葉は元気を萎ませた。
どうも、勇吾と仲良くなりたけれど、いざ行動を起こすとなると、
躊躇いがあるらしかった。

「つまり、何か勇吾との仲を発展させるような情報が欲しいわけだ
な？」

「そうそれ」

ふむ、と昴は顎に手を添えた。

（要約すると、妹の紫亜と勇吾の仲が何だか進展しているような気が
がして、紅葉の中で焦りが出てきた。何とか紫亜よりも、勇吾と距
離を近づけたいが、よく考えると打つ手が無い。

そこで『勇吾の親友』である俺に情報を求めてきた、か）

ふと、紅葉の方に顔を向ける。

「・・・」

・・・無言の圧力に晒された。

（やれやれ、困ったお姫様だ。・・・しかし、勇吾との仲が進展する情報か。そんなもの、あるか？無趣味で主夫候補なあいつが食い付く話題なんぞ、そうそう――）

「――あつたな、一個だけ」

思い当たり、鞆の中をゴソゴソと漁る。

「・・・つと。あつたあつた。ほら、これ。貸してやるよ」

見付かった目当ての物を、紅葉に放り投げる。

「わわっ・・・って、何これ、CD？」

昴が投げて寄越したのは、四角いプラスチックのケース、つまりはCDのケースだった。

ケースをマジマジと見つめて、紅葉が口を開く。

「えつと、『アークベストアルバム「紅」』・・・？」

「そう。読んで字の如く、アークというバンドのベストアルバムだ。いや、高かったな。まったく、限定発売なんてするから、町中探し回ったぜ」

「これがどうかしたの？」

「だから、それが勇吾と仲良くなるための夢のアイテム。勇吾は、アークのファンだからな。それ聞いておけば、あいつとの会話は事欠かないぞ」

「そうなんだ」

「・・・なんだ、その疑いの眼差しは」

「えー。だって、CD一枚分のネタなんて、そんなに有効なの？」

疑惑全開な紅葉の視線を、昴はさらりと受け流した。

「有効だな。ハッキリ言つてマ○ンテ級だ。いいか？勇吾はアークの事になると、やたらと熱くなるんだ。ほつとくと2時間くらい延々と喋り続けるくらいだ」

「・・・それは有効というよりは致命傷っぽいような・・・」
「まあな。とにかく、聞いてみとけ。損はしないはずだから」

紅葉はしばらくケースを見つめていたが、やがて顔を上げた。

「わかった！それじゃ早速、帰って聞いてみる！」

言つて、紅葉は無邪気に笑つた。それはとても魅力的な笑みで。

（う・・・これはまた、中々破壊力のある笑顔だな・・・あの目、まさに「恋する乙女」ってやつじゃねえか。・・・なるほど、勇吾はこれに落とされたのか）

「じゃ、私、帰るね。これありがと！」

紅葉は軽くウインクなどしつつ、羽みたいな軽い足取りで走り去つてしまつた。

残された昴は、なんとも言えない感覚に捉われつつ、再び鞆を漁つていた。

そして、何かを取り出した。

それは、四角いケースだつた。

『アークベストアルバム「蒼」』

「・・・で、本来一組であるはずの、もう一枚のCDがあるわけだ

が」

ケースを弄びながら、ごちる。紅葉に貸したのは、二枚同時発売のCDの内、一枚だけだったのだ。

「何か、片方だけ応援するってのは——しかも双子だし、フェアじゃねえよな・・・」

昴は恋愛に関しては、基本的に中立だ。なるべく、平等なポジションを取るようになっている。恋愛というのは個人のものだから、誰か一人に肩入れするのは、あまり好きではない。

このCDを適当な理由を付けて紫亜に貸してやれば、あっさり状況は平等になり、昴は自分のポジションを取り戻せる。

だが、

「あんな一途な瞳を見せられたら、応援したくなるよなあ」

昴は自分に言い訳しながら、ケースを鞆に戻した。

「仕方がない。あの瞳に免じて、あいつのサポートに廻るか。紫亜には悪いが、俺も自分のスタンスを崩す以上、全力でやらねえと」

そう言つて、昴は歩き出した。

待たせている少年。親友であり、全ての元凶でもある、鈍感大魔王、緒方勇吾の所へ。

「さて、紅葉に紫亜、そして勇吾。こいつらは一体、どんな結果を創造するんだか。まあ多分、蓋を開けてのお楽しみ・・・だな」

苦笑とともに紡がれた彼の言葉は、彼自身の耳にだけ届き、後は教室の埃っぽい空気に解けて消えていった。

清き瞳は誰を映す（後書き）

どうも、またまた更新を大幅に遅らせたヘツポコ物書き、龍之介です。

さてさて、次回はコメディ一色となる予定です。なんとか、近日中に更新しますので、お待ち頂ければ幸いです。

昂の計画（前書き）

真摯な瞳に心を打たれ、紅葉に協力し、勇吾との仲を取り持つ事に
した昂。

彼の打つ布石は物語を加速させ、結末へと導くのか？
あるいは事態をややこしくするだけなのか？

・・・真面目な前書きですが、本編はコメディが主軸です。

昴の計画

——太陽が沈む。

もう半分近くが山の向こう側へとその姿を隠し、赤く染まった空が少しずつ暗くなり、夜に侵食されていく。

勇吾はそんな夕方と夜の狭間の空を、スタンドで固定したバイクに跨りながら、ぼんやりと見上げていた。

昴を待っている間、とにかく退屈で、そろそろ焦れてきた頃合だった。

「遅いな……何やってんだ？あいつ」

呟いて、ポケットから煙草を取り出す。

が、直ぐにここが学校の校門前だという事を思い出し、舌打ちしつつポケットに戻る。

「待たせたな、勇吾」

と、軽く駆け足で近寄ってきた昴が、ポンと勇吾の肩を叩いて、空いている方の手で『すまん』と合図してくる。

勇吾は適当に手を振って返答した。

「構わねえよ……で、「確認したい事」は終わったのか？」

「ああ、用は済んだ」

「オーライ。それじゃ帰るとするか」

勇吾がそう言つと、昴は頷きながら、バイクの後ろに跨った——と
いつか飛び乗った。

勇吾はそれを確認すると、最近やけに出番の多くなってきた愛車の

アクセルを、一気に解放した。

「ただいま」

昴を連れて帰宅した勇吾は、玄関の扉を開けて誰に言ってもなしに、既に癖になっている帰宅の挨拶を口にした。

とはいえ、この時間、二人暮らしの兄弟の内、姉の渚は寝ているか仕事に出掛けているかの2択だ。

なので返事が返ってくる筈は無いし、勇吾も期待していない。

が、

「あ、ゆーちゃんーおかえりー！」

玄関の目と鼻の先にある廊下で、渚が元気一杯に、腕をブンブン振り回しつつ挨拶を返していた。

いや、それだけならまだ良いのだが、どういうわけか渚は下着姿で笑顔を振り撒いているのだ。

「っておい渚！ 何やってんだんな格好でそしてこんな所で！」

指まで差して炸裂した、勇吾の的確な突っ込みを受けて、渚はきよとんとした。それからしばらく沈黙していたが、やがて、

「……え？」

「だああああ！こいつ自分のやってる事すら把握してねえのか！？」

「この格好おかしいかなあ？」

「そこか！ その部分から突っ込むのか！？ ンなもんおかしいに決まってるだろ！ 五つ六つのガキじゃねえんだからちったあ恥らえ！」

キツパリと断言口調で叫ぶ勇吾。しかし、それでも渚は

「ほえ？」

と首を傾げて不思議そうな顔をするばかり。

「お・の・れ・は・つ・く・づ・く・く・！」

いい加減突っ込む語彙も尽き掛けてきて——同時に気力も減少傾向になりつつある——勇吾は地を這うような声で、手を戦慄かせながら最後の突っ込みを入れた。

「……何玄関で遊んでんだ？」

いきなり立ち止まり、尚且つ声を荒げている勇吾に、訝しい視線を投げつつ玄関へと足を踏み入れる昴。

そして首を傾げたままの渚を見つけると、軽く手を上げて陽気に言った。

「お、渚姉。遊びに来たぜ」

「あ！ すばるんだ〜！」

「おいおい、恥ずかしいから『すばるん』はやめてくれって」

「じゃあ、すんばる！」

「うーん。いまいち。それじゃ誰の事だか分かんないし」

「おい！ スルーか！？ 俺が突っ込んだ部分は全部纏めてスルーなのか！？」

渚の格好に対する言及も無く、のほほんと会話を始めた昴に、勇吾が吼えた。

それを聞いて、今更ながら渚の格好を注視して、ああ、と頷いた昴はさらりと言った。

「渚姉。いくら夏が近くて暑いとはいえ、その格好だと風邪引くぞ」

「そこじゃねええええ！」

「違うのか？ ……なら、中々刺激的で似合ってるよとか？」

「口説いてどうすんだ口説いて！」

「わーい、褒められたー！」

「だ・か・ら・！　なんで喜んでんだこの脳みそプリン！　ああもう万歳するな飛び跳ねるなくなるくる回るな嬉しいのは分かったからじっとしてろ！」

肺の中の空気を使いきって絶叫する勇吾。こめかみにはうつすら青筋が浮かび始めている。

が、昴はお気楽に、

「何怒ってんだ？カルシウムが足りてないぞ。ちゃんと小魚とか食べよ」

とのたまった。それに、渚が便乗する。

「そーだよ、ゆーちゃん。牛乳も飲まないと」

瞬間、勇吾の忍耐が限界を迎えた。

「やかましいっ！　昴一等兵は俺の部屋に集合、渚二等兵はとつとと服着て待機！　以上作戦終了であります軍曹殿！」

出た。軍曹殿。

勇吾は昴の首根っこを引っつかむと、そのままずるずると自室に引き摺って行った。

昴は大人しくされるがままになり、渚は「やった」二等兵・・・あれ？二等兵って何だろ？」とか言いながらまたも首を傾げていた。

荒々しく自室のドアを押し開けて、勇吾は昴をベッド目掛けて投げ

捨てた。

「おっと！・・・おいおい、手荒だな」

「うっせ。俺をおちよくった罰だ」

勇吾は半ば不貞腐れて、億劫そうに言った。

「何だ。気付いてたのか？」

「当たり前だ。何年つるんできてると思ってるんだよ」

顔を顰めて、嘆息混じりに告げる勇吾。

もはや怒りを通り越して諦観したらしい。

「おやおや、テンションの低い発言だな」

昴は肩を竦めると、ベッドの端に座り直した。

（さて……早いうちにカードを出しておくか。……確か来週、勇吾とアークのライブに行く予定があった筈だ。使うとすれば、そいつかな）

内心でこれから口にする事を吟味して、疲れた様子の勇吾を見やる。

「さて。テンション下降気味のお前には追い討ちかもしれないが、ちよいと報告がある」

「あん？ 何だよ？」

「来週、アークのライブに行く予定だったろ？」

「ああ……それがどうかしたか？」

気のない返事をしてくる勇吾に、昴は薄く苦笑した。それから、ごく端的に言っただけ。

「行けなくなった」

「は？」

「だから、行けなくなったんだよ。野暮用でな。面倒な用事なんだが、外すわけにもいかない内容でな」

言葉を濁しながら、告げる。それに勇吾は、こめかみを押さえて咳いてくる。

「あー、マジでか？ ライブなんざ、一人で行ってもあんま楽しくはねえんだが」

「だな。とはいえ、同士は何も俺だけじゃないだろ？」

「俺らの周りに、ンな奴いたか？ アークはまだインディーズだから、そんなに同好の士がいるとも思えんが」

落胆した様子の勇吾に、昂は、

（よし。あとは一押し入れるだけだ）

誘導に成功した事を確信する。一度突き放してから餌をちらつかせれば、多少の胡散臭さは誤魔化せる。これから話すことは作り話に近い事だから、必要な措置である。

「実はな。紅葉と話してて判ったんだが、どうもあいつ、アークに興味があるらしいんだ。CDは持つてるんだが、ライブには行ったことがないんだと。そこでだ。チケットはやるから、あいつと行ってきたらどうだ？」

「……あん？ 紅葉と？」

勇吾は腕を組んだ。しばし考え込むように、視線を虚空に彷徨わせる。

（紅葉がアークファンってのは初耳だな。……なら、紫亜はどうなんだ——って。何でここで紫亜が出てくるんだ？ 双子だからって、好みが同じとは限らんだろうに）

脳裏に浮かんだ紫亜に対する情動を、不思議に思いながらも打ち消せない。

今考えるべきなのは、話題の中心である紅葉の事だというのに。

（わっかんねえ。そういやここ数日、紫亜の事が意味もなく頭に浮かぶ時があるな。それは紅葉の事にしたって同じ様に浮かんでくる

が、この二つは何かが違う気もする。まったく、あの二人に会ってから、どうかしてるな、俺は。昔の俺ならこんなこと、考えもしなかった)

ふと気が付くと、思考がどんどん脇道に逸れている。

勇吾は頭を振ってその思考を一旦打ち消す。

(ま、いいか。どうせ行かなきゃチケットは無駄になるんだし)

「OK。そうする」

「そうか。ならチケットは明日にでも渡す。紅葉はお前から誘ってやれよ」

「分かった」

(とりあえず、賽を投げる事は出来たか。・・・後は、紅葉がどちらに賭けるか、・・・そして、どちらの目が出るか・・・だな。半か丁か。いずれにせよ、事態が動き出すのは間違いなさそうだ)
昂は勇吾の返答を吟味して、内心で呟き、続けて勇吾に気付かれないうようにため息をついた。

(問題なのは・・・もし、紅葉が上手くやったとしても、この鈍感大魔王オバカ・ユウゴがそれに気付かない可能性があるって事だよな・・・)

脳裏に描かれた物凄く有り得そうな結末に、昂は苦笑を溢していた。

「・・・何笑ってんだ？」

突然笑みを浮かべた昴に、勇吾の訝し気な声が掛かる。

それに、

「なんでもない。ただの思い出し笑いさ」

と、苦笑を一つ付け加えて、昴はその話題を打ち切った。

昂の計画（後書き）

コーヒーの飲みすぎで胃を痛めたのに、懲りずに三杯も飲んだアホな作者、龍之介です。

まずは謝辞を。

読者数が5000を超えました。

こんなど素人の文章を読んでくれて、ありがとうございます！

コメントや評価をくれた人には更なる感謝を。

あれはマジで励みになります。

そして次回予告。

昂の計らいで勇吾と初のタイマンデートをする事になった紅葉。

今日こそ勇吾を落とそうと（実際には、ある意味もう落ちてますが）意気込んで出掛けた紅葉だったが・・・

そんな感じのお話になる予定です。
では、今回はこの辺で失礼します。

『でーと』開始！（前書き）

勇吾と二人きりで出かける事になった紅葉。

待ち合わせをして、いざ出陣！

・・・とは行かず、待ち合わせ場所でちよっとトラブル。
さて、二人の『デート』の行方やいかに。

『でーと』開始！

「ど、どうしよう・・・」

紅葉は今日何度目かの眩きを、やけに緊張した面持ちで零していた。自室の洋服棚から引つ張り出してきた私服の数々を前にして、かれこれ一時間以上もうんうん唸り続けている。

「何着ていけばいいのかな・・・？」

誰に言うでもなく、また小さく眩く。

「明日・・・だよな」

息を細く吐いてから、紅葉はカレンダーを仰ぎ見る。

第二土曜日である14日の日付に、赤い丸が書き込まれていた。

紅葉が自分で書き込んだ、忘れてはならない事の・・・その日に予定されている重大な、少なくとも紅葉にとっては大事な大事なイベントの印だ。

勇吾から電話が掛かってきて、アークのライブに、それも二人で行かないかと誘われたのが、今日から一週間前。正確には6日前だが、この際どちらでも構わないだろう。

それに、紅葉は一瞬で『行くっ！』と答えた。

なにしろ、想いを寄せる相手との、二人っきりのデートである。

特別な用事があるわけでもないし、なんとしてでも行かねばならない。

・・・いや、実はその日は紫亜と出かける予定があるにはあったのだが、勇吾から電話が掛かってきた時点で、紅葉はキレイサッパリその事を忘れ去っていた。

しかし、紫亜には後でちゃんと断りを入れておいたから、問題は無いだろう。

……………無いはずだ。

ともあれ、紅葉は勇吾に誘いを受けた日から現時点……つまりデート前日まで、端から見てても異常なくらい浮かれながら過ごした。

昂に「……お前の頭は大丈夫か？黄色い救急車でも呼ぶか？」と呆れの言葉を掛けられるくらいだから、相当な状態だったのだろう。

だが、今の紅葉は浮かれていると言うよりは、どこか強張^{こわば}った雰囲気纏^{まと}っていた。

どうと言う事は無い。

これまでは漠然と「勇吾とデート」と浮かれていたただだったが、デート本番を明日に控えた今、徐々に緊張が生まれてきたのである。

折角のデートである。あまり変な格好で行くわけにはいかない。服装は真剣に検討する必要があった。

（明日は、勝負所よ。もたもたしてたら紫亜に先を越されちゃう）
その紅葉の意気込みは、なにやら執念すら感じさせる。

紅葉は目の前に並んでいる自分の私服の内、気に入っている物を数点選り分けると、それを持って洋服棚の横に設置してある等身大の鏡の前に立った。

「これは……ちょっと派手過ぎるかも。でもこっちは逆に地味だし……ああもう！」

べしっ^しと持っていた服を八つ当たり気味に床に叩き付けて、また別

の物を手に取る。

「これとこれは素材的に合わせにくいからダメ。――勇吾の話だとライブ会場は混むらしいから動きやすい方が・・・よし、下はこっちのスカートに・・・あっ！そういえばこのスカートに合わせて買った服、クリーニングに出しちゃった！」

・・・こんな感じで、紅葉が最終的に明日の服装を決定したのは、この１時間ほど後の事だった。

「やっべ。待ち合わせの時間ギリギリじゃねえか」

早足で道を急ぎながら、勇吾はポツリと呟いた。

現在携帯電話の液晶画面には8:55と表示されている。

待ち合わせの時間は9時ジャスト。

しかし、ライブの開始時刻は12時だから、本来ならこの時間に待ち合わせるのは不自然だ。

ならば何故こんな時間から集合しているのかと言えば、単に昴が昨日、突然言い出した『どうせ出かけるならライブ以外にもどこかに行ったらどうだ』という案を、勇吾が採用して今日一日を紅葉と遊び倒す事にしたためである。

まさしく、『デート』と呼ぶに相応しい状況である。

待ち合わせの場所は駅前にある噴水の前。

勇吾は今、丁度その噴水を肉眼で捉えられる程度の位置にいた。

今日の勇吾の服装は、黒っぽい色合いのジーンズに黒のシャツ。上着も黒。更には靴も真っ黒なブーツという、完全無欠の黒づくめスタイルである。

「さて、紅葉はもう来てるか・・・？」
視線を彷徨わせて、紅葉の姿を探す。

と、勇吾はしばらく辺りを見回してから、見慣れた人影を視界に収めた。

「お、いたいた・・・・・・ってありや誰だ？」

噴水の近くに設置されているベンチに、紅葉が座っている。

そして紅葉の周りには、金髪と丸坊主の男が二人、ヘラヘラと緩んだ笑みを浮かべてなにやら一方的に喋っている。

おそらく、何か頭の弱い口説き文句でも垂れ流しているのだろう。紅葉は愛想笑いのようなものを顔に貼り付けて、嫌そうな雰囲気ですべて対応していたが、男たちは気づく様子も無い。

「・・・もしかして、ナンパか？——朝っぱらから鬱陶しい事この上無いな」

勇吾は溜め息を吐いて、軽く指をポキポキと鳴らしつつ——彼らを黙らせに向かった。

「おい」

ベンチの近くまで歩いて、勇吾はそう話しかけた。

先に紅葉に挨拶しておこうとも思ったが、どう考えてもこの男たちの邪魔が入る気がしたので、まずはゴミ掃除から始めることにした。

「ああ？」

二人の男が同時に振り返り、やはり同時に威圧してくる。

「何だてめえは！？」

いきなり喧嘩腰の言葉を吐く丸坊主。

彼の顔にはこれでもか、というくらいピアスが満載で、もはやファッションの枠を超えている。

君は一体何がしたいんだと切に問いたい。

「…………いや、どっちかつーと、俺の方がお前に『何だてめえ』と言いたいんだが…………なんつーか、いろんな意味で」

予想外にインパクトのある丸坊主の顔面に、若干———というか全力で——身を引く勇吾。

と、丸坊主に呼応してか、金髪の方も顔を歪ませながら凄んできた。というか顔が壊れてしまったような気もするが。

「てめえ邪魔なんだよ、消えろ」

「いや、そんな面白い顔で凄まれてもな……………」

「んだてめえ！マジでぶっ殺すぞゴラァ！」

ますます顔が愉快に歪む金髪。

「……………もーいい。お前らの顔芸は正直見るに耐えん」

いい加減、面倒になってきたのか、勇吾がポツリと吐き捨てた。

恐らく、この金髪の彼は威嚇の為に顔を歪めているのだろうが、勇

吾には顔面神経痛にしか見えなかった。

勇吾は一生懸命こちらを恫喝しようとしている二人組みがなんとなく、生理的嫌悪感を伴っているような気がして、早々に消えてもらう事にした。

紅葉を待たせるのも良くないし。勇吾はその翠の瞳で二人の男をつぶさに観察し、頭の中で撃退の算段を組み上げていく。

さり気ない動作で膝を小さく曲げ、戦闘体勢に入ると、右側の・・・まだ顔面の歪んだままの金髪男に向かって一歩踏み出した。同時に、右の拳を強く握り込む。

滑らかな体重移動と共に息吹を一旦止め、そして放つ！

「・・・破っ！」

気合の咆哮が突き出される拳に力を加え、渾身の一撃が男の鳩尾に突き刺さった。

「ごげえ」

汚らしい呻き声を発して、体をくの字に折り曲げる金髪。

しかし、勇吾の攻勢は弛まない。

お辞儀をするように垂れ下がった男の頭、つまりは髪を掴み、無理矢理引き摺る形で呆然としている丸坊主に投げつける。

かなりの勢いで衝突した為か、丸坊主の体勢が崩れ、後方によって下がる。

・・・好機。

「つてめえ！」

投げつけられた仲間をポイと横に捨てて、丸坊主がよろけた体勢を立て直そうとする。

が、遅い。既に勇吾には止めの一撃を打ち出す用意が来ていた。

「ライダーキイイク！・・・もどき」

某仮面を被ったあんちくしょうの必殺技を叫びつつ、その実ただの飛び蹴りを放つ勇吾。

「・・・は？つてぎゃー！」

思いつきりその蹴りを顔面に食らった丸坊主が、とんでも無い勢いで後ろに吹っ飛んだ。

その進行方向には噴水があるから、当然・・・

ドッポーン。

やっぱりダイブした。

地味に飛び散った水飛沫が、戦闘終了の合図となった。

「おはよ、勇吾」

最早慣れているのか、勇吾の圧倒的な戦闘力にも大して驚かずに、紅葉が挨拶してきた。

「おう・・・っておお！？」

軽く挨拶を返してから、勇吾は紅葉を見た。そして、突然うるたえた叫びを上げる。

理由は単純明快だ。単に紅葉が可愛かったのである。

……いや、これまで何度も顔を合わせておいてそれは無いだろうと思うかもしれないが、この場合、勇吾の反応は妥当だった。紅葉は元々美人だ。それは疑いようがないし、勇吾自身認める所でもある。学校ではファンクラブもあるくらいだし。

しかし、今日の紅葉は特別だった。

（これは意外っつか……なんつか）

胸中で呟きながら、紅葉を再び見る。

今までに勇吾は、私服の紅葉を二度見ている。そのときの紅葉は彼女が持つ活動的なイメージ通り、ズボンを穿いていたし、もっとラフな格好だった。

しかし、今日の紅葉の服装はゆったりとした服に、チェックのスカートだ。

服は肩の辺りが大きく露出していて、そこから見えるうなじが妙に色っぽい。

耳に光っているのは恐らくイヤリングだろう。

総じて、『女の子らしい格好』なのだ。

これまでこういう服の紅葉を見たことが無かった上に、それがとんでもなく似合っているものだから、勇吾としては驚き、目を奪われるほか無い。

「どしたの？」

「ん・・・いや・・・似合ってるぞ、その服」

まさか紅葉に見とれてたとは言うわけにもいかず、勇吾は目を泳がせてぶっくらぼうに言うしかなかった。

「え、そう？やった！」

言って、紅葉は微笑んだ。それはもう、極上の笑み。

（う・・・ヤバイ！顔がにやけそうだ）

勇吾は紅葉の笑顔を見て、思わず緩みそうになる表情筋を叱咤した。気を抜いてしまうと、今にも微笑みが零れそうである。しかし、なんとか自制して、堪えきった。

「よし。それじゃ、行こっか！」

紅葉は勇吾の手を取って歩き出した。

勇吾のそれと比べると、とても小さく、柔らかい手。

「っておい！引っ張るなって・・・」

文句を言いながらも、しっかり付いていく勇吾。

『デート』は始まったばかりだ。

楽しい一日になりそうだと呟く勇吾の顔は、今度こそ笑っていた。

『でーと』開始！（後書き）

すいません。性懲りも無く更新が遅れました。

毎度お馴染みへっぽこ物書き、龍之介です。

今回は紅葉と勇吾の『デート』導入編でした。
次回から本番に入ります。

羽とハート

勇吾の住む街、尾野市から電車で30分、加えて徒歩二十分の所に今日の目的地であるライブハウスがある。

駅前に遊び場として賑わっている空間があり、昼間は中学生、高校生が娯楽を求めてそこに集まる。

そして夜中はバーや、いわゆる『いかがわしい店』が看板を上げ始め、二十歳前後の若者達がこぞってたむろするのである。

その若者の遊び場、通称『桜通り』の一角に、いくつかのライブハウスがあり、今日の目的地はその内の一つと言うわけだ。

始めてここを訪れる者は道に迷ったり、妙な輩に絡まれたりするが、勇吾は昴や弘平と共に中学生の頃からこの『桜通り』を何度も訪れているため、その心配はない。

「さて、どこから行こうか」

勇吾は紅葉に向けて、なんとなしに問いを放った。

今日の目標はアークのライブだが、それ以外にもこの桜通りには遊べる場所が充実している。

昴の提案通りに、色々廻って見るのがクレバーだろう。

紅葉はしばらく考え込むような素振りを見せていたが、やがて、

「んー・・・私はあんまりこの辺の事は知らないしなー」

「それもそうか。・・・ふむ、ここからだビリヤード、ダンス、あと普通のゲーセンあたりが妥当か。買い物するなら、少し

歩けばアクセサリーの店があるし」

「あ、アクセサリーの店、ちょっと行ってみたいかも」

「よし、なら決まりだな。行こう」

行き先が決まって、勇吾と紅葉は歩き出した。

「お、着いた。この店だ」

五分ほど歩くと、目当ての店に着いた。

アクセサリーショップ『クレイジーコール』

割と目立つ位置にあるその店は、アクセサリーの専門店だ。

女性向け、男性向けを問わない多様な品揃えで人気があり、特にシルバーアクセサリーに関しては、この店のオーナーの意向によって過剰なまでに数が多い。

更に上質かつ値段がお手ごろなので、学生の財布にも優しい人気店だ。

店内に入った紅葉は、早速キョロキョロとあたりを見回して、やがてネックレスやペンダントのコーナーに足を向けた。

「これとか似合うんじゃないか？」

ふと目に付いたペンダントを手にとって、勇吾が言う。

細い銀製の鎖の先に、同じく銀製の、小さなハート型の飾りが付いた代物だ。

シンプルだが、中々センスが良い。

「んー・・・どうだろ？ ハートとかは紫亜の方が似合うんだよね」
言われて、勇吾は今手に取ったペンダントを付けた紫亜を思い浮か

べた。

確かに似合いそうだ。彼女はあまりアクセサリーなどを身に着けないので、その分余計に似合うような気がするのだ。

紅葉でも充分以上に似合うとも思ったが、口には出さずにただ、そうか、と呟いてペンダントを戻す。

「あ、これ勇吾に似合いそう」

「どれだ？——ってオイ。何かそこはかとなく不吉だぞ、それ」

紅葉が持っていたのは、えらく禍々しい髑髏の飾りが付いたペンダントだった。

「えー、かつこ良くない？」

「どっちかつつーと不気味だ」

「むー」

何故かむくれながら、紅葉がペンダントを戻した。

それからしばらくあーだこーだ言いながら店内を散策、物色していたが、中々お気に召す物が見つからなかった。

——と、突然紅葉の視線が一点に定まった。

「あ、これ良い」

「ん？どれどれ」

紅葉が見ていたのは、フェザー型のリングだった。

どうやら紅葉は可愛い系よりクール系の物が好みらしい。表情を見るとかなり気に入っていることが伺える。

「あ、でも微妙に高い・・・むー、どうしょ」
「どうやら本気で気に入ったらしい。腕を組んでリングを凝視し始めた。」

値札に書かれている数字は5000。確かに『微妙』に高い。

(・・・ふむ)

勇吾は胸中で呟くと、紅葉が見ているリングをひよい、と摘み上げた。

「買ってやるよ。今日は懷に余裕あるからな」

「え？いいよそんな」

「気にすんな」

「でも・・・」

「ほら、行くぞ」

遠慮する紅葉にそう言つて、勇吾は歩き出した。

紅葉も後から慌てて付いて来る。

レジで清算を済ませて、二人は店を出た。

「ほい」

小さな袋に入れられたリングを、紅葉に渡す。

「あ、ありがと。・・・でも良いの？」

差し出された袋を受け取りつつ、紅葉が言ってくる。

「もしかして、余計なお世話だったか？」

「うん。そうじゃなくて・・・私、誕生日とか以外にプレゼント貰った事なんて無かったから、こういう時どうしたら良いか分からなくて。それに誕生日のプレゼントだって、お父さん以外に貰った事、無いんだ」

「そうなのか？」

勇吾は意外そうに尋ねた。紅葉程の容姿ならば、贈り物をする男など腐るほど居そうなのだが。

「うん。あ、でも、この勇吾がこのリングをプレゼントしてくれた

のは嬉しいよ。ちょっと戸惑っただけで」

勇吾の言葉を肯定した後、はにかみながら付け加える紅葉。
とりあえず押し付けにならなかった事に安堵した勇吾は、そうか、
と呟いた。

なんとなくプレゼントしただけだったが、どうやら喜んでもらえた
ようだ。

——と、勇吾の脳裏にふと閃くものがあつた。

さつき紅葉に却下されたハートのペンダント。

それが思考の真ん中に現れる。次いで、それを身に着けた紫亜の姿
が。

(・・・よし、悪くないな。この案)

数秒の思考の末に結論に達して、勇吾は財布の中身を思い浮かべた。

そして——

「——悪い、ちょっとだけ待っててくれ」

「え？うん、いいけど。どうかしたの？」

「買い忘れ、だな。買うものは決まってるから、一分も掛からない
と思う」

勇吾は紅葉にそう言い残すと、再び『クレイジーコール』の店内に
足を踏み入れた。

それからきっかり一分後、勇吾が店から出てきた。
目的のものはポケットの中だ。

「もう良いの？」

「ああ。スマナ、待たせて」

「うっん。それより、もうすぐライブの時間じゃない？」

携帯電話の時計を見ながら、紅葉が言ってくる。

「ん？・・・げ、思ったよりも長居してたみたいだな。よし、そろそろ行こうか」

現在の時刻は十一時四十分。ライブは十二時からだから、移動の時間を考えると結構ギリギリだ。

勇吾と紅葉は少し早足で、しっかりと横に並んで歩き出した。

ライブハウスに向けて。

アークのライブは盛り上がった。というかヒートアップすぎて、観客はほとんど狂乱状態だったから、初心者の紅葉には少し厳しかったかもしれない。

そもそもアークはヴィジュアル系バンドなので、ライブのノリが独特だ。

更に凶悪とも言えるメイクやダークな世界観に満ちた歌詞と、ハードで攻撃的な曲調が前面に押し出されているので、自然とライブハウスの中が一種の異世界のように思えてくる。

慣れてくると『そこが良い』と思えるのだが、そうでない者には中々キツイ。

紅葉は『そうでない者』だったから、序盤から周りの雰囲気吞まれて小さくなっていた。

だからライブそのものには集中していたとは言い難い。

ただし——人が密集したライブハウスの中なので、自然に勇吾と密接出来て、違う意味では大いに楽しめたというのは乙女の秘密だ。

羽とハート（後書き）

毎度お馴染み、投稿遅刻魔ことへっぽこ物書き龍之介です。
まずは謝罪。

二週間も遅れた拳句話が短い……………反省してます、はい。

そして告知。

もう少しでクライマックス——告白イベントに突入します。
何とか今月中に最終話を投稿しようと思っています。

……………出来たら良いなあ

でーと偵察隊！（前書き）

少し短いですが、ノリはいつものコメディです。

でーと偵察隊！

終始半狂乱のノリで行われたライブも終わり、勇吾と紅葉はライブハウスを後にした。

ライブが終わった時点で時刻は二時ジャスト。昼食を摂らずにライブに突貫した為、二人とも強い空腹を覚えていた。

この後も遊び倒す予定の二人は英気を養うため、休憩を兼ねて、ファーストフードの店で遅めの昼食を取っている。

「それにしても」

注文したハンバーガーやポテトを胃に収めながら他愛の無い会話をしている、不意に紅葉が呟いた。

「どうした？」

「ここ——桜通りって、もっとアウトローなイメージがあっただけど、そうでもないよね」

「紅葉のイメージでは、ここはどういう感じなんだ？」

問われて、紅葉はしばし黙った。少し考えた後真顔で、

「んー、なんか不良の吹き溜まりで、麻薬とかが密かに売られてて、ヤクザの人とかが鉄砲バンバン撃ってる感じ」

「・・・いや、どこぞのスラム街じゃねえんだから」

勇吾は律儀につっこみを入れた。

どうも紅葉の脳内では、ここはえらく危険な無法地帯として認識されているらしい。

確かに、ここ桜通りは不良——素行に問題のある若者が集まりやすい場所ではあるし、暴力団関係者も多い。喧嘩沙汰も頻繁に起こる。が、いくらなんでも発砲事件は無いし、麻薬も横行していない。喧嘩沙汰と言っても血の気が多い若者同士が殴り合う程度で、警察が

動く程では無いのだ。

「つーか、何でそんな大層なイメージを持ってんだよ」

「えーと、何か昴がそんな事言ってたんだけど」

「・・・元凶はあいつか。どうせまた面白半分で適当な事言っただろーな。ったくロクなことしねえなあ金の髪は」
「やれやれ、と、勇吾は溜息を吐いた。

と、紅葉が何かを思い出したようにポンと手を打った。

「あ、そうだ。昴で思い出したんだけど」

「ん？」

「勇吾って、お姉さんが居るの？」

「それも昴から聞いたのか？」

いつの間にそんな事まで喋ったんだろうと思いつつ、問い返してみる。

「うん。それで・・・昴に言われた事で、気になる事があつたから、勇吾に聞きたいんだけど・・・」

そこまで言って、紅葉は気まずそうに言葉を切った。

勇吾は紅葉が語るのに任せ、紙コップのアイスコーヒーで喉を潤しながら続きを待つ。

そして数秒後。紅葉が意を決したように、重々しく口を開き――

「――勇吾ってシスコンなの！？」

「ブッ！」

あまりにも予想外な上に奇想天外な紅葉の問いに、勇吾は思わず飲んでたコーヒーを吹き出した。

コップの中に吹いた為、テーブルを汚す事は無かったが、口の周りがベタベタになってしまう。

それを紙ナプキンで乱暴に拭ってから、勇吾は濡れ衣を晴らすべく、

叫んだ。

「断じて違う！俺が姉魂と書いてシスコンだと！？何を根拠にそんな――」

「だ、だって昴が『勇吾の幼稚園の時の夢は、おねえちゃんとけっこんする！ だった』って言ってたし」

「何その純度100%の捏造エピソード！？そもそも俺の幼稚園時代にはまだ昴と会ってもねーだろ！その時点で嘘って気付こうよ紅葉！」

「ほ、他にも『勇吾は中学生の時まで渚姉と一緒に寝てた』とか言ってたんだけど」

「あ・い・つ・はー！最早根も葉も無いどころか種の時点でありえん事を！」

脳裏にニヤニヤ笑う昴が出てくる。

とりあえずそのツラを300発程ブン殴りたい衝動に駆られながら、勇吾は最大限の否定を込めた言葉を紅葉に向けた。

「とにかく！俺はシスコンじゃねえし昴の野郎は後でフライングニードロップの刑に処す！おまけに地獄突き10発もセットでプレゼント！以上作戦終了であります軍曹殿！」

また出た、軍曹殿。

勇吾の迫力に押されたのか、少しぎこちなく頷く紅葉。

「う、うん。わかったから落ち着いて、勇吾」

「………わかった」

とりあえずシスコン疑惑は晴れたようなので、勇吾は一旦黙った。しばらく、沈黙が続く。

「ふう。……昴、今何してるだろ？」

話題の路線を逸らすためか、紅葉が聞いてきた。

その問いに、勇吾は天を仰いで、投げやりに呟く。

「さーな。こんだけ噂されてるんだから、どっかでくしゃみでもしてるんじゃないか？」

「つくし」

芹沢昂は何の脈絡も無くくしゃみをしていた。

「……何だ？ 誰かが俺の噂でもしてやがるのか……？」
鼻の頭を指先で撫でながら、語散る。

彼は今、とあるファーストフード店に居た。

ジーンズにＴシャツ、その上に白い上着を羽尾っている。
少しこつい印象のブーツの爪先には、鉄板が仕込まれていて、蹴りの威力を上げる効果があった。

現在腰を落ち着けているファーストフード店は桜通りにあるので、一応喧嘩沙汰に備えての配慮だった。

とはいえ、基本的には特にこだわりの無い、普通の服装である。
ただ、色の濃いサングラスを掛けているという事だけが、特徴と言えれば特徴だが。

（——しかし、どうにもややこしい事になったもんだな）
昂はくしゃみの事は早々に思考から追いやって、現状に対して愚痴を溢した。

彼の目の前には、眉を八の字にしかめている少女——紫亜が居た。
彼女はこの店に入ってからずっとある一点を注視し続けていて、テーブルに並んでいる、先程注文した食べ物には手を付けてすらいな

かった。

昴は眼前に座する紫亜の視線を辿った。

すると、勇吾と紅葉が何か会話をしながら食事を摂っている光景が視界に入る。

・・・もうお気付きだろうが、昴と紫亜、勇吾と紅葉の二組は、現在同じ店の中にいた。

というか、勇吾と紅葉が桜通りに来た段階からずっと、後を着けていた。

つまりは、普通に遊んでいる途中である勇吾と紅葉、それをただ見ている昴と紫亜、という構図だ。

なぜこんな状況になっているのかというと、まあ、大した事ではない。

元々今日は、紅葉と紫亜の二人で買い物に出かける予定があったのを、紅葉が『でーと』の為に突然キャンセルしたのだ。

紫亜はそれを了承したものの、浮かれ気味な姉の様子を見て、なんとなく訝しんでいた。

そこで紫亜は、最近紅葉と仲の良い昴に、何か知らないかと問い詰めた。

その時、昴が思わず口を滑らせて、あっけなく今日の事が紫亜にバレてしまったのである。

自分の思い人と、姉とは言え一応恋敵である紅葉がデートするとなれば、興味が無い筈が無い。

しかし、基本的に大人しく、心優しい紫亜だから、真っ向から邪魔をするほどの攻撃性は持ち合わせていなかった。

が、かといって何もしない訳にもいかない。

故に、勇吾と紅葉の『でーと』を偵察——というか観察する事にした。

昂は、この桜通りを紫亜単独で歩き回るのは危険だと判断して、紫亜に付いてきたという訳だ。

「……まあ、個人的に勇吾と紅葉が何をやらかすかに興味があつた、というのも本音ではあるが。」

「紫亜。この後もしばらく歩くんだから、食つとかないとキツイぜ？」

親の仇でも見るような雰囲気で見つめる紫亜に、昂が声を掛けた。

「……」

「……聞いてねえし。おーい紫亜さん？そんな気合い入れて睨まなくてもよくないか？」

「……」

（あかん。完全に回線が途切れてる）

仕方ない……と口の中だけで呟いて、昂は右手の中指と親指をくっつけた。

いわゆる『デコピン』の構えである。

そのまま右手を紫亜の後頭部に移動させ、指先にグツと力を込める。そして狙いを定めて――

——ベシッ

「きやつ」

渾身の一撃を受けて——と言ってもデコピンなのでたかが知れているが——紫亜が小さく悲鳴を上げた。

「な、何？」

後頭部を軽く押さえて、紫亜が振り向きながら聞いてくる。彼女は微妙に涙目になっていたが、昴は気にしなかった。

「よーやく気付いたか。いつまでも睨んでないで、何か腹に入れないと後が辛いぞ」

「え、あ、うん」

勇吾達の方をチラチラと伺いつつも、取りあえずは納得したらしく、紫亜はほったらかしにしている少し冷めたハンバーガーを齧った。

どこか小動物的な印象の食べ方で、最初の一口ではパンの部分しか口に入っていないようだった。

（……なんかこう、リスとか、そんなんを見てるような気分だ。——そーいや昔飼ってたハムスターのハム吉って、あんな感じだったな）

昴は適当な感想を胸中で呟いて——流石に声に出して言うわけにもいくまい——自分のハンバーガーの最後の一片を口に放り込んだ。

それから十分程経って、勇吾と紅葉が席を立った。

「ん？　どうやら動くみたいだな」

昴が持っていたコーヒーのカップを置いて、呟く。

昴は紫亜が食事を摂っている間、それとなく勇吾達の様子を見ていた。そういう事に抜け目の無いのが、この昴という少年の特徴だった。

視線を紫亜に転じる。すると、丁度彼女もトレイの食料を征服したところだった。

「紫亜。勇吾が動くようだから、俺たちも行こう」

「うん。行こう」

短いやり取りを終えて、二人は勇吾達の尾行を再開した。

でーと偵察隊！（後書き）

へっぽこ物書き、龍之介です。

今月中には終わりませんでした（汗）

まだいくつかエピソードが残ってるので、それを投入してから終わらせようと思います。

次話の投稿は、一週間以内には出来ると思います。

それでは、また。

公園で一休み

「まだ歩くのか、あいつら」

昂は眉を寄せつつ、呆れたように呟いた。

その隣では、少し疲れた様子の紫亜が溜め息を吐いている。

ファーストフード店から出た勇吾達は、その後一度も休む事無く動き回っていた。

彼らがまず向かったのはゲームセンターだ。

パンチングマシーン——パンチ力を計測するアレだ——であっさり最高得点を叩き出していた辺りは、何とも勇吾らしい。

その時、先にそのマシーンを使ったカップルの男の方——それなりの得点を出して、女に自慢していた——が、面子を潰された逆恨みで勇吾に喧嘩を売ったが、2秒で勇吾に殴り倒された。

馬鹿め、喧嘩は相手を見てから売れ——とは、その時の昂の率直な気持ちである。

その後はどうも買い物コースに突入したようで、本屋、CDショップ、雑貨屋など、無節操に店に入っては次の店へと足を向けていた。距離があるため会話を聞くことは出来ないが、見た限りでは、どうやら勇吾が紅葉に引つ張り回されているようだ。

そして、尾行が目的の昂達もその後を追い掛けて、あっちへウロウロこっちへウロウロとしていた。

そして現在、勇吾達は化粧品のお店——恐らく紅葉が強引に勇吾を連れて行ったのだろう——から出てきたところだった。

勇吾達は一言二言会話をすると、また何処かへ向けて歩き出した。

「まったく。尾行するこつちの身にもなれ、あの馬鹿どもめ」
かなり理不尽な悪態を吐いて、昴は掌で額を押さえようとした。
が、サングラスが邪魔だったので舌打ちしつつ諦める。

正直なところ、昴はやや疲労していた。単純に歩いた距離のせいと
いうのもあるが、最大の理由はやはり尾行という行為の特殊性だろ
う。

常に動き回る相手に気づかれないうまま後をつける事もさることなが
ら、今回の目的からするとその上で相手を観察しなければならない。
昴だけなら、それもさして難しい作業ではないのだが——紫亜の存
在がそれを許さない。

逐一勇吾たちの死角について動く昴に、紫亜が着いてこれないので
ある。

(……ま、普通的女子高生相手に、人間の死角だの、察知されない
距離感だのを把握しろといっても仕方ないんだけどな)

昴はずり下がってきたサングラス——サイズが少し大きいのだ——
のブリッジを持ち上げつつ、勇吾達の方を見やる。勇吾が紅葉に引
っ張られて、たたらを踏みながら着いて行っている。

「ありや、すっかり紅葉のペースだな。しかし……何とも忙しいデ
ートだな」

「そうだね……」
思わず愚痴を零した昴に、紫亜が同意した。そちらに視線を転じて
みる。

彼女は青菜に塩、といった風体で、一見して疲弊している事が伺え
る。彼女は体力的には極普通の女の子だ。

テンション最高潮で殆んど疲れ知らずの紅葉や、元々常人を遙かに
上回る体力の持ち主である勇吾と同じように動き回るのは、やはり
キツイのだろう。

昴はそんな彼女の頭にポン、と手を置くと、労わるように囁いた。
「まあ、あいつらだつてそろそろ一服入れる筈だ。もう少し、頑張ろうぜ」

「——っん。頑張ろう」

紫亜がしっかりと頷いて、二人は勇吾達を追つて、また歩き出した。

「——ん？ この道は」

先ほど歩き出してから数分後、昴が何かに気付いたような声色で呟いた。紫亜が聞き返す。

「どうしたの？」

「ああ。実はこの道、桜通り唯一の公園、『桜樹広場』にしか通じてない道なんだ」

「それがどうしたの？」

「公園に向かうって事は、少なくとも一休みするって事だ。あの公園は、そういうスペースが充実してる」

それに紫亜が小首を傾げて、訊いてきた。彼女はこのあたりの土地に明るくないので、あまりピンと来ないのかもしれない。

「そうなんだ。……ねえ、『桜樹広場』って、どんな所なの？」

「かなり広い、割と自然の多い所だ。管理が行き届いてるから綺麗だしな。昼間はカップルとか、女の子同士の集団が結構集まってる。まあ同時に、ナンパも多いんだがな」

「昼間は、ってことは、夜は違うの？」

紫亜が昴の説明の一部を聞き止めて、聞き返す。

それに、昴は昔を思い出すように軽く天を仰いで、

「ん？ ああ。夜は暴走族とか、不良集団がどっからともなく湧いて出てくる。中学の時——勇吾とよくここへ来てた頃は、ブラックサンダーとか 餓王髑髏 の連中が多かったかな」

「?? ぶらつくさんだー? がおうどくろ?」

紫亜が首を傾げて鸚鵡返しに言った。いきなり聞きなれない名称を聞かされて、大分混乱している。

昴は苦笑して、簡単に補足した。

「暴走族の名前だよ。ここの暴走族の中では、規模も悪質さも最大級のな。……と言っても、今はもう居ないだろうけど」

「居ないって、どうして?」

「一昨年……いや、三年前か? まあとにかく、少し前に壊滅したからさ。——というか、勇吾と俺がやったんだけど」

「え?」

さらりととんでもない事をカミングアウトした昴に、紫亜が驚愕の表情を向ける。

「驚くのはまだ早いぜ。ブラックサンダーの方は、一月かけて俺と勇吾が二人でぶっ潰したんだ。俺の手引きで、闇討ちと奇襲と罠を使ってな。でも、餓王髑髏は勇吾が一人で……しかも一晩で壊滅させた」

「ひ、一人で? それは……」

その先の、いくらなんでも無いだろう、という紫亜の言葉は、昴の平静そのものな発言にかき消された。

「ところで、勇吾に姉が居るのは知ってるよな?」

「う、うん」

「その勇吾の姉——渚姉が、餓王髑髏の連中に怪我させられたんだ。まあ、怪我と言っても軽い打撲程度だったんだけど。原因は、餓王髑髏のリーダーが渚姉に振られたことらしい。要するに逆恨みさ」

そこで昴は一度言葉を切った。何気なく、足元に転がっていた空き缶をカラン、と蹴飛ばしてから、続ける。

「……で、色々屈折しちゃいるが、勇吾にとっては唯一の肉親である渚姉は、大事な存在だ。くだらない理由で大事な姉を傷付けられ

て、勇吾は当然怒った。というかその事を聞いた瞬間にプツンした。そして、一人で 餓王髑髏 の溜まり場に取り込んだんだ」

「……………」

横で紫亜が息を呑んだ事が、気配で知れた。

彼女はただ、話の続きを待っているようだった。

「俺は少し遅れて勇吾の援護に向かったんだが、その時には、殆んど喧嘩は終わってた。援護するまでも無い。あの馬鹿は、たった一人で50人近い 餓王髑髏 の構成員を叩き伏せたんだ。——化け物さ、あいつは。喧嘩に関しちゃ、真正のな」

「……………えーと」

あまりに凄まじい話の内容に、紫亜は口ごもった。どうも、コメントに窮しているようだ。

普通なら、こんな話を聞かされれば「ありえない」と一蹴すればそれまでだ。

だが、話の中心が勇吾なので、話が微妙にリアルなのだ。

昴が至って真顔で語っていることも、紫亜の混乱に拍車をかけている。

しかし、そんな紫亜の内心など意に介さず、昴は毒づきだした。

「まったく。規格外にも程があるぜあのバケモンめ。例えるなら人間サイズのゴジラ。相手が武器を持ってようがお構いなし、人数の差も意味は無しだ。あいつ、俺が駆けつけた時、片手で相手を持ち上げてたんだぜ？ 拳句そのままぶん投げやがったんだ。怪獣だよ、怪獣」

「何もそこまで言わなくても……」

くそみそに言い出した昴に、紫亜が言う。が、昴は無視したようだった。

「よし、そろそろ件くだんの公園だ。よーやく一休み出来そうだな」
呟いて、『桜樹広場』へと視線を投げる。数人の学生、カップルがそこに居た。

その中に混じって、勇吾と紅葉の背中も見える。どうも休める場所を探しているようだ。

その背中を見ながら、傍らの紫亜に声を掛ける。

「とりあえず、俺たちも行こうか。適当にベンチでも見つけて、少し座ろう」

「あ、うん。流石に、ちょっと疲れちゃった」

そうして、昴達も、勇吾達に続いて『桜樹広場』へと足を踏み入れたのだった。

公園で一休み（後書き）

今回は割りと早く投稿出来ました。

休みの日は家から出ない、モグウな物書き龍之介です。

次話の構想は大体出来てるので、恐らく直ぐにお届けできると思われます。

血の海に沈む（前書き）

今回はちょいシリアスです。

そしてPC推奨。携帯だと、ちと読みにくいかも。

血の海に沈む

「これでよし、と。——しかし、暑いな今日は」

ガコン、と音を立てて落ちてきた缶ジュースを取り、昴は眩い陽射しに目を細めた。

『桜樹広場』に入った昴と紫亜は、勇吾達がベンチで小休止を取るのを見計らって、こちらも休憩を取る事にした。

その折、昴は飲み物を買うために紫亜を待たせて、自販機を探し始めた。

自販機は一分も経たない内に見付かり、昴は紫亜のアイスティーと自分のコーラとを買ったのだった。

用が済んだので、昴は踵を返して歩き出した。

勇吾達がいつ動きだすか分からないから、あまり紫亜と離れるのは得策ではない。

それに――

「――桜通りに女一人じゃ、やっぱ危ないしな」

夜の桜通りなら間違いなく危険だ。

まあ、今は昼間だからさほど危険では無い筈だが、それでもやはり、用心するに越した事は無い。

（――まあ、大丈夫だとは思っけだな）

胸中で気楽に呟き、ただしそれとは相反して、昴は歩みを速めた。

「前言撤回。全然大丈夫じゃねえ」
紫亜の所に戻ってくるなり、昂は暗澹^{あんたん}たる面持ちで呻いた。

紫亜を待たせていたのは、勇吾達のいる場所からは少し離れたベンチだった。

そこに紫亜は居た。

ただし、その周りに見覚えの無い男が数名、紫亜を取り囲むように集まっている。

その男たちは、この桜通りには腐るほどいるタイプの、軽薄をイラストにして目鼻をくっ付けたような連中だった。

誰がどう見ても、完全無欠にナンパである。

「目を離して一分そこでナンパされるとは。いや、確かに紫亜は可愛いけどさ、もうちょっとこう、なんつーか」

ぶつぶつと文句を呟くも、当然その文句に言い返してくる者は居ない。

紫亜の方に視線をやると、物凄く困ったような顔をしている。蛇に睨まれた蛙とでも言えば伝わりやすいだろうか。身を小さくして、明らかに怯えている様だった。

「やれやれ、もう涙目じゃないか」

まあ、初めて来た場所で、それも一人ぼっちであれだけの数の男たちに囲まれれば、無理からぬ事かもしれない。

「早めに行ってやるべきかな、これは」

昂はそう判断すると、酷く億劫そうなため息を吐いた。

「紫亜」

昴は紫亜に群がる男たちの間をすり抜けると、最早泣き出す寸前の彼女に声を掛けた。なるべく優しく、安心させる様に気を遣う。それが功を奏したのか、紫亜の表情が和らいだ。ただ、それでもまだ、声は硬い。

「あ……昴君」

「誰だデメエ」

紫亜の言葉に被さるように、男たちの中で一際体格の良い男——恐らくこいつがリーダー格なのだろう——が、昴を睨んだ。

「ん？ 俺か？」

どう答えたものか昴は迷ったが、よく考えれば答える義務は無い。なので無視して、紫亜に買ってきたアイステイーを渡す。

——と痺れを切らしたのかリーダーらしき男が、声を凄ませて、

「その娘は今、俺らが話してるんだ。お引取り願おうか」

「お前らが息を引き取れ。阿呆」

間髪いれず、昴が言い返した。

それから男たちを順番に指差して、

「ブタ鼻とウマ面、それにサカナ顔。まったくいつもこいつも不細工面並べて、何が楽しいんだお前ら。もしかしてあれか？ 近くの動物園から脱走してきたのか？ だったら人に危害を加える前に檻の中に叩き返してやろうか」

淀みなく紡がれる罵詈雑言。問答無用の挑発だった。

案の定、男たちは顔を真っ赤にして激昂した。

「ンだとデメエ！」

「ぶっ殺すぞゴラァ！」

しかし彼らの怒りなど歯牙にも掛けず、昴は更に挑発する。

「おーお、今度は揃って茹タコの真似か。獣にしては器用だな」
それが決定打になった。男たちは先程よりも更に顔を真っ赤にして、

「っ構うこたあねえ！ぶっ殺せ！」

一斉に、彼らは飛び掛ってきた。

全員冷静さを失っていて、明らかにブチ切れている。

対して、昴は極めて冷静だった。

慌てず騒がず、襲い掛かってくる男たちから距離を取る。紫亜を戦闘に巻き込まない為の配慮でもあった。

こうなる事は予想済みだ。だからこそ、無駄に挑発して彼らの理性を殺いだ。

普通に戦っても勝てるだろうが、相手は三人いる。完全に戦闘をコントロールできるわけではない。故の挑発。これで男たちは、正面から来るしなくなる。

男たちはそれぞれ構えを取った。多分、テレビで見た格闘技の構えか何かを真似しているのだろう。大仰なだけで、大して意味は無さそうだ。

ともあれ、昴もそれに合わせて構えた。

と言っても、彼らのように大げさな構えを必要とする訳でも無かったが。

ただ、自然体からやや右足を後ろに下げ、腰を少し落とす。両腕はだらりと体の横。

どうと言うことは無いが、相手がどんな攻撃を仕掛けてきても、どうとでも対処できる構えだ。

そして右手には、何故かまだコーラの缶を持っていた。
意味ありげに、右手に保持している。

昂は戦う体勢を作ると、視線だけ動かして男たちを観察した。

相手は三人。

リーダー格のブタ鼻男にウマ面、それとサカナ顔だ。

全員どうやら素人のようで、構えからは格闘技をやっている気配はしない。

「死ねえ！」

叫びながら、サカナ顔が拳を振り上げて突進してくる。その後ろから、ウマ面も奇声を上げて突っ込んできた。

昂は敢えて何もせずに、彼らの接近を待った。

そしてこちらの武器の効果範囲まで近づいてきたのを見止めると、右手を真っ直ぐ、サカナ顔に向けた。

瞬間、ブシュツ、という音と共に、昂の持っていたコーラの缶が火を――では無く、中身である炭酸飲料をぶち撒けた。

昂がよく振ったコーラの缶を開けたのだ。

「め、目があああ！目が痛えええ！！」

「やかましい。しばらく黙ってる」

「げぼああああ！？」

コーラが目に入ったらしく、顔面を押さえて叫ぶサカナ顔を、昂は煩そうに蹴倒した。

鉄板入りの頑丈なブーツで一撃されたサカナ顔は、もんどりうって昏倒した。

一応加減はしておいたので、死にはしないだろう。サカナ顔が完全に沈黙したことを横目で確認して、昂は視線をサカナ顔からウマ面に移した。

ウマ面は、仲間がいともたやすく気絶させられたのを見て一瞬躊躇ったが、すぐにまたこちらへと突っ込んできた。

「野郎っ！」

怒声と共に突き出される拳に、昴は真横に体をずらす事で対応する。拳の射線上から、昴の体が完全に外れた。

——と同時に、ウマ面の体が中を舞った。空中で綺麗に一回転して、背中から地面に激突する。

拳を避けたとき、昴がさり気なく残しておいた右足で、彼の両足を払ったのだ。

カハツと肺の中の空気を吐き出して、ウマ面の動きが止まった。意識はあるようだが、あのダメージではしばらく動けないだろう。

「テメエ」

最後に残ったブタ鼻が短く、呻くように言った。ギリツと奥歯を噛んで、続けてくる。

「よくも……よくも弟達を……！」

「兄弟だったのか、お前ら？——何ともまあ、個性的な血筋だな」

「お前は俺を怒らせた……弟達の仇は取らせてもらっぞ！」

「いや、死んでないだろ。そいつら」

「問答無用！」

ブタ鼻は一人ヒートアップして叫ぶと、ポケットからバタフライナイフを取り出した。

パチン、と、刃が出てくる。

しかし、昴は刃物の登場も大して気にはならないらしく、気楽に構えたまま嘯いた。

「物騒だな。そういう道具を使うなら、せめて豚から猿程度に進化

してからにしてくれ。前足じゃ扱いにくいだろ」

「誰が豚だこの野郎！」

たまらず、ブタ鼻が叫んだ。顔面が見る見る怒りで赤黒くなっている。

このまま行くと脳の血管が切れて卒倒しそうである。

——と、ブタ鼻が突如口元を歪めた。余裕を見せるように笑い始める。

ナイフを掲げて、自信満々に言ってきた。

「へへへ、お前マジ死んだぜ。俺のナイフを——このブラッドエッジを見て生き残った奴は、今まで一人もいないんだからなあ！」

それを聞いて、昴は辺りを見回した。

「——少なくとも見積もっても30人以上はいそうだが、皆殺しにするのか？」

休日の『桜樹広場』は割と人が多い。そんな中で喧嘩を、しかもナイフまで持ち出してやり合っている光景は、当然ながら目立っていた。というか、彼らの周囲にはかなりの数の野次馬が集まっており、すっかり注目の的である。

「う、うるせえ！」

精一杯カッコ付けたつもりの台詞に素で突っ込まれて、ブタ鼻が逆ギレした。

言うまでも無いが、すごくかっこ悪い。

「死ねえ！」

ブタ鼻は逆ギレの勢いそのままに、ナイフを腰だめに構えて突進してきた。

（流石は豚。愚直なまでの突進だな。というかこんなショボイ攻撃で『死ねえ！』とか言われても困るぞ）

呑気に思考しながら、昴は上段蹴りの予備動作に移った。

「——当たる訳ねえんだから」

言いながら、昴の感覚では割と強めに位置するくらいの蹴りを放った。

しかし、一般人の感覚ではプロ野球選手のスイングにも匹敵する凶悪な一撃が、ブタ鼻の側頭部を直撃する。

鈍い、肉と骨が悲鳴を上げればこんな音が鳴るのではないか、と言うような音が、辺りに響いた。

流石は金属板の仕込まれた安全靴仕様のブーツだ。蹴りの威力を倍近く跳ね上げてくれる。

と、ブタ鼻本人には悲鳴を上げる余裕すら無かったらしい。何も言葉を発する事無く、奇妙な格好で吹っ飛んだ。

その光景を、周りの野次馬が息を呑んで見つめていた。人が吹っ飛ぶような蹴りなど、恐らく見たことが無いのだろう。

ある意味、当然の反応だった。

「……ま、こんなもんか」

しかし、昴は肩を竦めるだけで、あっさり踵を返した。

あの蹴りが直撃したのだから、恐らく意識を保ってはいないだろう。威力だけなら、勇吾を相手にしても通用する自信がある。チンピラごときが耐えうるものではない。

そう確信して、紫亜が居るベンチに向けて歩き出す。

「——スゲエ！ 立ったぞあいつ！」

と、突然上がった野次馬の歓声に、昴は振り返った。
そして、かなり嫌そうな顔で、呻く。

「……………頑丈だな、おい」

すると、確かな手ごたえで仕留めた筈の顔、ブタ鼻が、よろめきながらも立ち上がっていた。

殺気立った目でこちらを睨んでくるが、焦点が狂っているのか、昴と視線がぶつかる事は無かった。

そして手には、蹴られながらも放さなかったらしく、ナイフを握ったままだ。

「ったく。ちょっとプライド傷ついたぜ。…………ま、良しさ。もう一発蹴飛ばせば、流石に黙るだろ」

昴は溜め息を一つ吐いて、気分を切り替えた。

格下に自分の蹴りを堪えられたのは確かに良い気分では無いが、だからと言ってヘコむような事でもない。昴の本分は、喧嘩にあるわけではない――

昴は改めて構えを取り、ブタ鼻に視線を投げた。

と、そこで、ふと違和感を覚えた。

（……………？ 何だ、この感覚？）

何かがおかしい。

だが、具体的に何がおかしいのかは分からない。
妙な感覚だった。

（どこだ、この違和感の根源は。俺の体に異常は無い。あのブタ鼻はこっちを睨んでやがるだけで、特におかしな所は……………）

「うーあああああ！」

昴の思考は、ブタ鼻の狂ったような雄叫びに掻き消された。
ブタ鼻は先程と同じく、ナイフを腰だめにして突っ込んでくる。

（チツ。野郎、よくあんな焦点の合っていない目で走れるな。……
…焦点の合っていない？——まさか！？）

ハツとして、ブタ鼻を見やる。

彼はもう昴の目と鼻の先に居た。

だが——彼は最早、昴を見ていなかった。焦点の定まらない視線は——昴の背後、即ち紫亜へと向けられている。

「があああああ！」

既に意味を失った咆哮を垂れ流して、ブタ鼻は思考に追われて反応の遅れた昴の真横を通り過ぎた。それでも勢いは収まらず、更にスピードを上げていく。

（しくじった！ 奴は既に、まともな思考を保っちゃいない！ 本
能で、近くにいる自分にも勝てる奴を攻撃してるだけだ！）

昴は内心で自責の叫びを上げ、同時に、弾かれたようにブタ鼻の後を追う。

が、昴が後を追いつめた時点で、もうブタ鼻と紫亜の距離は3メートルも無い。

「紫亜！ 逃げろ！！！」

昴が声を張り上げて叫ぶ。

だが、紫亜は動かなかった。いや、動けなかった。

* * * * *

それは、当然の反応だった。

凄まじい形相で、それも刃物を持って突進してくる男を前にして、平然と身かわせる女子高生など、普通は居ない。

（あ、足が動かない……逃げなきゃいけないのに——動けない！）

紫亜も懸命に逃げる努力をしていた。

頭では分かっている。動かなければ怪我をする——もしかしたら命に関わるかもしれない。

だがそれでも、紫亜の身体は動かなかった。

度を越えた恐怖心が、紫亜の身体を支配していたのだ。

（勇吾君……）

そう、心の中で呟くしかなかった。

最早、悲鳴を上げることすらままならない。

（た……すけて）

凶刃は、もう目の前にある。

（——助けて、勇吾君！）

胸中で勇吾の名を叫びながら、数秒後に来るであろう痛みにも、紫亜は固く目を瞑った。

狂ったような雄叫びが、間近で聞こえた。

「ぐばああああー！」

痛みが来る、と紫亜は身を強張らせる——

——が、予想していた痛みは来なかった。衝撃も、何も無い。紫亜がその事を疑問に思った瞬間。

「昂！ やれ！」

「——勇吾君！？」

突如聞こえた想い人の声に、紫亜は目を開いた。

視界に飛び込んできたのは、大地に膝を付き、苦しげに荒い息を吐く勇吾の姿だった。

勇吾の身体の間こう側では、昂がブタ鼻に止めを刺している。

恐怖の対象が消えたためか、紫亜の身体は彼女の意味どりに動いてくれた。

直ぐに勇吾に駆け寄り——紫亜は悲鳴を上げた。

勇吾の腹に、ブタ鼻の持っていたナイフが、半ば程まで突き刺さっていたのだ。

傷口からは血が溢れ出し、彼の足元は既に血の海のようにになっている。

（勇吾君が……庇ってくれたの？）

紫亜は胸が熱くなるのを感じた。

「勇吾君」

勇吾は紫亜に呼ばれて振り返った。そして力なく微笑んで、紫亜の頭に、優しく触れた。

そして、

「紫亜。怪我は無いか？」

ナイフが刺さっていると言うのに、勇吾はそんな事はどうでも良い

とばかりに無視して、紫亜に言ってきた。

大怪我をしているのは彼自身だと言うのに、こんな状況でもまず人の心配をしている。

紫亜は、何も言えなかった。血に染まりながらも自分を心配してくれる勇吾に、掛けられる言葉が見つからない。

紫亜は瞳を潤ませて——ただし泣き出すことだけは堪えて——ただ頷いた。

自分は大丈夫だと伝わるように、力強く。

それを見た勇吾は一言、「良かった」と呟いた。

そして——次の瞬間、自らが作り出した血の海の中に、音もなく崩れ落ちた。

血の海に沈む（後書き）

高校生のくせに未だに歯医者が嫌いな龍之介です。

くそう、ガリガリ遠慮なく削りやがって。

念力で復讐してやる。いや、わら人形の方がいいか。

……えーと、馬鹿話はこの辺にして次回予告。

ナイフで刺された勇吾は意識を失い、病院で緊急手術を受ける。

昴、紅葉、紫亜の三人は勇吾の術後、執刀医から結果を告げられる。

「残念だけど、僕に出来ることはもう無いみたいだ」

据え膳食わぬは女の恥（前書き）

今回は前半シリ阿斯後半コメディの構成になっております。

サブタイトルは誤用では無く、単なる仕様です。

では、本編をどうぞ。

据え膳食わぬは女の恥

「遅いな……」

閉塞感の漂う、白い壁に取り囲まれた空間に、酷く憔悴した声が響いた。

声の主は昴だった。

壁にもたれ掛って腕を組み、見るからに血の気が消え失せた顔色をしている。

隣には、申し訳程度の質素な長椅子に腰掛けた少女が二人。

紫亜と紅葉だった。

彼女らも昴同様、かなり疲労を色濃く残した表情で、ただ無言で時を過ごしていた。

彼らが今いるのは、桜通りの近くにある病院だった。

彼らがこの病院に来たのは、あの後——つまりは勇吾がナイフで刺され、意識を失ったすぐ後の事だ。

突然意識を失い、血溜まりの中に崩れ落ちた勇吾を見て、紫亜は普段の彼女からは想像出来ないまでに取り乱し、勇吾の体にすがり着いて泣きじゃくった。

それは紅葉にしても同様で、青ざめた顔で勇吾の名を叫びながら涙を流す姿は、痛々しくてとても見ていられるものではなかった。

そんな中で、唯一まともな思考が出来たのは昴だけだった。彼は直ぐに救急車を呼び出すと、到着までの間に応急処置を施して、その

まま救急車に同乗し——今に至ると言う訳だ。

現在勇吾は緊急処置室で治療の最中であり、昴の向かい側にはそれを証明するかのように、『治療中』と書かれたランプが光を放っている。

「チッ——」

——と、昴が突然舌打ちした。同時に、壁際に棒立ちしていた昴の体が、グラリと傾き、そのまま堪えきれずコンクリートの床に膝を付く。

血を急激に失った勇吾に輸血する為に、先程かなりの量の血を提供した——勇吾と血液型が合うのは、三人の中では昴だけだった——昴の体は、ほぼ限界と言ってよかった。

「昴、大丈夫？」

駆け寄ってくれた紅葉に肩を借りて、何とか立ち上がる。

それだけでも、今の体力ではかなり厳しい。

「ああ。どうにか、な……」

「やっぱり座った方が良いんじゃない？ 昴、もう限界でしょ？」

「いや、座れるスペースは限られてるんだ。紅葉が座っててくれ。」

——俺は大丈夫だから」

そう言つて、昴は再び壁に体重を預けた。

確かに体力的に厳しい状態ではあるが、紅葉の疲労の度合いも無視出来るものではない。

紫亜に至つては、今にも倒れてしまいそうな程に憔悴しており、とても立つたまま待ち続ける事は出来ないだろう。

（今の所、俺が一番マシな状態だからな。体力的には厳しいが、自制出来る分、精神的な限界はまだ先の事だ）

昂はそう胸中で自分に言い聞かせると、再びグラつきそうになる体を気力で支えた。

紅葉も昴の気遣いを理解しているらしく、

「辛かったら代わるから」と彼に言い残して、元の位置に座った。

それから数分後。

昂の目の前の、やけに重々しいドア——実際にはただのドアがだが、今の昂には酷く重厚に見える——がゆっくりと開いた。

そこから現れたのは、手術着の男性——勇吾の執刀をした医者だった。

それに、昴、紫亜、紅葉の三人が同時に反応した。

「勇吾は……どうなったんだ？」

三人を代表して、昂が訊いた。

目上の人間相手だから敬語を使うべきだったかもしれないが、生憎とそんな余裕は現在売り切れ中だ。

医者は溜め息を吐いてから、歯切れ悪く言った。

「……僕に出来る事は、もう無いみたいだ」

「……馬鹿な。まさか勇吾が、あの程度の喧嘩で……？」

呆然と、昂が呟く。

はつきりと言葉にはされなかったが、医者の話し方や雰囲気から連想出来る結果は、一つしかない。

即ち、勇吾が死んだという事――！

（落ちて着け！）

昂は声には出さずに叫んで、自制を促した。

（まだ何も確定していない。死体を見たわけじゃないんだ。この目で事実を確認するまでは、判断するには早すぎる。精神を乱すな、頭を冷やせ……！）

血が足りないせいか短絡的になっていた思考を叩き出して、昴は冷静さを引き戻す。

と――

「……勇吾君が……死んだ？　――嫌……嫌あ！」

紫亜が先程の昴と同じ推測に至ったのか、その場に崩れ落ちて叫び声を上げた。

紅葉は最早声すら出ないのか、――あるいは現実を受け入れられないのか――ただ呆然と虚空を見つめている。

無理もない。彼女たちには瞬間的な自製の習慣など無いのだ。昴のように常に平静を保つ生活もしていない。

「――本当に、どうにもならなかったのか……？」

昴が呟くように言った。

思ったほど大きな声は出なかったが、医者にはちゃんと聞こえただけだった。

彼は何故か朗らかな笑みを浮かべつつ、

「うん。どうにもならなかったね。なにしろナイフは腹筋をちよつと突き抜けただけで止まっただけで、内臓には傷一つなかったし。……

まあ、出血が少し酷かったけど、輸血したら直ぐに安定したから僕がやる事なんて傷口を縫う事だけだったね」

「……………待て」

思わず、昴は聞き返した。話の流れが明らかにおかしい。背後を伺うと、紫亜と紅葉も医者の話から何かに気付いたらしく、目を丸く

してこちらを見ていた。昴は医者に向き直り、口を開く。

「おい、話が妙だぞ。どういふことか詳細に説明を——」

と、その続きを言おうとしたが、医者がそれに気付かず喋り続けているのを見やって、昴は一度口を閉じた。

「しかし、ただ傷口縫うのにも手間取ったよ。腹筋が頑丈過ぎて、縫合用の針が折れるんだもの。まあ、しょうがないから普段まったく使わない、一番ゴツイ針で縫っちゃったけど。……いやまったく彼は一体何者なんだろうね？」

やたらと饒舌に、スラスラと語る医者。

それに対して、昴達三人は言葉を無くして黙りこんでいた。

「どういう事？　どうなってるの？」

紫亜が困惑の中、昴に言ってくる。

紅葉も『なにがなんだか』といった表情で昴に視線を投げている。

(……………まさかとは思うが、この医者……………)

ふと、ある可能性が脳裏を掠めて、昴は呟いた。

こめかみに指を当てつつ、医者に向けて告げる。

「……………確認だ。勇吾——患者は、生きているんだな？」

それに医者は、何を今更とでも言いたげに答えた。

「うん。そうだけど。あれ、言ってなかったっけ？　まあ良いや。

というかさ、僕としては彼がどうやったら死ぬのか知りたいよ気分だよ」

「でもさっき『僕に出来る事はもう無い』とか言ってなかったか？」

「ああ。それは、医者ほくに出来る事はもう無いって事だよ？　傷口縫ったら仕事無くなったから」

どこか気楽に——というか気楽さ全開で——言う医者。

それに、昴は脱力した。

医者の気楽さが少し腹立たしいが、それにも増して脱力感が湧き出

てくる。

(…………アホらしい。騒ぎ損かよ)
息を吐いて、呟く。

——と、突如昴の背後で冷たい空気が発生した。

見ると、紫亜と紅葉がうつ向きながら肩を震わせている。
不吉な予感が頭をよぎり——昴はその場から身を引いた。

紫亜と紅葉が、同時に口を開く。そして何故か、医者を手招きして
呼んでいた。

『ま——』

「ま?」

医者は首を傾げつつ近付いていき、彼女たちが放った一文字を繰り返した。

その直後。

『——紛らわしい言い方するなあああ!!』

「どおおおお!?!」

異口同音の叫びと同時に放たれたビンタが、医者 of 両頬に炸裂して

——医者の悲鳴が病院の狭い廊下に響いた。
響いただけだった。

酷く頭が重い。体もどこか気だるく、自分の体では無い気がした。

それから、腹の辺りが微妙に痛みを訴えている。

そんな事を頭の隅っこで考えながら、勇吾は目を開いた。

うつすらと広がってきた視界に映ったのは、見覚えのない、真っ白な天井……。

「ここは……？」

思わず、疑問符付きの呟きが零れた。

勇吾はとりあえず起き上がろうとして——頭に走った痛みに邪魔されて失敗した。

舌打ちしつつ、再度挑戦するが、やはり痛み邪魔をされた。仕方なく、諦める。

「チッ。どうなってんだ？ 頭は痛いし、体はだるい。おまけに状況はさっぱりだ」

勇吾は頭痛を抑えるため——それでどうにかなると思えないが、気分の問題である——こめかみを指で押さえた。その僅かな動作すら億劫だった。

「とりあえず、可能なだけ思い出すか」

誰にとっても無く呟いて、勇吾は記憶を探った。

自分は確か、紫亜を庇ってナイフで刺された筈だ。それは間違いない。その瞬間の事ははっきりと覚えている。

『桜樹広場』で乱闘騒ぎが起こっているのを見つけて、興味本位で近付いたのだ。

そこで、騒ぎの中心が紫亜と昴である事を知った。

昴なら負けはしないと思ったが、一応援護に向かい、そして——紫亜が狙われている事を悟った。

その瞬間から実際にナイフで刺されるまでの事は、あまり覚えていない。

とにかく必死だった事だけが、記憶の端に引っ掛かっていた。

「んで、腹からドバドバ血が出てきてぶっ倒れて、気が付いたらここに居る、と」

とりあえずそこまでの記憶が一続きになっている。

——と、そこまで思い出して、勇吾は、さっきほど体がだるく無い事に気が付いた。

一旦、記憶のサルベージを中断する。

気付いてみると頭痛も大分マシになっていて、これなら起き上がるくらいは何とかなりそうだ。

「よつと。……どうやら立ち上がるのは無理らしいが、座るくらいの体力は戻ってるらしいな。……しかし妙だな。俺の体がナイフで刺された程度でここまで消耗するとは」

ゆっくりと起き上がり、なにやら不審そうに呟く。

何故か当たり前のように『ナイフで刺された程度』と勇吾は言っているが、普通はかなりの大事である。

しかしこの場にはそこに突っ込める人間が居ないため、スルーされた。

ともあれ、起き上がる事に成功した勇吾は、先ほどの続き——他に思い出せる事が無いかと記憶のサルベージを再開しようとした。

歩くどころか立てもしない今、出来る事は頭を働かせる事だけである。

が、勇吾のサルベージ作業は、突如降ってきた声に、再度中断された。

「アンタ、もう起きたの？」

声の主は、勇吾のすぐ近くに居た。

20代半ば程の、かなりの美人に分類されると思われる女性である。ベリーショート的茶髪がよく似合っていた。

「えーと……あんだ、誰？」

言ってから、勇吾は聞くまでも無い事だったと悟った。

彼女がナース服という名の白衣を着ていたからだ。これはもう、ナース以外の何者でもない。

だが、彼女は勇吾の無意味な問いにも、律儀に答えてくれた。

「アタシは看護婦の——今は看護士って言うんだっけ？ まあどっちでもいいや。とにかくアンタの担当する事になった竹崎弥生。よろしく」

言いながら、にゅっと白くて小さい手を突き出してくる弥生。多分握手を求めているのだと、勇吾は半拍遅れて気が付いた。

「はあ。緒方勇吾だ。よろしく」

いまいちハッキリしない声で、勇吾が答える。それから、突き出された弥生の手を握った。

「それで、何で俺はここに居るんだ？」

勇吾の記憶は、ナイフで刺されて気を失った時点で途切れているようなので、とりあえず尋ねてみた。

それに、弥生は一つ頷いて、

「アンタ、救急車でこの病院に運ばれてきたんだよ。出血がかなり酷い、死に掛けの状態だね。さっきまで手術してて、とりあえずは成功。アンタは生き残った。手術が終われば当然病室に移動になるでしょ？ で、アンタはこの病室に運ばれた。これでわかった？」

「なんとか」

少し早口で語られる状況説明は今のぼやけた思考には少し辛いけど、どうにか理解出来た。

こめかみに再び指を当て、整理するように思考を回す。

「それにしても」

弥生が勇吾をまじまじと見つめながら、ポツリと言った。

「何か用か？」

勇吾は居心地悪そうにしながら、聞き返した。なんだろう、この刺すような視線。

弥生は少し考えるような素振りを見せた。それから、言ってくる。

「うーん。存在自体がおかしい」

「……は？」

思わず、気の抜けたような声が漏れる。それはそうだろう。いきなり存在を全否定されたら、誰だってそうなる。

「いや、だってさ、アンタさっきまで出血死しかけてたんだよ？」

それがたった五分足らずで目を覚まして、その上起き上がってすらいる。いくらなんでも異常だわ、アンタの回復力」

「いや、んなボロクソに言わんでも……」

「大体さー。手術の時の麻酔だってまだ残ってる筈でしょ？ 普通数時間は寝込む筈よ？ これはもう、サイボーグか何かかと思えないわね」

「そこまで言うかつ！？」

思わず突っ込みを入れる勇吾。何というか、怪我人とは思えない程の音量で。

それに、弥生が即座に反応した。

何故か楽しそうに、瞳をいたずらっぽく輝かせて、言ってくる。

「わあっ！ そんな状態で突込みまでするなんて。やっぱり人間じゃないわね！ 怪獣よ怪獣！ 尻尾はどこに忘れてきたの？」

「だあああっ！ 素直に褒める気が無いならもう黙ってる！」

勇吾の叫びが病室に響いた。白い壁や天井に声が反響する。

「——っ、また頭が……」

呻くように言って、勇吾は力無くベッドに横たわった。

どうやら、今ので最後に残っていた体力を使い切ってしまったらし

い。

頭痛も復活したようで、ぐったりとしている。

「あれ？ 怪獣が倒れた。——ていうかアンタ大丈夫？ 顔色悪いよ」

「……………」

「…………ごめん。ちょっと調子に乗りすぎた。アンタ、怪我人だったよね」

弥生が急にしおらしくなった。疲弊しきった様子の勇吾を見て、彼がまだ17歳の少年である事に気付いたらしい。どれだけ強靱な体を持っていても、勇吾が人間であり、また高校生である事に変わりはない。

弥生のその瞳から、心配する色が見て取れる。

（ちっ——んな目で見るなよ、くそ。俺が悪いみたいじゃねえか）
勇吾は舌打ちしつつ、弥生の視線から逃れるように顔を背けると、
「…………気に、するな。多分、血が足りて無いだけだ。死にやしねえよ」

と、素っ気無く言った。

——つまらない男の意地。この行動の意味などそれだけだ。あるいは、子供の背伸びというべきか。

「…………変な奴。あれだけからかわれて、恨み言の一つも言わないなんてさ」

「うるせ。ほつといてくれ」

「優しいんだな、アンタ。それとも、照れてるのかな？」
「知るかつ」

勇吾はこの話は終わりだと言わんばかりに体ごと動いて弥生に背を向けた。

——と、背を向けた勇吾の向こう側で、弥生の瞳がキラリと光った。

何かいたずらを思いついた子供のようなキラメキである。

「んー、よし。食べちゃおう」

「……………は？」

背後で聞こえた不吉な言葉に、勇吾は思わず振り返った。

なんですか、食べちゃおうって。なんだか凄く嫌な予感がするんですけど。

案の定、嫌な予感的中した。

振り返った勇吾の目の前に、弥生の顔があつたのである。

「どわっ！ な、何でアンタがベッドに寝てるんだよ！？」

「え？ いやだってさ、アンタの背中から『かまって欲しいオーラ』が出てるから、お望み通りにしようかな、と」

「出るかそんなモン！ っておい！ やめろ、それはかまってるんじゃないくて、からまつてるんだ！ コラ、服を脱がそうとするな！」

体が思うように動かない今、精一杯の抵抗は怒鳴る事だけである。

しかし、声での制止など通用するはずも無く、

「可愛いねー。抵抗出来ない男の子って」

「ちよっ待て待て待て！ 妙な手付きで体撫で回すのはマジやめてくれ！」

「へえ。やっぱ良い身体してるわね、アンタ」

「無視か！？ 俺の制止は無視なのか！？」

「当然。アンタこれだけ良い身体してるんだから。目の前にこんなおいしそうな男の子が居たら、こりゃもう食べるしかないじゃない」

「何その意味不明なトンデモ論理！？」

「据え膳食わぬは男の恥って言うじゃない」

「アンタ女だろ！？」

「男でも女でも出されたお膳は残さず頂くものよ」

「屁理屈抜かすなっ！ ——って聞けよお前！？」

そうこうしている内に、勇吾は着ていた服のボタンを全部外されて

いた。

普段の勇吾なら容易く抵抗出来るだろうが、今のヘナヘナ状態ではかなり無理っぽい。

——ああ、この世に神は居ないのだろうか。多分居ないのだろう。仮に居たとしたらきつとその神様はバイトで悪魔も兼用していて、今は悪魔の勤務時間中なのだ。

（神様、今すぐそのバイト辞めてください。きつとマ。ドナルドでレジでも打ってた方が給料良い筈ですから！）

なんて現実逃避してみるが、当然事態が好転する訳では無かった。むしろ、時間の経過と共に坂道を転がるかの如く状況は悪化していく。

今度はボタンが外れていた服を完全に脱がされた。これで勇吾は上半身裸である。

（……神様。悪魔のバイトって、そんなに儲かるんですか？）
天におられる——かどうかは定かでは無いが——神に問う。切に問う。

万事休すである。身体は動かないし、弥生は制止を聞いてくれない。神様からの応答も無い。

ダメ。無理。不可能。どうしようもない。無い無い尽くしでさらば貞操。

——と、思われたその時。

ガラガラ、という病室のドアが開かれたと思しき音が、勇吾の耳に届いた。

勇吾の叫び声を聞いて、医者か誰かが駆けつけて来たのかもしれない。

い。

（おお！ 神は我を見捨てなかった！ この状態を見られるのは恥ずいが、このまま『食べられる』よりはマシだっ！）

勇吾は必死に首を動かして、救いの神となる筈の闖入者をに視線を向ける。

が、それより先に、音声が届いた。

「勇吾君？ な、何をしてるの！？」

「勇吾！？ アンタ裸で何を……！？？」

（……神様。さっきは悪魔がバイトだなんて言ってますいません。きつと、バイトなのは神様の方で、悪魔が本職なんでしょう？ でなきや、ここまで段取り良く不幸になりませんから……）

勇吾は胸中で神様を罵りながら、色々な事を諦めた。

——闖入者の正体は、目を三角にした紅葉と紫亜。そしてやれやれ、と肩を竦めた昴だった。

据え膳食わぬは女の恥（後書き）

こんな感じで28話目をお送りしました。
へっぽこ物書きの龍之介です。

当初のプロットから大きく脱線していたのですが、ぼちぼち本線に戻れそうです。

あと、このお話には地味に新キャラが出てきてました。

そう、竹崎弥生嬢です。

本当は名も無いただの看護婦さんだったのですが、名前を付けて少し喋らせていたらいつの間にか本作品最大の暴走をやらかしてくれました（笑）

彼女は次のお話にもちょこっと出てきますが、基本的には単発キャラなので直ぐに消えちゃうと思います。

さて、では今回はこの辺で失礼します。
また次話の後書きで会いましょう！

ついに告白！ 姫神姉妹！

勇吾は焦っていた。

こんなに焦ったのは今までの人生でも覚えが無く、多分これからも無いのではなからうか。

そのくらい、勇吾は焦っていた。その焦りの元凶は、概ね二つ——
——というか二人。

言うまでも無く、紫亜と紅葉だった。

勇吾から見て右側に居る紅葉は、夜叉か羅刹を思わせるとても怖い顔で此方を睨み据えていた。

子供が見たら直ぐ様泣き出し、その上悪夢としてトラウマを植え付けそうな顔だった。

そしてその隣に居る紫亜に至っては、今にも泣き出しそうに眉を八の字にして、瞳には涙が溜っている。

これはこれで勇吾の心にダメージを与えていた。なんというか、罪悪感が良心にチクチクとくるのである。

勇吾そんな二人に、ほぼ絶望的な心持ちで視線を向けた。

それから、約0.1秒後に恐怖と罪悪感に負けて、目を游がせた。

こめかみを冷たい雫が撫でたのを感じたが、これは冷や汗か。それともこの緊張感に対する脂汗なのか——。

いずれにしても勇吾の内心は現在混乱のサンバを踊っており、それに困惑のファンファーレが拍車を掛けてしまつて収集が着かなくなっていた。

勇吾は何か言おうとして言葉を探し始めたが、現在の自分の状態を見て、直ぐに無駄だと悟った。

上半身裸で、ベッドの上で女性と、なんというかとってもやらしい格好で絡まってるのだから、言い訳のしようがないのである。

——と、凄絶な形相だった紅葉が、突然破顔し、笑みを浮かべた。ただし、目は一切笑っていないし、頬の辺りが引きつりまくった笑みである。

勇吾は少し前に、紅葉が似たような笑みを浮かべているのを見た気がした。

（ぎゃー！ 何かめっちゃ怒ってらっしゃる！？ さっきみたいに睨まれるのも恐いけど、こっちの笑顔の恐怖は半端じゃねえっ！）
内心で戦慄しつつ、勇吾は紫亜に視線を移した。涙がいつぱいの瞳。

それに、勇吾は、

「えーと、これはですね、何と申しますかアレな感じですけどとにかく落ち着こう紅葉！」

と自分にも何を言っているのかよく分からないまま、叫んだ。

が、紅葉は勇吾の叫びを聞いていないようで、拳を握り締めて言うてくる。

「人が死ぬほど心配してる時に……当の本人は元氣一杯看護婦といちゃいちゃ？ —— 判決を言い渡すわ。極刑。断固極刑」

「じよ、上告するっ！」

「却下します。それでは、刑を執行。紫亜、殺るわよ」

「了解だよ。姉さん」

言いながら、ゆっくりと近付いてくる二人。

「あれ？ 紫亜さんに紅葉さん？ 何で拳を握り締めてこちらへ来られるのでしょうか？ ってその腐れ看護婦！ 『私知ーらない』みたいなノリで逃げるなっ！」

口笛など吹きつつさりげなく逃亡を図っていた弥生に、勇吾が叫ん

だ。

この状況を打開するには、彼女に先程の経緯を説明させる以外に無い。

が、弥生は自らの肩を自分で抱きながら、

「ああ、私、元気の有り余った若い患者に汚されちゃった……」
等と言ってその場に座り込んだ。

目の端に涙が浮かんでいるあたり、芸が細かい。

「っておいッ！ 俺がいつお前に何かやらかした！？ 第一俺は今指一本も動かねえんだぞ！？」

「言葉巧みに誘導されたのよ！」

「お・の・れ・は！」

勇吾はうめいたが、弥生はそ知らぬ顔で、やはり口笛を吹きつつその場を離れた。

元はと言えば彼女が事の発端なのだが、紅葉と紫亜の怒りの矛先は勇吾にのみ向けられている。

勇吾は何か不条理なものを感じたが、そんな事を考える余裕は無さそうである。

「ゆ・う・ご？」

「はiiiiiii！」

不吉に言ってくる紅葉に、引きつった声で、答える。

「覚悟はいい？」

「何の！？ 何の覚悟！？」

「……しこたま殴られる覚悟じゃないか？ 具体的には100発くらい」

今まで黙って傍観していた昴が、諦める、とでも言いたげなニュアンスで呟いた。

それに、勇吾が悲鳴を上げる。

「って100発!? 体がちつとも動かない、このノーガードの状態でか!? 言っときますけど勇吾さんは現在ケチヨンケチヨンなのですよ!？」

「まあ、諦める。骨は拾ってやるから」

昂は肩を竦めながらそう言つと、乾いた笑みを浮かべた。

丁度その時、紫亜と紅葉が勇吾の隣まで移動してきた。

勇吾は無駄だと悟りつつ、制止の言葉を投げかけてみる。

「えーと、何ていうかちよつと待って貰えろと嬉しいんだが……」
二人は勇吾の言葉をやはり無視して、同時に拳を振り上げると、これまた同時に口を開く。

「勇吾の……」「勇吾君の……」

『バカーーッ!』

「ちよつ、だからその本気の拳はやばいって! ——ってやっぱ聞いてなああああ!？」

……それからしばらくの間、何かがひたすら殴られているような音と、勇吾少年の悲鳴が病院中——本日二度目である——に響き渡った。

合掌。

* * * * *

それから数分後。

勇吾の病室に、頭を下げた紫亜と紅葉の姿があった。

『ごめんなさい』

異口同音にそう言つて、すっかり叩き潰されてしまった——やったのは彼女たちだが——勇吾を介抱し始める。

……ひたすら勇吾をポコポコ叩きまわしていると、流石に気の毒に思つたのか、弥生が彼女らを止めて事情を話したのだ。

最初は聞く耳を持たなかった彼女らも、よく考えたらナイフで刺された上に麻酔の効果も残っている勇吾が、まともに行動を起こせる訳が無い、と思い至つたらしく、総攻撃を中止した。

「あの……ホントにごめんなさい」

死に絶えた軟体動物のようにベッドで横たわる勇吾を抱き起こしながら、紫亜が言った。

反対側からは紅葉が同様に勇吾を抱きかかえている。

「いや、誤解が解けたんなら、もう良いよ」

二人の助けを借りて何とか起き上がった勇吾は、思い通りにならな
い体に舌打ちしつつ、言った。

言外に『気にするな』という意思が乗せられている。

「でも……勇吾君は私のせいで怪我しちゃったのに……」

「それは違うな」

「え？」

躊躇う紫亜に笑いかけて、勇吾は告げた。

「俺の怪我は紫亜のせいじゃない。俺自身の失態だ。あのタイミン
グなら、カウンターで相手を沈めて、無傷のまま事を終わらせるこ

ともできたはずだからな。自制を忘れて体を楯にした俺が間抜けだったのさ」

「でも、それにしたって、原因は私で……」

「だから、違う。あの場合悪いのは、ただの喧嘩に刃物持ち出したあの男と、無様に刺された俺。それから……そこでつつ立つてる昂ばかの三人だ」

言いながら、勇吾は昂を指差した。それに、昂は小さく笑って、

「ああ、間の抜けた事に、余裕かました拳句に出し抜かれたからな。あれは確かに失態だった。あの手の事態は、本来の俺が対処すべきものだったからな」

以心伝心と言うべきか、昂は勇吾の指摘の意味に瞬時に気がついたようだった。

それに合わせて、勇吾は話を纏めに掛かった。

「そういうわけだ。紫亜が気にする事なんざ一つも無えよ」

そう言われた紫亜は、またも泣き出しそうになりながら、小さく、

「ありがとう」

と言った。

「勇吾。ほら、お前の上着だ。といつても、穴開いてる上に血まみれだけど」

上手く話が纏まったのを見計らって、昂が手に持っていた荷物を放り投げた。

「俺の？ ……ああ」

勇吾は訝しげに眉を顰めたが、直ぐに得心がいったように唸った。手術の際に邪魔なので、勇吾が着ていたシャツや上着は取り去られていたのだ。

今勇吾が着ているのは病院の服だったが、そのことに、勇吾は今になってようやく気が付いた。

投げられた自分の上着を受け取って、勇吾はふとある事を思い出し

た。

（そついやアレ、上着のポケットに入れてたんだっけ）

ごそごそと上着のポケットを漁って、目的の物を探す。

「何してるの？」

紅葉が聞いてくる。

「いや、ちよつと探し物を……お、あった」

勇吾が上着のポケットから、小さな紙製の袋を取り出した。
幸い、血で汚れたりはしていない。

勇吾は紫亜に向き直ると、気軽に差し出した。

「ほい、紫亜。プレゼントフォーユー」

「え？」

戸惑いながら、紫亜がそれを受け取る。と同時に、聞いてきた。

「これは？」

「開ければ分かる」

返ってきた答えに、紫亜はますます戸惑った様子を見せつつも、袋を開ける。

「あ……それ、『クレイジーコール』で見てたペンダントだ」

紅葉が思わず、といった感じで声を上げた。

それに重なるように、紫亜が呟く。

「これ……私に？」

「ああ。桜通りで見つけて、紫亜に似合いそうだと思ったから」

「……勇吾、あの時の『買い忘れ』ってこれの事？」

紅葉が何故かジト目で言ってきた。

勇吾は何でこんな目で見られるんだろうと思いつつ、とりあえず頷いておいた。

それから、紫亜へと視線を移して——勇吾は目を見開いた。

「って紫亜！？ な、何で泣いてるんだ？」

勇吾の視線の先では、紫亜がポロポロと、嬉しさを堪えきれなかったかのように涙を零していた。

「だって……」

袋から取り出した物——ハートのペンダント——を手に取って、ポツリと言う紫亜。

それに、勇吾はただひたすら狼狽する。

「す、すまん。何か知らんが俺が悪かった」

「うっん、違うの、勇吾君。これは……嬉し涙だから……」

「そ、そうか。いやでも、泣くほど嬉しいのか？」

勇吾が首を傾げて言った。どうも本気で分かってないらしい。

それに、紫亜は声を少し荒げて、

「嬉しいよ！　だって……大好きな人に貰ったプレゼントだもん！　嬉しいに決まってるよ！」

と言った。

静寂が、病室を横切った。これは、何と言うか……告白、なのだろうか——？

「やれやれ、ここでチェックをかけるか。こいつはまた、ストレートな攻め手だな」

数秒後、静寂を切り裂いたのは、昴の声だった。

その声を聞きながら、勇吾はぼんやりと思考する。

（えーと、ちょっと待ってみようか。紫亜は今何と言った？　『大好きな人に貰ったプレゼント』だって？　紫亜にペンダントを渡したのは俺で、それは紫亜から見れば俺からペンダントを貰った事になる訳で、ペンダントはプレゼントなんだから……）

こめかみに、汗が一筋流れた。

(……紫亜の『大好きな人』って、もしかして——俺?)
こめかみの汗を指先で拭う。

(……………マジで? 紫亜が俺を? ちょい待ち、ウエイトウ
エイト。冷静に行こう。冷静に!)

——と、困惑する勇吾に、紫亜が追い討ちを掛けた。

彼女は持っていた鞆から一通の手紙を取り出し、勇吾に渡してきた。
「もう隠したくないから、言うよ。私は勇吾君が好き。その気持ちは、全部この手紙に書いてあるの。体が治ってからで良い。読んで、勇吾君の気持ちも聞かせて」

(……………マジですか?)

口を中途半端に開けっ放しにして、勇吾は胸中で呟く。

だが、勇吾への追い討ちはそれだけでは終わらなかった。

「待ちなさい!」

勇吾を挟んで紫亜の反対側にいた紅葉が、急に声を上げた。

今度は何だっ!? と勇吾がそちらに視線を送ると、紅葉がさつきよりもやや大きい声で言ってきた。

「紫亜ばかりずるいつ! 私だって勇吾の事好きなんだからっ!」

「ちょっ、え、はいい?」

訳が分からず、ただただ慌てふためく勇吾。

ちょっと待ってくれ。紅葉までそんないきなり……。

そう言おうとするのだが、口が上手く動いてくれない。

その間に、何故か紫亜と紅葉が言い争いを始めていた。

「ずるいのは姉さんでしょ！？ 今日勇吾君と出かける事、私に黙ってたじゃない！」

「うつ……こ、恋にずるいも何もないのっ！」

「さっきと言ってる事が違う！」

「うつ……でも紫亜だって、勇吾と一緒に寝たりしたじゃない！」

「そ、それは……寝ぼけてたんだからしょうがないでしょ！？」

どんどん核心から離れていく話題。それに比例して声が大きくなるので、もう何がなんだか分からない。

「病院で騒ぐな。第一もう口論の意味無くなってぞ」

昴がため息混じりに割って入った。

「むー」

「うー」

二人はそれぞれ納得いかなげに唸っていたが、やがて大人しくなった。

そこに、昴がたたみ掛ける。

「ほら、今日はもう帰りな。勇吾だって今すぐ答えなんて出せっこないし、考える時間が必要だろ？」

「……わかった」

「……そうする」

昴に言われて、二人が小さく頷いた。ただし、唇はへの字に結ばれていたもので、不承不承なのだろうが。

ともあれ、紫亜と紅葉の二人は微妙な空気を置き去りにして、病室

を後にした。

残された勇吾と昴は、ほぼ同時に深いため息を吐いた。

それから、混乱の全く改善されていない勇吾に、昴が呼びかけた。

「勇吾」

「……何だ？」

酷く疲れた声で聞き返してくる勇吾に、少し意地悪く言ってみる。

「今どんな気分だ？」

その問いに、勇吾は数秒の間を取った後、ポツリと、

「……精神的にもケチヨンケチヨン………」

そう、呟いたのだった。

ついに告白！ 姫神姉妹！（後書き）

どうも、自転車でコケて川にドッポンしたアホ作者、龍之介です。
ううむ、この季節の川は冷たい。

まあ、それはさておき、本作品もようやくクライマックスです。
しかし、告白シーンまでコメディ色が濃厚になったのはちょい失敗
かも。読者様の反応が怖い今日この頃。

次回は恐らくシリアスが濃厚になると思われます。
では、また次回のあとがきでっ！

葛藤と咆哮、そして選択（前書き）

紫亜と紅葉に告白されて、どう答えるべきか迷う勇吾。

『どちらも大切だから、傷付けたくない』

勇吾の抱くその思いは、酷く優しい、けれど自分も他人も傷付けるナイフ。

その刃は、いったい誰に向けられる？

ラストは目前。

シリアスとバトル風味な第30話、開幕。

葛藤と咆哮、そして選択

衝撃のツープラトン告白から丸一日経った今日、勇吾は一人頭を抱えていた。

「ほんとにケチヨンケチヨンだな……俺」
死人のように——死人は喋らないが、気分的にそんな感じだ——呻いて、深いため息を一つ。

勇吾は今、自宅の二階、つまりは自室に居る。

本来なら数日間の入院生活を強いられる筈なのだが、勇吾の場合、回復力の高さから入院は必要無いと判断されたとらしく、彼は一晩病院で過ごした後に自宅へと帰ったのである。

勇吾は机に向かって座椅子に座り、右手にはピンク色の手紙らしき物、左手には携帯電話を持ってひたすら頭を悩ませている。

勇吾は右手の手紙に目を向けた。

昨日突然の告白と同時に渡された手紙。幾度となく目を通した。

次いで、左手の携帯電話を見やる。

こちらは先程紅葉から送られてきたメールが表示されていて、内容は昨日の告白の続きのようなものだった。

双子だが、性格も容姿も違う少女達からの熱烈なラブコールだ。内容も当然違うものだったし、思いを伝える手段^{ツール}も違う。

ただ、その二つには共通するものがあつた。
それは、思いの強さ。

「つまり、二人とも冗談でも何でもなく、大真面目だって事なんだよな」

なんとなく口に出してみても、現実には横たわる事実を再確認。勇吾は更に頭を抱えた。

勇吾は最初、これは何かの冗談だと……例えば昴の仕組んだ悪戯か何かではないかと疑っていた。

まあそれは、ほとんど現実逃避に近いものではあったが。

だが、このように超本気っぽいアプローチをされたら、もう現実を受け入れるしかない。

「洒落にならん……マジで」

本気の想いには、本気でもって応じる。それが彼女らに対する礼儀だというのは、勇吾も分かっていた。彼女らが自分を好きだと言ってくれること自体は、素直に嬉しい事であるのだし。

だからこそ、中途半端に應える訳にはいかないのも、重々承知だ。

だが――

「――問題なのは俺自身、混乱しちゃって何が本気の気持ちなんだか分からねえって事だ」

分からないから、応えられない。

実は答えらしきものが、既に勇吾の胸の内にある。ただ、それが本当に自分の本気なのかどうか、勇吾自身が確信出来ないうたのだ。

紫亜と紅葉――どちらを選ぶのが正しいのか。

（本当は、正しいとか間違ってるとか、そんなことは関係ないのかもしれないけどな……）

ふと、窓から空を見上げる。見事な程に曇っていた。雨が降るような気配はないが、気分の良い天気でもない。

まさに今の自分自身を写すような空模様。泣きたいほど苦しいわけではないが、じわじわと心の中が暗雲に侵食されていくような感覚がある。

勇吾はもはや数えるのも面倒なくらい繰り返したため息を一つ吐き、ぼんやりと思考を流す。

勇吾は二人の笑顔が好きだった。というよりは、彼女たちの事が『好きだ』と認識するきっかけになったのが、それぞれの魅力を持った笑顔だったのだ。

紅葉の太陽のような笑顔は、暖かさがある。一緒にいると楽しいし、自然と勇吾自身も笑っていられる。周りの人間に元気を与えるような、不思議な力を感じるのだ。

紫亜の微笑には、優しさほほえみと儂さが同居している。見ていると安心できるのに、些細な事で壊れてしまいそうで、『守りたい』と思わせるような、そんな微笑。

どちらも傷付けたくない。そう思う。だが、選ばなければならぬ。どちらかを選べば、選ばれなかったほうは傷つくと分かっている。

だから、『好き』とは違う『正しい』が欲しいのだ。

自分の気持ちを肯定できる『何か』が――

「……くそつ。考えがまとまらねえ」

勇吾は忌々しそうに吐き捨てた。結局、何度考えても無意味な事しか浮かんでこない。

他でもない自分の事なのにまともな答えを出せないという事実が、勇吾を苛立たせていく。

苛立ちが募る度に思考は漠然としていき、その事が余計に勇吾を苛立たせ、更に思考はばやけていく——完全に悪循環に囚われていた。

「……頭、冷やすか」

悪循環を断ち切るため、少し気分を切り替ようと、勇吾は自宅を出た。

「少し愛車^{バイク}で走るか。今の時間帯なら、公園あたりが静かで良いかもしれないな」

小さく呟いて、勇吾はそろそろ半年の付き合いになる愛車を走らせた。

勇吾が向かったのは、始まりの場所だった。

つまり、勇吾が紫亜と紅葉に遭遇した、ゲームセンターの裏の公園である。

スタンドでバイクを固定した勇吾は、静かに公園内へと足を踏み入れた。ポツリと、呟く。

「静か、だな。気分転換にも、考え事をするにも丁度良い」

夜のこの公園はほとんど人が来ないのが常だった。ただ、住宅街からは離れているため、少々騒いでも誰にも気づかれないという隠密性から、暴走族や不良少年の溜まり場になる事がたまにあつたりするが。

「ベンチにでも座るか。確か、端っこにいくつかあつた筈だ」

静寂の中に声を滑らせて、勇吾は歩き出した。

公園は、酷く薄暗かった。今日は空が曇っているから月が出ておら

ず、足元を照らしてくれるのは、街灯の青白い、頼りない光だけ。

人工的な光の中をぼんやりしながら歩き、目当てのベンチにたどり着く。

勇吾は適当に腰を下ろして、ポケットを探った。

煙草を取り出して、ライターで火を着ける。

ゆっくりと肺に紫煙を満たし、吐き出す。それだけで、少し苛立ちが減ったような気さえた。

（一服したら、また考えよう。俺の選ぶべき道を）
そう胸中で呟いて、勇吾は黙り込んだ。

——と、しばらく煙で空気を濁らせる作業に没頭していると、遠くでバイクの物と思しき複数の爆音が、勇吾の鼓膜を叩いた。

「……これは……改造した原チャリの音、だよな？ ……だとすると、『サイクロプス隻眼鬼』の連中だな。ここらを走ってる暴走族だったら、あいつくらいだし——ん？ 音が近づいて来たな。目的地は、もしかして公園か？」

勇吾は静寂を台無しにした無粋な輩に顔を顰めた。

『サイクロプス隻眼鬼』は、この周辺の警察から、要注意の危険な集団として目を付けられている暴走族だ。

もつとも、『要注意』なのはバイクで危険な走りをする、という意味ではなく、カツアゲやオヤジ狩り、公共物の破壊などの無法な振る舞いの事を指しているのだが。

学校のクラスメイトにも、この輩の被害を受けた者がいると、勇吾は聞いた覚えがあった。

「……やれやれ、ゆっくり考え事も出来はしない、か」
勇吾が億劫な声色でそう言った瞬間、公園の入り口から、次々と改

造原チャリに乗った若者達が雪崩れ込んできた。

「っしやあ！ 俺の勝ちだ！ これで今月のリーダーは俺だからな！」

若者達の先頭を走っていた男が、ガッツポーズをしながら叫んだ。どうやら仲間内でレースでもしていたらしい。

「またお前かよ！」

「つーか、このレースでリーダー決めるのって、何か適当過ぎねえ？」

後からゴールした連中から、次々に野次が飛ぶ。

が、本気で言っているというよりは、単にテンションが上がっているだけのようだったが。

（うつせえなあ。こりや、場所変えた方が良さそうだ）

彼らの様子を興味なさげに眺めていた勇吾は、騒がしくなった公園に嫌気が差してきて、移動することにした。

——と、勇吾がベンチから腰を上げた時、暴走族——『隻眼鬼』の集団の中から、突然声が上がった。

「ああ！ 手前は！」

「——あ？」

いきなりの大声に、勇吾は思わず声のした方に顔を向けた。

視界に、やたらと軽薄そうな男の姿が映る。その男は、こちらを指差しながら怒鳴っているようだった。

「やっぱりそうだ！ 手前はこの前、折角目を着けた女、ナンパすんのを邪魔した野郎だな！」

「この前……？」

勇吾は頭を掻いて、軽く心当たりを思考した。

どうも、自分は彼のナンパを邪魔したらしい。

だが、紫亜や紅葉と交流するようになってから、ナンパ男は結構な数をしばき倒している。

その中から、たった一人の人物を割り出すのは難しい。

——だが、勇吾はふとある出来事を思い出した。

（そういや、紫亜達とここで初めて遭遇したときも、三人くらいナ
ンパクンを始末したんだっけ。もしかして、あの時の奴か？ だと
すると——）

思考が彼の正体を思い出した。勇吾はポンと手を打ち、告げる。

「——ああ、そーいやあの時居たな、お前。確か……マツシュ、オ
ルテガ、ガイアが居たんだよな。で、お前はガイアだっけ？」

「誰が黒い三連星だっ！？」

「いや、何かやられキャラが三人居たからそれでいーかなー、と」

「良い訳あるかっ！？」

「気にするなよ。別に踏み台にしたわけじゃねえし」

「うがああああああ！」

地団駄を踏んで憤激するガイア。

それに、彼の後ろに居る連中が声を上げた。勇吾を指差して、言う。
「何遊んでんだ、ヒロト。こいつがどうかしたのか？」

それに、ガイア——本名はヒロトというらしい——が、荒い口調で
答える。

「ああ、こいつは前に、オレのナンパ邪魔をしゃがった奴だ」

「へえ、だったら、皆でこいつボコにしようぜ」

「はっ！ そりゃいい。おい、お前ら。こいつを囲めっ！」

ヒロトがそう告げると、一斉にその場にいた連中が勇吾を取り囲み
始めた。

改めて眺めてみると、数は30人ほどで、中にはバットや木刀で武
装している者もいるようだった。

勇吾はゾロゾロと動き始めた連中に冷めた視線を送ると、一応、確
認した。

「あー、つまりお前ら、俺に喧嘩売ってるんだな？」

が、返って来たのは沈黙だった。ただし、その沈黙は何よりも雄弁

な肯定でもある。

それに、勇吾は口角を少し吊り上げ、笑った。いつそ邪悪とでも形容すべき危険な笑みだ。

（どうせイライラしてたんだ。折角ストレス解消の相手が向こうから来てくれたんだし、久しぶりに本気で暴れるか。怪我の影響で本来の半分程度しか力を出せないから、本気で闘っても死にはしないだろ）

物騒な思考を流して、勇吾は自ら開戦の雄叫びを上げる。

「良いぜ。今なら高価買取中だ。——来いよ。全員まとめて冥府へ叩き込んでやる！」

空腹の肉食獣の如き咆哮と共に、勇吾は敵の密集する中へと疾駆した。

それから十数分後。

人通りの無い公園内に、怒声と悲鳴が入り混じっていた。

地面には、25、6人の若者が転がっており、皆一様に苦しげな呻き声を上げている。

無論、これを行ったのは勇吾である。

「こ、こいつバケモンだ！ もう殆んどやられちゃった——こ、こちに来る！？ よせ、来るなっ！ う、わああああ！？」

また一人、勇吾の拳によって地面に崩れ落ちていく。

勇吾はそれをつまらなさそうに一瞥すると、声を張り上げた。

「どうした、クソ虫どもッ！　もつとだ、もつと死力を尽くして見せやがれ！　」

「でねえと——」
言葉を切り、視線を周囲に飛ばす。その姿は、悪鬼そのものだ。

「——でねえと、つまんねえだろうがああああッ！！！！！」

「畜生ッ！　何だよこの化け物は！？」

圧倒的な戦闘力と威圧感。撒き散らされる殺気。それに気圧され、もう数名しか残っていない『隻眼鬼』のメンバー達が顔を強張らせ、少しずつ後退していく。

「く、くそおおおおっ！」

勇吾の放つ威圧感からくる緊張に耐え切れなくなった男達が、自棄になったように勇吾へと殺到した。

「そうだ、そういうのが良いぜ。死ぬ気で来いボケどもッ！」

勇吾は複数の同時攻撃にもまったく動じずに、むしろ前に進んでこれを撃退する算段を組み上げていった。

最も早く勇吾へと到達した男が、走ってきた勢いそのままに拳を突き出してきた。

威力は高そうだったが、劣悪な体勢から放たれたその拳は避けるまでもなく狙いを外していた。

勇吾はそれを見做してやり過ごし、カウンターの蹴りを放つ。

つま先が鳩尾に突き刺さり、男が悲鳴と唾液を口から垂れ流す。

と、同時に勇吾はその場から飛び退いた。体の真横……しかも両側から、木刀を持った二人の男が挟み撃ちで攻撃してくるのが、目の端に映ったのだ。

突然勇吾が飛び退いた為、男達の木刀が空を斬る。

勇吾は片方の男から木刀をもぎ取って殴り倒し、更にもう一人も同

様に木刀で一撃した。

そして、またも突然振り返ると、手に持っていた木刀を、背後から近づいてきた男に投げつける。

その投擲をまともに額へと食らった男はあっさりと昏倒し、投げられた木刀と共に、地に落ちた。

勇吾はそれだけの戦闘を行ったにも関わらず、ただ小さく鼻を鳴らして吐き捨てる。

「……くだらねえ。こんなもんかよ」

最早動く者の居なくなった空間にただ一人、勇吾は悠然と立つ。

30対1の、数字の上では喧嘩にもならない筈の戦闘が、勇吾の完全勝利という形で終わりを告げた。

「……終わりか。何か、虚しいだけで、全然スッキリしねえな」

勇吾は元の口調で呟いた。それと同時に、空虚なため息が漏れる。

（まるで、『あの時』みたいだ）

——と、勇吾の背後から、ゆっくりと近付いて来る者が一人。

「よう、少しは落ち着いたか？」

「昴……？」

勇吾が振り返ると、そこにはいつもと変わらず陽気な笑みを湛えた昴が立っていた。

「お前、何でここに？」

「お前と話をしようと思って家に行ったら居なかったんだ。お前の行きそうな所を探していたら、アホみたいに暴れてるお前を見つけたって訳だ」

昴はそう説明すると、ベンチで話さないか、と言ってきた。

勇吾は頷いて、二人してベンチに腰掛けた。

「で、何を話すんだ？」

ベンチに座ったものの、何も言ってこない昴に、勇吾から話題を振る。

「何をつて、あいつらの事に決まってるだろ。紫亜と紅葉の、さ」
なんとなく、そうなるだろうと予想していた勇吾は、さして気にせず聞き返した。

「どっちを選ぶのか、聞きに来た、って事か？」

昴は首を横に振った。

「いや、そうじゃない。俺もそこまでは聞かないさ。これはお前達の問題だからな。ただ、お前が決断出来たかどうかだけ、聞いておこうと思つてな」

「……そうか。残念だが、まだ決めあぐねてる。自分の気持ちが、自分で分からなくてな」

自嘲気味に勇吾が言う。

『分からない』

それが、今の勇吾の解答だった。

昴は、それをどう受け取ったのか。少しの沈黙を挟んでから、告げてくる。

「それは、本当に分からないのか？」

「どつという意味だ？」

思わず険悪な口調で聞き返して、勇吾は昴を睨んだ。

昴は勇吾の眼光にもまったく怯んだ様子を見せず、ただ涼しげな空気を纏って見返してくる。

そして、確かな声で、問いを放つ。

「お前、本当はもう——どちらが好きなのか、答えが出てるんじゃないか？」

「……………」

「お前は自分の気持ちが分からないんじゃない。そんな物はとっくに理解している筈だ。お前はただ、逃げてるだけだ」

「……………」

勇吾は何も言わなかった。言えなかった。

当たり前だ——それが、凶星だったのだから。

昴は言葉を止めずに、淡々と続ける。その表情から、普段の陽気さが消えていた。

「誰かを選ぶって事は、他の誰かを選ばないって事だ。当たり前だな。そして、恋愛において選ばなかった者は、想いの全てが碎けて、その破片で傷だらけになる」

「……………黙れ」

「断る。知つての通りだ、勇吾。俺に脅しは通じない」

「てめえ……………」

掠れ声で、呻くようにいう。妙に喉が渴いて、上手く言葉が出てこない。

それでも、昴は止まらない。

「お前はそれを恐れている。紫亜か紅葉か、どちらかを選ぶことで自分の大事な者が傷付くのを——いや、自分が傷つける事を恐がつてる。だから自分じゃ気持ち分からないと言って問題を先送りにする。その結果、より大きな傷を、その大事な者に負わせてしまう」と分かっていながら、な」

「もういい……………黙れ」

勇吾は我慢の限界を感じて、呟いた。声は擦れたままだ。

「いいや、良くない。お前はいつからそんな腰抜けになった？　そ

なんじゃ、あいつらだつて幻滅す——」

「うるせえ！ わかつてんだよんな事！ お前の言ってる事は全部当たってる。ああ、全部纏めて大当たりだ！ 俺はその全てを自覚してる。分かってるんだよ何もかも！」

勇吾は堪らず立ち上がり、声を荒げた。だが、昴は淡々と切り返してくる。

「判っていて、それで？ そこからどうするんだ、お前は？」

「この——」

この野郎、と怒鳴りかけて、勇吾は不意に口を閉ざした。

——さつきから、昴の様子がおかしい。目が、いつもの彼とは違う。

——淡白すぎるのだ。

（わざと、感情を消している……？ いや、仮面^{えみ}を外してるのか、これは。まさか、こいつ——）

気づいて、勇吾は今度こそ激昂した。

（——この馬鹿、またこれかつ！）

「てめえ、昴ッ！」

勇吾は昴に向けて怒声を上げると、そのまま、まくし立てるように続けた。

「悪役ぶって挑発して、俺の逃げ腰を矯正しようってか！？ いつまでもふざけてつと張り倒すぞ——！」

勇吾は感情のままに怒鳴った。この男は昔からずっとこうだ。

自分が弱気になった時、逃げそうになった時、倒れそうになった時、——そんな時には必ず近くにおいて、自分を導く。

逃げ道を探していた今の自分を、正道に引きずり戻す——その為に、この男はつまらない芝居でこちらの傷を抉った。それで勇吾が立ち直ると、確信して。

しばらく、沈黙がふたりを包んだ。お互いに目をそらさないまま、数秒が過ぎて――

そして、昴は何かバツの悪そうな顔で頬を掻き、ボソツと、
「バレたか」

と呟いた。

勇吾はその昴の態度に、大きくため息を吐いた。

「てめえな……」

「いや、まあ上手く俺の言いたい事は伝わったし、こんなもんじゃないか？」

「ええい、この天然ペテン師は……ああもう、怒る気も失せた」

「そりゃ結構で。これで張り倒されずに済む」

昴は元の陽気な調子で言うと、ベンチから腰を浮かせた。

「……で、覚悟は？」

陽気なままで、ただし真剣な声色で、聞いてくる。

それに、勇吾も真剣に頷いた。

「ああ。腹に収まった。何をどうするかは、今なんとなく決めた」

「へえ。どうするんだ？」

昴が聞き返す。

「大した事じゃない。ただ、魂の命ずるままに行動するだけだ。そもそも、馬鹿みたいに考え込んだからややこしくなったんだ。だから、いちいち迷わずに、選ぶことにする。——紫亜と紅葉、恋人と

して隣に居て欲しいのは、どちらなのかを」

勇吾の言葉に、昴はにやりと笑みを浮かべた。

まるで、予定通り、とでも言うかのように。

そして最後に、彼らしい底抜けに陽気な声で、告げた。

「上等。それでこそだ、お前は。なあ、馬鹿野郎？」
あいはつ

葛藤と咆哮、そして選択（後書き）

読者数が10000人突破！

どうも、へっぽこ物書き龍之介です。

今回は勇吾と昴がメインのお話です。

ラスト直前だというのにヒロイン不在のバトル風味。

このお話、どうだったでしょうか？

評価、感想など、お待ちしております。

では、次回予告。

己の魂が命ずるままに行動する、と宣言した勇吾。

勇吾は果たしてどちらを選ぶのか？

「俺が恋人として、傍に居て欲しいのは――」

勇吾の瞳が捉えたのは、紫亜か紅葉か。
って感じになります。

ちなみに次回、最終話です。

最後まで、勇吾の恋愛事情にお付き合い頂ければ幸いです。

実る想いと碎ける想い（前書き）

PC推奨。

これが最終話になります。

では、本編をどうぞ。

実る想いと碎ける想い

空が青い。昨日の曇り空は何だったんだと思うほどに、ただひたすら青い。

勇吾は学校の屋上で一人、天を仰いでいた。

今は放課後。

昨日昂に発破を掛けられた勇吾は、今日これから、紫亜と紅葉をここに呼び出し、答えを出すつもりだった。

既に二人には、その旨を伝えてある。

ハッキリと決着を着けるため、敢えて二人を同時に呼び出し、真っ正面から答えを示す。

それが、勇吾の出した結論だった。

これから勇吾が示す答えは、紫亜か紅葉、必ずどちらかを傷つける事になる。

ならばせめて、そこから目を逸らさずに、彼女らの想いに応えねばならないだろう。

勇吾は安全配慮の為のフェンスにもたれ掛かって、頭上に広がる青空を眺め続けていた。

勇吾はその青一色の視界に、微かな白を見つけた。

ポツリと、眩きが洩れる。

「雲一つ無い空、って訳にはいかないみたいだな」

広々とした空の青いキャンバスに、雲がほんの少し、白く刻まれていた。

「やっぱり、全てが上手くいく方法は無いって事かもな」

どれだけ綺麗に見える物でも、どこかに綻びがあって、人はそこから逃げる事は出来ない。

逃げ出せば、後で必ず追いついてきて、手痛いシツペ返しを喰らう羽目になる。

「そうならない為の——いや、そうさせない為の、この方法だ。逃げ出す事も、目を逸らす事も、もうしない」

決意の言葉を呟く。

だがそれは、ただの確認だ。覚悟なら、昨日何度も決めている。

——と、勇吾の立つ位置から丁度正面で、重厚な扉が開く音がした。

勇吾は空から視線を引き剥がして、正面を見据える。

金属製の、少し錆びた扉から姿を見せたのは、勇吾が待っていた二人の少女だった。

「よお」

軽く手を上げて、呼びかける。

内心は少し乱れてしまったが、表に出さない程度には、勇吾は落ち着いていた。

対する少女たち——紫亜と紅葉は、かなり緊張している様子で、身を硬くしている。

「こんにちは」

「やつほ」

それぞれ、呼びかけに応えてくる。

紫亜はいかにも緊張した声色で、紅葉は努めて明るく言っているようだったが、声は震えていた。

「ハッキリと、伝える事にしたよ。——」人がそうしたように、本

当の俺の気持ちを、な」

二人の目の前まで移動して、勇吾は言った。心臓がやかましく猛っていたが、無視する。

紫亜と紅葉がより緊張を高めたのが、気配で知れた。

勇吾の緊張も馬鹿みたいに高まったが、それは一瞬だった。息吹を一つ、大きく吐き出すと、不思議と心が落ち着いてきた。

「俺は少し前まで、紫亜と紅葉、二人とも好きなんだと思ってた。二人と一緒にいると、心臓が暴れだして、自制が乱れた。それは恋だ、とある人に言われて、俺はそうだと思い込んでいたんだ。——でも、本当は違った。俺の心に常に居たのは、惚れてる女は、一人だけだった。……俺が生まれて初めて、好きになったのは——」

そこで、一旦言葉を切った。一步、彼女らに近づく。

そして、告げた。

彼女の名を。

「——紫亜。お前なんだ」

言葉を解き放つと同時に、勇吾は右手を差し出した。

紫亜はその手を見つめて、酷く動揺した様子で聞き返した。

「私……？ 本当に、私で良いの？」

「『紫亜で良い』じゃない。『紫亜じゃないと駄目』なんだ」

堂々と、宣言する。既に勇吾は思考していない——ただ、感情だけを口に出している。

それに、紫亜はますます動揺したようで、顔を真っ赤にして言った。
「え、あ、あう……そのあの——きゃうっ」

最後のは、あたふたと慌てる紫亜の背中を、紅葉がぶつ叩いた為に洩れた、紫亜の悲鳴である。

思わず涙目で、紫亜が紅葉に言う。

「ね、姉さん？」

「紫亜っ！ 何モタモタしてんのよ！？ あんたがそれじゃ、あたしの立つ瀬が無いでしょ！？ ほら、とっととそっち行く！」

「あ……うん」

紅葉の大声に背中を押されたのか、紫亜しっかりと頷いて、勇吾に向き直った。

「え、と……私で良ければ、よろしくお願いしますっ！」

少し勢い余った感じで勇吾の手を握り、頭を下げる紫亜。

勇吾は自分の手と比べるとかなり小さな紫亜の手を、しっかりと握り返した。

「こちらこそ、よろしく頼む」

この瞬間、勇吾と紫亜は、紛れも無く、恋人同士となった。

と、同時に、横から紅葉の声がした。

「勇吾」

名を呼ばれた勇吾は、体ごと向き直って紅葉に視線を送る。

「私の妹を傷つけたら、承知しないからね」

それに、勇吾は苦笑して——数瞬後に触れれば切れそうな程に真剣な表情を浮かべた。

「無論だ。紫亜に刃を向ける者は——俺が全て潰す」

低い、ただし確たる意志の込められた声で、勇吾は告げた。

というか、紫亜に牙を剥く者が実際に出てきたら、本気で殺しかねない程の雰囲気だ。

「そう。じゃ、紫亜の事、頼んだわよ」

「ああ、任せろ。……もう時間も遅い。そろそろ帰ろうか」

紅葉の言葉に頷いてから、勇吾は提案した。
それに、紫亜が頷いた。

「うん。そうしようか」

「私はもう少しここに居るわ」

「そうか。じゃあ、また、な」

短く返事をして、勇吾は紅葉に背を向けた。

勇吾は敢えてそれ以上、紅葉に話しかけようとはしなかった。

今、勇吾が彼女に掛けられる言葉は、恐らく何も無い。

それは、勇吾にも分かっている事だったからだ。

勇吾は紫亜に「行こう」と呟いて、彼女の手を引き——ゆっくりと
歩き出したのだった。

「あーあ、振られちゃった」

誰も居なくなつた屋上で、紅葉は小さく呟いた。

青い空が忌々しいくらいに綺麗だ。

「でも、私の心までは晴れてくれなかった」

「そうらしいな」

思わず洩れた言葉に、何故か答える者がいた。

誰だろう、さつきまで誰も居なかったのに。

「泣かないんだな。紅葉は」

言いながら近づいて来たのは、相変わらず陽気な表情の昴だった。

「泣かないわよ。みつともないから」

紅葉は努めて平静を保って切り返す。

が、昴はそんな紅葉の心を見透かすように、即座に言ってきた。

「嘘だな。お前は泣くよ。家には紫亜が居て泣けないから、ここで泣く」

「泣かない」

紅葉は意地になって言い返したが、昴はそれすらも分かっていたらしく、また即座に言った。

「下手くそ。嘘なんてもんは、せめて表情くらい取り繕ってから吐くものだ。それに。俺はお前がどれだけ勇吾の事を好きだったか、よく知ってる。だから、なんとなくだが予測がつくんだ。一人で泣くつもりなんだろう？ 声を殺して、たった一人で」

「……」

紅葉は何も言えなくなった。全て昴の言う通りだったからだ。

昴は紅葉を真っ直ぐに見つめて、続けた。

「でもそれじゃ、あんまり泣く意味が無いと、俺は思うがね。どうせなら、思いつきり泣けよ。例えば、誰かの胸の中とか——おや？ 丁度良いところに俺の胸があるな」

くだらない——というより、ひたすらに軽薄な事を言いながら、昴はゆっくり紅葉に近づくと、優しく頭を撫でた。

「う……あ……」

すると少しずつ、紅葉の表情が崩れていき、そして、堪え切れなくなったのか、昴の胸に縋り付いた。

「……届かなかった……振られちゃったよお……！ 勇吾の隣に居たかった！ でも……私じゃダメだった！」

昴は紅葉の言葉を全て聞き止めて、想いの全てを受け止めていった。優しく紅葉の頭を撫でてやりながら、胸中だけで、呟きを零す。

（キャラじゃないんだけどな。こういうのは。だが、たまにはこういう役回りも必要か）

泣きじゃくる紅葉を見ながら、昴はただ黙って、今ここには居ない友人に思いを馳せた。

——ただひたすらに青く在る空が、二人の姿を見下ろしている。

微かにあつた白い雲は、もう風に流されて、どこか違う景色へと消えていた。

いつもと同じ帰り道——いつも通っている、感慨も何も無い筈の道を、勇吾は新鮮な気持ちで歩いていた。

いつもは空っぽの掌には、小さく、柔らかい感触。

勇吾は自分が握っている物——紫亜の手に視線を送って、それから紫亜自身を視界に収めた。

そう、隣には、彼女が——恋人になった紫亜がいる。

それだけで、自分の中の何かが満たされたような気分になった。

「どうしたの？」

勇吾がずっと見つめていると、紫亜が恥ずかしそうに言ってきた。

「いや、何でもない」

勇吾は照れ隠しに視線を紫亜から外して、前を見た。

なんとなく、勇吾は思う。

これが幸せなんだろうな、と。

今、自分は世界で一番幸せなのではないか、とさえ思える。

隣には大好きな恋人しゅあいがいて、背中を任せられる親友すはとももいる。
紅葉とだって、きっと友達として、同じ道を往けるだろう。

（これからの人生色々あるだろうが、この幸福しあわせだけは、何があっても守ろう）

そう、強く心に刻み込む。

そして――勇吾は繋いでいた紫亜の手を、少し強く握り直した。

実る想いと碎ける想い（後書き）

最近、大あくびした拍子にアゴが外れかけました。
へっぽこ物書き、龍之介です。

このお話で『緒方勇吾の恋愛事情』は完結します。
作者の遅筆が原因で半年もかかりましたが、なんとか終わりました。
今後もこの『小説家になろう!』で執筆を続ける予定ですので、こ
れからもよろしく願います。

では、またどこかの後書きでお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9280a/>

緒方勇吾の恋愛事情

2010年10月8日13時21分発行